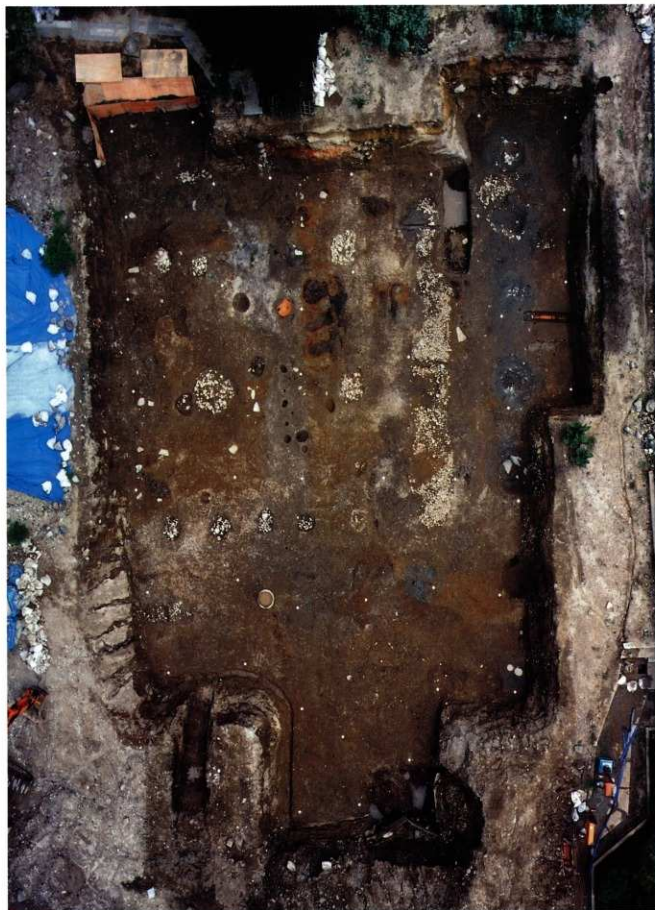


三重県桑名市

桑名城下町遺跡発掘調査報告書  
萱町93（法盛寺）地点

2002.3

桑名市教育委員会



Ⅲ面 全景

カラー写真図版 1



出土遺物



「寛文年間 桑名町絵図」 (寛文年間,1661-73)





「文政年間 桑名市街之図」 (文政6年、(1823年)か)

## 例 言

- 1 本書は三重県桑名市芝町93番地に所在する桑名城下町遺跡（市遺跡№99）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は本堂建設事前調査として、原因者負担を受けて行った。
- 3 現地での調査は平成11年5月28日から9月30日にかけて実施した。室内での整理作業は平成12年8月1日から平成14年3月25日にかけて実施した。

- 4 調査体制は以下のとおりである。

調査主体 桑名市教育委員会  
調査担当 平野亜紀（桑名市教育委員会）  
調査補助員 日紫喜勝重、水谷吏江  
調査参加者

長沼毅、勝亦貴之、水谷恵二（以上愛知学院大学大学院学生）、岡本教子、大杉規之、大村至広、竹内弘光、岩間裕治、後田将志、高木真紀、水野義隆、浅野直士、大橋寛幸、北井隼人、佐野梓、秋山清爾、瀧澤裕介、真野敏彦、宮嶋克明（以上愛知学院大学学生）、後藤千佳（南山大学学生）、安中祥子、安中仁美、石川清文、稲垣英三子、太田次夫、中野義弘、真野辰江、渡部一正

なお、試掘調査及び文化財保護法に基づく諸手続及び調整事務等については水谷芳春（桑名市教育委員会）が担当し、現地調査及び報告書作成については齊藤理（桑名市教育委員会）の協力を得た。

- 5 発掘調査に伴う調査掘削を山家建設株式会社、空中写真測量を株式会社イビソク、自然科学分析を株式会社パレオ・ラボ、出土遺物の分析及び遺物実測の一部を国際航業株式会社、報告書作成業務をアイシン精機株式会社にそれぞれ委託した。
- 6 本報告は第2章第1節を長沼、第2節を勝亦、第7章を梶ヶ山真里（国立科学博物館人類研究部）、大谷江里（東京大学大学院理学系研究科博士課程）、馬場悠男（国立科学博物館人類研究部）、第8章を植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）、第9章をバリノ・サーヴェイ株式会社、その他を平野が執筆した。文献資料の調査および墨書等の文字資料の判読は長沼、勝亦が行い、全体の編集は大杉、水谷吏江の協力を得て、平野が行った。
- 7 発掘調査及び本書の作成過程において、下記の機関、方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。（敬称略、順不同）

三重県教育委員会、鎮国守国神社、桑名市博物館、株式会社クイックス、浅野弘子（名古屋博物館）、石神教親（多度町教育委員会）、稲垣正宏（滋賀県文化財保護協会）、井上喜久男（愛知県埋蔵資料館）、尾野善裕（京都国立博物館）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、佐藤公保（愛知県埋蔵文化財センター）、鳩谷和彦（堺市埋蔵文化財センター）、田口昭二（瑞浪陶磁資料館）、水野裕之（名古屋見晴台考古資料館）、福島金治（愛知学院大学）、松齒齊（愛知学院大学）、山中雅子（名城大学）、リチャード・L・ウィルソン（国際基督教大学）

なお、出土した萬古焼についてご指導をいただいた中西純子（朝日町教育委員会）は平成13年1月に急逝された。謹んでご冥福を申し上げます。

- 8 本調査は、法盛寺住職福井照真、副住職福井孝尚、両氏をはじめ、法盛寺責任役員及び門徒総代、法盛寺総合整備事業建設委員会の方々の、文化財に対する深いご理解のもと実施することができた。調査に対する格別のご協力、ご援助に対して厚く御礼申し上げます。
- 9 現地調査に関しては、地元の方々に格別の援助をいただいた。厚く御礼申し上げます。
- 10 本調査に関する記録及び出土遺物などの諸資料は桑名市教育委員会にて保管している。



# 目 次

## 本 文 目 次

第1章 位置と環境	1	第1節 土坑	15
第2章 法盛寺の歴史の変遷	3	第2節 杭	15
第1節 中世における法盛寺	3	第7章 出土人骨の分析	29
第2節 近世における法盛寺	4	第1節 人骨所見	29
第3章 調査に至る経緯と経過	6	第2節 考察	38
第1節 調査に至る経緯	6	第3節 結語	39
第2節 調査経過	6	第8章 IV面墓出土木製品の樹種同定	46
第4章 III面の調査	7	第1節 樹種同定試料の選別と樹種同定の方法	46
第1節 建設跡	7	第2節 結果	46
第2節 溝	8	第3節 まとめ	49
第3節 土坑	8	第9章 木製品・種子製品の同定	57
第4節 竈	8	第1節 試料	57
第5節 土管列	9	第2節 方法	57
第5章 IV面の調査	10	第3節 結果	57
第1節 墓	10	第4節 考察	58
第2節 杭群	14	第10章 まとめ	61
第3節 不明遺構	14	第1節 各遺構面の時期について	61
第4節 土坑	14	第2節 IV面の墓城と出土人骨について	61
第5節 瓦列	14	第3節 刻印瓦について	62
第6節 石列	14	第4節 中世の遺物について	62
第6章 V面の調査	15		

## 表 目 次

表1 遺物一覧表	16	表15 木管4出土成人男性頭蓋小変異	40
表2 遺物一覧表	17	表16 桑名市法盛寺出土四肢骨計測値	41
表3 遺物一覧表	18	表17 桑名市法盛寺出土四肢骨計測値	42
表4 遺物一覧表	19	表18 桑名市法盛寺出土四肢骨計測値	43
表5 遺物一覧表	20	表19 八丁堀3丁目遺跡出土人骨計測値	44
表6 遺物一覧表	21	表20 乳・幼児四肢骨最大長(敗米人)	45
表7 遺物一覧表	22	表21 写真図版14～22対応表	45
表8 遺物一覧表	23	表22 木棺の樹種	51
表9 瓦刻印・ヘラ書き一覧	24	表23 木棺の樹種	52
表10 瓦刻印・ヘラ書き一覧	25	表24 木棺の樹種	53
表11 刻印瓦出土地一覧	26	表25 木棺の樹種	54
表12 IV面木棺一覧表	27	表26 円形木棺の樹種	55
表13 IV面木棺一覧表	28	表27 方形木棺の樹種	56
表14 法盛寺出土人骨(幼児・成人)		表28 木製品の樹種	60
頭蓋計測値と成人男性頭蓋計測比較表	40	表29 樹種同定および種子同定結果	60

## カラー写真図版

カラー写真図版1  
カラー写真図版2

カラー写真図版3  
カラー写真図版4

## 図 版 目 次

図版1	調査地点位置図	64	図版25	遺物実測図	88
図版2	Ⅱ面平面図	65	図版26	遺物実測図	89
図版3	Ⅲ面断面図	66	図版27	遺物実測図	90
図版4	Ⅲ面断面図	67	図版28	遺物実測図	91
図版5	Ⅲ面断面図	68	図版29	遺物実測図	92
図版6	Ⅲ面・Ⅳ面断面図	69	図版30	遺物実測図	93
図版7	Ⅳ面平面図	70	図版31	遺物実測図	94
図版8	Ⅳ面平面図	71	図版32	遺物実測図	95
図版9	V面平面図・断面図	72	図版33	遺物実測図	96
図版10	V面断面図	73	図版34	遺物実測図	97
図版11	遺物実測図	74	図版35	遺物実測図	98
図版12	遺物実測図	75	図版36	遺物実測図	99
図版13	遺物実測図	76	図版37	遺物実測図	100
図版14	遺物実測図	77	図版38	遺物実測図	101
図版15	遺物実測図	78	図版39	遺物実測図	102
図版16	遺物実測図	79	図版40	遺物実測図	103
図版17	遺物実測図	80	図版41	遺物実測図	104
図版18	遺物実測図	81	図版42	遺物実測図	105
図版19	遺物実測図	82	図版43	遺物実測図	106
図版20	遺物実測図	83	図版44	遺物実測図	107
図版21	遺物実測図	84	図版45	出土瓦刻印拓本	108
図版22	遺物実測図	85	図版46	瓦へラ書き拓本	109
図版23	遺物実測図	86	図版47	出土瓦刻印拓本・瓦へラ書き拓本	110
図版24	遺物実測図	87	図版48	出土瓦刻印拓本・瓦へラ書き拓本	111

## 写 真 図 版

写真図版1	遺構写真	112	写真図版17	近世人骨	128
写真図版2	遺構写真	113	写真図版18	近世人骨	129
写真図版3	遺構写真	114	写真図版19	近世人骨	130
写真図版4	遺構写真	115	写真図版20	近世人骨	131
写真図版5	遺構写真	116	写真図版21	近世人骨	132
写真図版6	遺構写真	117	写真図版22	近世人骨	133
写真図版7	遺構写真	118	写真図版23	木製品樹種	134
写真図版8	遺構写真	119	写真図版24	木製品樹種	135
写真図版9	遺構写真	120	写真図版25	木製品樹種	136
写真図版10	遺物写真	121	写真図版26	木製品樹種	137
写真図版11	遺物写真	122	写真図版27	木製品樹種	138
写真図版12	遺物写真	123	写真図版28	木製品樹種	139
写真図版13	遺物写真	124	写真図版29	木製品樹種	140
写真図版14	近世人骨	125	写真図版30	木製品樹種	141
写真図版15	近世人骨	126	写真図版31	木製品樹種	142
写真図版16	近世人骨	127	写真図版32	木製品樹種	143

## 第1章 位置と環境

本調査地を内包する桑名城下町遺跡は、三重県桑名市に所在する。桑名市は三重県の北部に位置し、東方には長良川・揖斐川が流れ、伊勢湾に注いでいる。北西には養老山脈の東南端にあたる標高100～300mの丘陵がそびえる。市内には東西に員弁川がゆるやかに蛇行しながら流れ、その両岸には標高40～70m前後の丘陵地が広がっている。

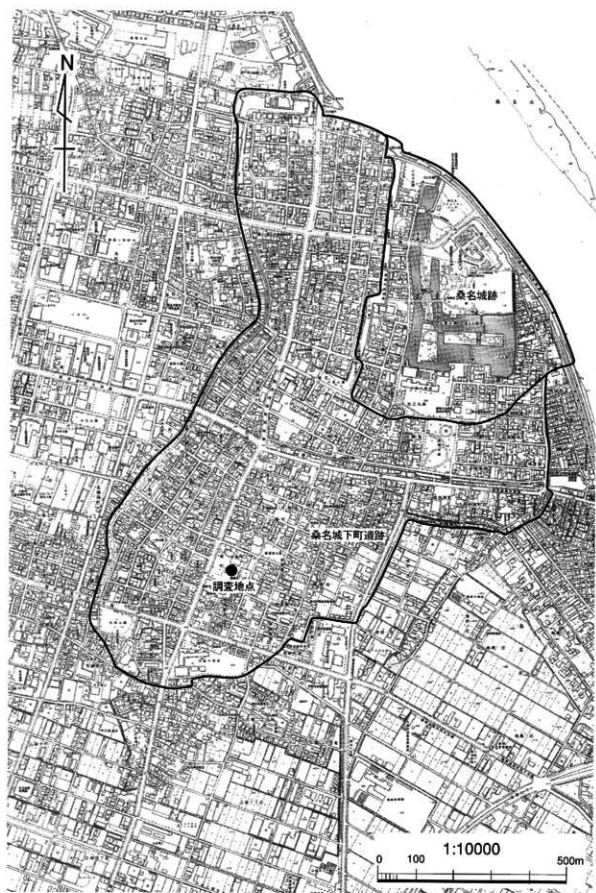
桑名城下町遺跡は桑名市東部の沖積地に立地する。この沖積地は標高も低く、河川の氾濫等もあったようで必ずしも安定していたとは言えず、近世以前は3つの洲崎に分かれていたとされている。桑名城下町として成立するのはその後、本多忠勝らによってすすめられたいわゆる「慶長の町割」等を経てからである。「慶長の町割」では町屋川（員弁川）を城下町の南側に付けかえて低湿地を新たに開発し、居住を可能にしたとされている。近年、桑名市教育委員会によって進められている桑名城下町遺跡の発掘調査によって遺構・遺物等が確認されている例も少なくない。伊賀町69地点や外堀24地点等では、柱穴や土坑等の遺構、大量の陶磁器類や木製品等が出土している。

また、桑名城二之丸堀の発掘調査では寛政九年銘の鬼瓦が堀の埋土中より出土している。これは御瓦師として長谷谷、藤原両氏の銘をもつもので、本調査において出土した刻印瓦との関連が指摘できる。

桑名城下町遺跡及びその周辺の遺跡では中世の遺物が出土する例も少なくない。外堀24地点においては山茶碗や古瀬戸、吉之丸45地点においては山茶碗、城下町の南の水田地帯に立地する勢以口遺跡からは灰軸陶器や山茶碗、古瀬戸等の他、中世のものと考えられる遺物包含層も確認されている。本調査でも最下層からは山茶碗、古瀬戸等の中世遺物がまとめて出土し、中世段階でも何らかの土地利用が為されたことが窺い知れるものである。

本調査は桑名城下町遺跡の南東部にあたる桑名市堂町93番地であり、現在は浄土真宗法盛寺が立地する。本尊は木像の阿弥陀如来像で、三尺余の歯を持つことから歯吹阿弥陀と呼ばれ、桑名市指定文化財となっている。

法盛寺は前述した慶長の町割の際に、益田荘三崎から堂町に移転したとされ、近世段階では一般に「柳堂」と呼称されていたようである。詳細な成立年代は不明であるが、『桑名名所図会』では「柳堂法盛寺」としての記載がみられ、発掘調査でも「柳」ないしは「柳堂」と記された遺物が数多く出土している。



調査地点位置図(1:10000)



## 第2章 法盛寺の歴史的変遷

法盛寺は、桑名市萱町の東側中央部にある浄土真宗の寺院である。本尊の木像阿彌陀如来立像は、桑名市の指定文化財となっている。この本尊は、『久波奈名所図会』や『勢桑見分略志』『桑府名勝志』『勢陽五鈴遺響』等の地誌類によって、近世段階よりその存在を知られている。歯吹如来と俗称され、奥州藤原秀衡の持仏とも、湛慶作とも伝えられている。

### 第1節 中世における法盛寺

中世末からの北伊勢における法盛寺の位置について考察した場合、重要な論点となるのが「柳堂」と法盛との関係であろう。今回の調査において、「柳」乃至「柳堂」の文字が記された遺物が数多く発掘されていることや、地誌類から<sup>(21)</sup>、近世段階において法盛寺が「柳堂」と称されていたことが判明する。しかし、従来この「柳堂」という名称がいつ頃から称されるようになったのかについてははっきりしていないので、この「柳堂」という呼称について検討してみたい。

『石山本願寺日記』<sup>(22)</sup>（以下『日記』と省略する）には、「法盛寺」と「柳堂」の二つの名が記載されており、法盛寺が三十日番衆を勤めていたことがわかる。この『日記』と、『御堂間日番上動座配次第』<sup>(23)</sup>という本願寺の三十日番衆として上番する寺院の月別配当の予定表を合わせて考察することによって、「法盛寺」と「柳堂」という二つの名称の関係がわかる。

三十日番衆は、「御堂番衆」とも呼ばれ、諸国の門末が石山本願寺へ上り、毎月28日の親誓の命日を「先番」との交替日として以後1ヶ月間、御堂で宗教的勤仕の当番にあたったことに由来するものであるが、金竜静氏の研究に詳しいため、ここでは簡単に言及しておく<sup>(24)</sup>。

『真宗故実伝来抄』<sup>(25)</sup>には、

位置、三十日番之事、[或ハ番衆ケ名ケヌヘオヒロイト云] 昔近国平僧中〔初中教ノ人数ニモレタル人々ナリ〕申合せ、三十日ツハ上京シ、御堂ノ御番ヲ勤シ也、是ハ考ルニ蓮師ヨリ已前ヨリ有シト覺ル也、〔越後浄教寺御影ヲ盗取シコロヨリ初ルカ〕運如三十日番下シ給フ御文アリ、然レトモイツトナク相罷ヌル故ニ、代役ヲ召カヘハラル、昔ノ名ヲ用ヒ三十日番トス

とあり、運如の時代の延徳頃（1489～1492）から番衆が存在していたことがわかる。ただ、その当番日数については、まだ30日間にはなっていなかったようで、『御堂間日番上動座配次第』に天文6年（1537）から記載されているものの、『日記』天文11年9月26日条の「齋をもちや新左衛門為志調備之、仍汁三、菜十三、茶子七種也、青侍共何も食之、於相伴者兼習、延深、常住衆、間日番衆、又自頭人方主迄三人出候」という記事が、三十日番衆の初見になることから、金竜氏は三十日番衆の体系的な成立を天文10～11年頃としている。

『御堂間日番上動座配次第』の天文6年6月には「柳堂阿彌陀寺」とあり、天文8年3月には「法盛寺」とあり、その記述の右側には「廿一」という傍注がある。この右側の傍注は前回上番した時から今回までの月数を示すものであり<sup>(26)</sup>、法盛寺が上番した天文8年3月から21ヶ月前に遡ると「柳堂阿彌陀寺」と記載され、天文6年6月に上番したことになる。ただ法盛寺の記載が抹消されているが、『日記』天文8年3月10日条には、法盛寺が上番している記述があり、『御堂間日番上動座配次第』が番衆の予定表であるという性格を考慮すると、この抹消は大して問題なく、柳堂＝法盛寺と考えてよいだろう。

さて、この柳堂、すなわち法盛寺は、北伊勢においてどのような存在であったのだろうか。

稲本記昭氏は、長島一揆の門徒の性格について考察しているが<sup>(27)</sup>、六角定頼が尾張に使者を派遣するのに際し、『日記』天文7年正月22日条には「伊勢とおりに越候へんほどに、渡などの儀をも無事不案内候間、長嶋并柳堂へ申付候」とある。「長島」とは、願証寺を指し、「柳堂」とは、先述の通り法盛寺を指すと考えられる。この『日記』の内容から、願証寺や法盛寺が北伊勢の交通を支配していたと解釈できるのである。

桑名支配をめぐる長野氏と梅戸氏の争いにおいて、願証寺が仲介したことからも、北伊勢における本願寺門徒の影響力の大きさが窺える。稲本氏は、「門徒の多くが木曾三川が形成した複雑な地形を我が庭のごとく知悉した漁業・水上交通・交易関係者」であり、「桑名を含めて北伊勢に独自の軍事的・政治的勢力として存在した」と指摘した。法盛寺も北伊勢において重要な位置を占めていたものと推測される。

## 第2節 近世における法盛寺

近世段階の法盛寺については、残存史料の状況から不明な点が多いが、ここでは地誌類や本願寺側の史料をもとに、その位置や役割について考察してみたい。

法盛寺は、慶長年間(1596-1614)に桑名三崎より萱町へ移ってきたと伝えられている。また、本堂は『三国地誌』『桑名賦』等の地誌において寛永年間(1624-1643)の創建とされる<sup>121)</sup>。これらの事実を確定できる史料は現在確認できていないが、萱町や多くの寺社が建ち並ぶ地域である。桑名藩は、慶長6年にいわゆる「慶長の町割」を行い城下町を築き上げ、藩主松平定勝の代の寛永年間に城下町を改修した<sup>122)</sup>。実際、承応3年(1654)の「勢州桑名城中之図」<sup>123)</sup>には、現在法盛寺が存在する場所に「寺」の表記が見られることから、これらの城下町の整備の過程において法盛寺の寺地も確定したと思われる。

その伽藍配置については、数度の災害のため再建を繰り返したことから時期的変遷を追うのは困難であるが<sup>124)</sup>、『久波宗名所図会』や『桑府名勝志』には東の間・西の間・書院・手洗所・茶所等を有す本堂と、経藏、鐘楼等があり、寺中に善龍寺・教宗寺・西福寺・専久寺・照林寺を有していたことが記され、当時の様子が窺える。

桑名藩における法盛寺の位置について考える際重要なものとして、法盛寺新田の存在が上げられる。この新田については、宝永4年(1707)の領内大洪水で消失したため<sup>125)</sup>、不明な点が多いが、『神風北勢往古記』には、法盛寺13世得全院<sup>126)</sup>の室見姓(聖)院は松平定重の庶子で、この室が入院の時、賄料として新田を付与されたと記されている。見姓(聖)院に関する記事の事実関係は不明であるが、法盛寺新田については、延宝2年5月21日の法盛寺宛の書状<sup>127)</sup>に、「其許御城主より貴寺へ新田地被遣候」とあり、その事実を確認できる。桑名藩が寺社に新田を付与したその他の事例について、今後検討を重ねなければならないが、少なくとも藩にとって法盛寺が重要な寺院の一つであったということは言えよう。

そして、桑名藩領内で発生した、いわゆる「文政一揆」において法盛寺が関与したという事実も重要である<sup>128)</sup>。この百姓による騒動は文政6年(1823)に発生した。桑名藩では、藩財政の補填のために助成講を設け、村毎に年2回徴収をしたが、同年藩主の国替となったため、この金の返還を藩に求め起こったものである。この騒動を鎮めるために百姓達を説得したのが法盛寺であった。桑名藩領内における法盛寺の末寺は、確認できるだけで18ヶ寺存在した<sup>129)</sup>。今回、騒動を起こした百姓の中にもそれらの檀家が多く含まれていたと考えられ、そのことから本寺である法盛寺が説得に当たったのであろう。

さらに、近世段階における法盛寺の役割を考える際重要なものに触頭制がある。法盛寺は、『桑名市史』では文化8年(1789)に伊勢国触頭になったとするが、『本願寺律令』より、これ以前の寛政元年(1789)の段階に触頭となっていたことが判明する<sup>130)</sup>。この触頭制については、千葉東隆氏と岡村喜史氏の研究があり、それらを参考に概略を述べておく<sup>131)</sup>。触頭とは、錯綜した本末制に代えて、末寺把握のために採用されたものであり、本末の上下関係とは別に、支配下の寺院に公儀(幕府・藩)や本山等の触書・達書に触れたり、支配下の寺院からの願書を取り次いだ。

では、法盛寺は触頭として具体的にどのような役割を果たしていたのであろうか。この点については、史料的制約もあり、その実態については不明な点が多いため、本願寺側の史料から考察してみたい。

『故実公儀書上』<sup>132)</sup>の「録所触頭之事」には

一録所・触頭と申者諸国末寺とも数多之事ゆへ、其国々江録所・触頭を立置諸事取締り申付候儀にて、録所之儀者其国々々々寺々支配付、公儀触触其外寺法等之儀、支配限り触流し、支配下より本江山江諸願之儀ハ本江山江之添簡仕、尤支配下之もの共不埒有之節ハ品ニより本江山江何之上取計候儀も御座候得共、多分ハ本江山江不及届ニ糺し之上軽重之無差別等申付、其段追而本江山江相届候仕来御座候但し録所・触頭在之場所ニ而も右支配下ニ而無之ハ、本山より直支配之儀ニて本山より直触ニ仕、其外之儀も本山より直之取計ニ御座候触頭之儀も録所同録等之儀ハ取計、支配下之もの共不埒等有之筋ハ糺し之上、軽キ儀ハ本江山江不及届ニ各等申付候得共、重キ儀ハ本江山江何之上取計候仕来ニ御座候、尤録所・触頭之もの共不埒之儀ハ、本山より糺し之上裁申付儀ニ御座候

とあり、触頭は本山の触等を支配下の寺院に通知していた。また支配下の寺院に不埒な者がある場合、その罪が重い場合は本山に届け裁断を仰ぐことになるが、軽い場合には触頭が裁断することになっている。

また「後住継目住持相続之事」には、

後住継目之儀、嫡子へ相願度旨録所又ハ触頭江申出候へハ、相糺し候上、添簡差出候、右添簡申請候て、本江山江京仕、相願候得者、被承届其式御座候、継目免状被差出候、

とあり、また「当本山末寺共養子仕候節、其国々触頭へ相願候而、触頭ニ而得与承候上、本江山江申上候へハ於本山被致許容候儀御座候」とあることから、嫡子相続、養子についての本山への願書は触頭を経ることになっている。

隠居、後住、新任職の任命については、「末寺共之内ニても、至而輕もの共、改、道場看坊等之儀ハ、品ニより録所・触頭・上寺より取計候儀も御座候」とあり、また「住職等之儀相願候節ハ、其所之録所・触頭より書付差添、右本人、本山へ

願出候へハ万端取しらへ之上ニ而、住職被致免許候」とあることや、「諸国末寺共辺江御願筋御座候節者、京都本山并国々触頭江申出候上、本山并触頭より築地掛所迄の詔簡を以罷出申候付、築地掛所ニ而得与承礼候上、拙寺共詔簡を以寺社奉行書江差出申儀ニ御座候」とあることから、支配内の住職の改替については、本山ないしは寺社奉行に届けるに際し、触頭が取り次ぎを行っている。

末寺廻りについては、『寺法品節』<sup>(2120)</sup>に

一他国江立越、致説法財論を貪類事、古来より聖制すといへとも、今以端々有之由不届之至ニ候、急度可令停止。但、末寺廻りハ格別之事故、本寺又ハ触頭江相届可受差因事

とあり、本来禁止されている他国への末寺廻りは、特別の事情がある場合、触頭の指示を受けることになっている。

以上のように、触頭は本山と支配下の寺院の間において取次役を果たしていた<sup>(2121)</sup>。もちろん、これら触頭の役割は、本願寺の法度や本願寺から幕府への回答書から導き出されたものであり、その実態は伊勢国内における法盛寺の位置等から総合的に判断する必要があるが<sup>(2122)</sup>、法盛寺も、触頭として本山と支配下之寺院の取次役を果たしていたと思われる。

註 (1) 『桑名名勝志』や『勢国見聞集』（『松坂市史』巻8所収）に「柳堂法盛寺」とある。

(2) 『石山本願寺日記』上巻（清文堂出版、1984年、初版1930年）。

(3) 北西弘編『真宗史料集成 第三巻 一向一揆』（同朋舎、1979年）所収。

(4) 金竜静『「問日番衆」考』（『名古屋大学日本史論集』上巻、吉川弘文館、1975年）。

(5) 千葉榮隆編『真宗史料集成 第九巻 教団の制度化』（同朋舎、1976年）所収。なお、[ ]内は割註である。

(6) 金竜静前掲論文。

(7) 稲本紀昭『織田信長と長島一揆』（朝尾直弘教授戴冠記念会編『日本国家の史的特質 近世・近代』思文閣出版、1995年）。

(8) 『桑名市史』では、寛永18年の創建とする。

(9) 西羽晃『桑名藩』（児玉幸幸・北島正元監修『新編物語藩史』第7巻、新人物往来社、1977年）。

(10) 『正保城絵図』（国立公文書館、1976年）所収。

(11) 本堂は、寛文5年（1665）8月16日炎上したため、貞享3年（1686）6月造立した。弘化4年（1847）より再建が試みられたが、嘉永3年（1851）の夜風雨のため全壊し、安政4年（1857）年になり完成した（『桑名市史』）。

(12) 西羽前掲論文。

(13) 得全院寂然とは本願寺准如上人の嫡孫であったため、以来法盛寺は代々本山司監勘番、准連枝の格となった（『桑名市史』）。

(14) 福間光昭編『本願寺史料集成 諸国江道書状之留一』（同朋舎、1982年）所収。

(15) 山中稚子『文政一揆について』（桑名市民大学講座、2001年12月10日）。この騒動における法盛寺の関与については、同氏のご教示を得た。

(16) 『桑名藩御願分郷村案内帳』（北勢史談会、1952年）。

(17) 前掲註(5)所収。なお、岡村喜史氏は、少なくとも安永年間（1772～1780）には完成した形で制度化されていたとしている（『本願寺触頭制について』、『龍谷史壇』95号、1989年）。

(18) 千葉榮隆『近世真宗教団の本末構造』（『近世佛教 史料と研究』第2号、1960年）、同「真宗教団における寺院統制—とくに触頭制度について—」（『龍谷史壇』56・57合併号、1966年）、同『真宗教団の組織と制度』（同朋舎、1978年）、岡村喜史前掲論文。

(19) 前掲註(5)所収。

(20) 前掲註(5)所収。

(21) 触頭がもつ経済的位置については、岡村喜史「近世における中本山経済の側面—備後国山南光照寺を中心として—」（『仏教史学研究』37巻1号、1994年）を参照。

(22) 大桑齊氏は、「藩藩制国家の仏教統制—新寺禁止令をめぐって—」において、藩の触を藩の寺社奉行から受け、領内の自宗派寺院に対し伝達する役割を担った触頭が存在を指摘し、特にこれを「国法触頭」と名付けて検討していく必要性を主張している（室室文雄・大桑齊編『近世仏教の諸問題』雄山閣出版、1979年）。法盛寺の文化8年になったとされる触頭も、この「国法触頭」の可能性がある。現在、多数の所在が確認されている桑名藩の触頭類より、桑名藩における寺社行政を検討する必要がある。

## 第3章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

平成9年10月16日付教文第391号にて、宗教学法人法盛寺（代表役員福井照真）から、桑名市萱町93番地に所在する法盛寺本堂の建て替えに際して、文化財の所在の有無及びその取り扱いを照会する文書が桑名市教育委員会に提出された。史教育委員会は周知の遺跡である桑名城下町遺跡（市遺跡No.99）の範囲内であること、遺構に影響する開発を行う場合は事前に発掘調査による記録保存が必要である旨を回答した。

その後協議を重ねるとともに、市教育委員会は遺構の有無及び残存状況を確認するための試掘調査を行った。試掘調査では、戦災復興等によって擾乱を受けている部分もあったものの、遺構及び遺物包含層が良好に残存する部分を確認された。試掘結果をもとに再度協議を行ったが、本堂建設の工法上、現状保存が困難と考えられる部分に関しては、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

法盛寺より、文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を受けた市教育委員会では、平成10年1月5日付教文第391の4号で三重県教育委員会に届出を行い、文化課学芸員平野亜紀を調査担当者として平成11年5月28日に発掘調査に着手した。文化庁に対する埋蔵文化財発掘調査着手の報告は、文化財保護法第98条の2第1項に基づき、平成11年6月25日付教文第61の2号にて行った。

### 第2節 調査経過

調査は上層から順次掘削を行った。0.2mもレベルで遺構と考えられる掘り込み等が検出され精査を行った。その結果、建物跡、竈等の遺構が確認されたため遺構面と認識し、Ⅲ面として写真撮影、測量などを行った。Ⅰ、Ⅱ面については桑名市教育委員会『桑名城下町遺跡発掘調査報告書～萱町93地点～』（2001）ですでに報告している。Ⅲ面の建物跡の土坑、溝には礫が充填されており、まず礫の充填された状態での測量を行うこととした。祖苦慮はラジコンヘリコプタによる写真測量を採用し、株式会社イビソクに業務委託した。写真撮影は8月23日に実施している。礫の充填された土坑、溝はその状況を確認するため半裁し、断面図を作成している。竈は焚口に大して垂直方向に半裁を行い、断面図等の記録をとった後、残り半分を掘削することとした。また、補修の可能性が考えられたため、構築状況の確認のための断ち割り調査を行った。その結果、ほとんどの竈について補修の痕跡が確認できた。Ⅲ面の調査は8月25日に終了している。

その後下層の状況を把握すべく、トレンチを設定し掘り下げたところ、-0.2mのレベルで遺構の一部が確認されたため、Ⅳ面として調査区全面での掘り下げを行った。Ⅳ面では墓、石列など遺構が確認された。墓は調査区の南東隅に密集して検出され、多数の木棺と人骨が確認されている。Ⅳ面の調査は墓域の調査が長引いたものの、平板測量を行いおおむね9月21日に終了した。

さらに下層ではⅤ面を検出している。これはやはりⅣ面から掘削したトレンチによって確認されたもので、湧水が激しく遺構面の観察が困難であったが、土坑5基等を検出した。調査区壁面の崩落の危険性があったため、調査区を狭めての調査であったが、中世の遺物が出土する等の成果が見られた。Ⅴ面は平板測量を行い、9月30日に現地での調査を終了した。

## 第4章 III面の調査

III面は約0.200mのレベルで検出された遺構面である。遺構は土坑16基、竈3基、土間等によって構成される建物跡1棟、溝3条、土坑1基、竈6基、土管列1条が検出された。如何に詳細を記す。出土遺物については一覧表を参照されたい。

### 第1節 建物跡

調査区の北端中央部分で検出された。柱穴と考えられる土坑16基（土坑1～16）から成る。土坑はおおむね直線的に配置されており、南北方向に土坑1～5、土坑7～10、土坑11、12、6の3列、東西方向に土坑5、6、10、16、土坑2、12、8の2列を検出した。土坑にはそれぞれ根石と考えられる礫が充填されており、これらの礫の上部には、上部構造を支えるための礎石が乗るものと考えられるが礎石は検出されなかった。これらの礫の最上部のレベルはほぼ等しく、土坑の間隔はおおむね1間（約1.8m）あるいはその倍数となっている。建物全体の小保は、北端が調査区外となり、検出されていないため不明である。

また、土坑13と土坑4の間から東に延び、土坑15付近で北へ屈曲、土坑14付近で東へ屈曲し、土坑8と土坑9の間に東に延びる部分は遺構面が非常に固く締っている（図版2平面図点線内）。柱穴の配置から土間と考えられる。

南東隅には焚口を南に向けた竈3基が検出された。後述するが、これらは同時に構築されたもので、1組と考えて差し支えないものである。土坑の配置から建物跡に付随するものと考えられる。

以下に遺構毎の詳細を述べる。

**土坑1** 東西1.0m、南北0.8m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。直径5～30cmの礫が大量に検出された。

**土坑2** 東西0.9m、深さ0.3mのやや不整形な円形の土坑である。直径5～30cmの礫が大量に検出された。

**土坑3** 東西0.9m、南北0.7m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。直径5～10cmの礫が大量に検出された。

**土坑4** 東西0.8m、南北0.9m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。直径5～15cmの礫が大量に検出された。

**土坑5** 直径0.6m、深さ0.1mのほぼ正円形の土坑である。直径5～15cmの礫が大量に検出された。

**土坑6** 直径1.2m、深さ0.1mのやや不整形な円形の土坑である。直径5～15cmの礫が大量に検出された。

**土坑7** 直径0.8m、深さ0.3mのほぼ正円形の土坑である。直径5～10cmの礫が大量に検出された。

**土坑8** 直径0.8m、深さ0.3mの不整形な円形の土坑である。直径5cmほどの礫が大量に検出された。

**土坑9** 東西1.0m、南北0.9m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。直径5～10cmの礫が大量に検出された。

**土坑10** 直径1m、深さ0.3mのほぼ正円形の土坑である。直径5～20cmの礫が大量に検出された。

**土坑11** 直径0.8m、深さ0.1mの不整形な円形の土坑である。建物跡のほぼ中央に位置し、土坑12のすぐ北に隣接する土坑である。礫が大量に充填された状況や最上部のレベル等からこれも礎石を支えるためのものと考えられる。

**土坑12** 直径1.3、深さ0.3mのほぼ正円形の土坑である。建物跡のほぼ中央に位置し、他の土坑に比べて規模が若干大きい。直径5～15cmの礫が大量に検出された。

**土坑13** 東西0.9m、南北0.8m、深さ0.15mの楕円形の土坑である。埋土に礫は含まれているものの、他の土坑と比べると量は少ない。土間が土坑13を避けるように伸びているため、建物跡と同時期に存在したと思われる。建物の床を支える束柱のための土坑であろうか。

**土坑14** 土間上で検出された直径0.8m、深さ0.2mのほぼ正円形の土坑である。断面は挿鉢状となり、土坑15と同様に甕が埋設されていた可能性がある。

**土坑15** 土間上で検出された直径1.1m、深さ0.3mのほぼ正円形の土坑である。常滑産の甕の下半部が原位置を保った状態で出土した。上部は破損している。甕の内面に付着物は認められず、水甕として使用されていたと思われる。

**土坑16** 直径0.8m、深さ0.2mの不整形な円形の土坑である。礫が大量に検出された。

**竈1** 床面の直径が0.9mの円形の燃焼室を持つ竈である。底部とその立ちあがり際の壁部の一部のみ検出された。削平されているため上部の様子は不明である。焚口は南を向き、焚口の手前となる南側に灰を掻き出している。燃焼にともなう灰層は黒色及び白灰色のものが厚さ13cmにわたって堆積していた。底部と壁面はスサ入りの黄灰色土（図版4竈1、竈2、竈3断面図の50層（48層）、35層（36層））で構築されており、黄灰色土層は部分的に被熱の痕跡が認められた。

埋土は灰層がほとんどで、炭粒や焼土を含んだ灰層も確認できた。また、被熱した鉄釘がまとまって出土しており、廃材などを燃料としていた可能性が考えられる。

断り割り調査の結果、原位置を保った床あるいは壁面と考えられるスサ混じりの黄灰色土（図版4竈1、竈2、竈3断面図の40層、41層、42層、47層等）が4ヶ所検出された。加えて黄灰色土層が被熱し赤化したと思われる焼土層（37

層、47層等）も認められることから数度の補修が行われていたと考えられる。また、燃焼と補修を繰り返すうちに徐々に小型化していくことも確認された。壁面からは竈の構築材と考えられる瓦が検出された。これらはスサ入りの黄灰色土を間に挟みながらほぼ水平に最大4段積まれているが、壁面に塗り込められた形となっており、燃焼室に露出はしていない。瓦は平瓦ないしは椀瓦の破片で燃焼前に開けられた小孔には銅線や鉄釘が残り、竈に転用されたものであることがわかる。

なお、竈1の東側に隣接する竈5は、竈1を構築する黄灰色土層（35層）によって切られており、竈5が先行して存在したことがうかがえる。

竈2 床面の直径0.9mの円形の燃焼室を持つ竈である。底部とその立ちあがり際の壁部の一部のみ検出された。竈1と同様に上部の様子は不明である。黄灰色土で構築される（図版4竈1、竈2、竈3断面図の25層（27層）、50層（49層））構造や埋土の状況は竈1と同様で、補修もスサ入りの黄灰色土（29層、54層等）によって行われている。

埋土から鉄釘が出土していることから、腐材などを燃料としていた可能性が考えられる。

竈3 床面の直径0.8mの円形の燃焼室を持つ竈である。底部とその立ちあがり際の壁部の一部のみ検出された。黄灰色土で構築（図版4竈1、竈2、竈3断面図の4層（10層）、25層（26層））される構造や埋土の状況は竈1、2と同様で、補修もスサ混じりの黄灰色土（11層、19層、24層等）によって行われている。黄灰色土層が被熱し、赤化したと思われる18層（19層）も認められる。

竈4とは切り合い関係にあり、竈4が先行する。

竈1～3は東西3.6m、南北1.8m、深さ0.2mの土坑状の掘り込み内に構築されているが、燃焼による被熱や灰の掻き出しが繰り返された結果、平面形等が不明瞭となっており、竈構築時の土坑とは断定できなかった。竈の構造や構築法に関わる重要な問題と考えるため、今後類例を持って検討を加えたい。

また、竈1と2、2と3はそれぞれ隣接する側壁を共有しており、スサ入りの黄灰色土と瓦による構築法も共通すること等から同時期に存在したことは明らかで、3基1組として使用されていたと考えられる。

## 第2節 溝

溝1 全長11.5m、最大幅1.8m、深さ約0.2mの溝で、東西に長く、土坑5、6、10、16と平行する。埋土からは充填されたと思われる直径3～20cmの礫が大量に検出された。

溝2 検出された長さ2.5m、幅0.7m、深さ0.1mの溝で、南北に長く、土坑1～5とほぼ平行する。調査区の北側に延びているため全長は不明である。埋土からは直径5～10cmの礫が大量に検出された。

溝3 南北に長く、検出された長さ1m、幅1m、深さ0.2mの溝で、土坑7～10と平行する。南端が調査区外に延びているため、全長などは不明である。埋土には他の溝と同様に直径5～20cmの礫が大量に検出された。溝の底部は青灰色に還元されており、滞水する状況にあったと思われる。

これらの溝は建物跡を構成する土坑とほぼ平行となり、建物跡を意識した区画を保っているとも考えられる。

## 第3節 土坑

土坑17 東西1.2m、南北3.6mの楕円形土坑である。破損した平瓦、椀瓦などが垂直に立てた状態で144枚検出された。性格は不明である。

## 第4節 竈

竈4 東西0.5m、南北0.9mの半円形の被熱面が検出された。全体の規模や上部の様子は不明であるが、竈の燃焼室の床面と考えられる。前述したとおり、竈3とは切り合い関係にあり、竈4が先行する。竈内面は被熱により赤く変色していた。竈1～3と同じく、底部と壁面は黄灰色土（図版4竈1、竈2、竈3断面図の1層（13層）、図版5竈3、竈4断面図の10層）によって構築されており、黄灰色土（図版5竈、竈4断面図の2層、4層、5層）による補修も確認できた。埋土には白色灰層が確認された。

竈5 南北0.5mの三日月形の被熱面が検出された。竈の燃焼室床面と考えられる。竈1とは切り合い関係にあり、竈5が先行する。全体の規模、焚口の向きは不明である。

竈6 床面の直径0.8mの円形の燃焼室を持つ竈である。底部とその立ちあがり際の底部の一部のみ検出された。削平されているため上部の様子は不明である。焚口は北を向き、焚口の手前となる北側に灰を掻き出している。燃焼にともなう灰層は黒色灰層（図版6Ⅲ面竈6断面図の3層）が厚さ3cmにわたって堆積していた。底部と壁面はスサ入りの黄

灰色土（図版6Ⅲ面竈6断面図の7層）によって構築されており、黄灰色土には部分的に被熱の痕跡が認められた。また、埋土からは被熱した鉄釘が出土しており、燃料に腐材を利用していた可能性が考えられる。

**竈7** 床面の直径0.8mのやや不整形な円形の燃焼室を持つ竈である。底部とその立ちあがり部の壁部の一部のみ検出された。削平されているため上部の様子は不明である。焚口は西を向き、焚口の手前となる西側に灰を掻き出している。底部と壁面はスサ入りの黄灰色土層（図版6Ⅲ面竈7断面図の6層）によって構築されており、被熱による赤化が認められた。燃焼にともなう灰層は桃白色のものが厚さ3cmにわたって堆積していた。断ち割り調査では壁面から構築材と考えられる瓦が確認された。これらはほぼ水平に積まれていたが、壁に塗り込められた状態になっており、燃焼室に露出はしていない。瓦は平瓦ないしは棧瓦の破片である。埋土には灰層、炭を含む土層の間に黄灰色土層（図版6Ⅲ面竈7断面図3層）が数カ所確認された。これらは原位置を保った補修の痕跡の可能性が考えられる。

**竈8** 床面が東西0.7m、南北 mの扁円形に残存した竈の燃焼室が検出された。削平されているため全体の規模や上部の様子は不明である。焚口の向きは不明であるが、側壁の残存状況が他の竈と類似しており、少なくとも南向きではないことがわかる。竈内面は被熱により赤化している。床面及び壁面はスサ入りの黄灰色土（図版5溝1、竈7、竈8断面図の4層（3層））で構築されており、部分的に被熱の痕跡が認められる。断ち割り調査では壁面から構築材と考えられる瓦が確認された。これらはほぼ水平に最大2段積まれていたが、壁に塗り込められた状態になっており、燃焼室に露出はしていない。瓦は平瓦ないしは棧瓦の破片である。

**竈9** 直径0.5mのほぼ正円形の被熱面が検出された。規模や被熱の状況が他の竈に類似しており、竈と判断した。焚口の向き等は不明である。溝1とは切り合い関係にあり、竈9が先行する。

## 第5節 土管列

Ⅲ面を構築する際の盛土内で、土管が4本連結した状態で検出された。調査区南壁のほぼ中央部から北に延びる。検出全長は1.6mであるが、全長は南端が調査区外となるため不明である。北端の土管は、体部の中央部から破損しており、破損部分には土管幅とほぼ同一の形状に破損した丸瓦が覆いかぶせられていた。これ以北には土管またはそれに準ずるものが検出されなかった。また、掘り込みが確認されなかったため、Ⅲ面を形成するための盛土を行いながら土管が埋設されたと考えられる。排水施設と思われるが、土管のレベルに顕著な差はなく流水方向は不明である。



## 第5章 IV面の調査

IV面は約0.200 mのレベルで検出した遺構面である。検出された遺構は墓46基、杭列1条、不明遺構1基、土坑17基、瓦列1条、石列1条である。以下に詳細を記す。出土遺物については一覧表を参照されたい。

### 第1節 墓

調査区の南東隅、東西4.5 m×南北1.5 mにわたって、墓域が確認された。墓域は東側及び南側の調査区外に延び、全体の規模は不明である。人骨を納めた木棺が46個検出された。木棺は円形（曲物を転用したものや、いわゆる早桶と言われるもの）と方形のものがあるが、法量の近いものが垂直方向に積み重なっているなど密集した状態で検出された。木棺の上下関係を以下に記す。（積み重ねられているものをレベルの上木棺→下の順で記した。）

- ・木棺3→木棺26→木棺4→木棺43
- ・木棺10→木棺35→木棺36→木棺41
- ・木棺11→木棺38→木棺39
- ・木棺14→木棺25→木棺40→木棺37
- ・木棺16→木棺15→木棺23
- ・木棺18→木棺20→木棺19
- ・木棺18・木棺22→木棺21
- ・木棺23・木棺25→木棺24
- ・木棺28→木棺33
- ・木棺30→木棺42
- ・木棺31→木棺32

これらの出土状況や木棺を納めるための土坑が確認されなかったこと等から、木棺はIV面の盛土時に一括埋葬された可能性が考えられる。

人骨は53体確認された。人骨とともに副葬品と考えられる遺物も出土している。遺物については多くの木棺に数珠が確認されている。ごく小さなものであるため木棺ごとに埋土を1 mmメッシュでふるっているが、腐敗等により残存状況は必ずしもよくない。土圧で木棺がつぶれているものもあるが、内容物が木棺から周囲へ流出、または周囲から木棺の中へ流入している可能性はほとんどなかった。葬法はすべて土葬で、火葬のものは確認されなかった。木棺ごとの出土状況等の詳細を以下に述べる。

なお、人骨の分析は第7章、木棺の樹種同定は第8章にて述べる。

**木棺1** 直径38.2 cm、器高39.6 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶で、蓋には組み合わせて円形とした板が使用されていたと思われるが一部欠損している。人骨はほぼ1体分検出された。北を向いた座葬と推定される。遺物は副葬品として銭が15枚（253～267）、木製の数珠の玉が9個（597）、木製の玩具（268～270）が出土した。

**木棺2** 直径34.4 cm、器高33.1 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶である。蓋には組み合わせて円形とした板が使用されているが一部欠損している。蓋を押さえるような状態で直径約14 cmの礫が6つ検出された。また、磁器仏飯器（272）も蓋の上で検出された。これらの礫と飯器はいずれも蓋の直上で検出されており、埋葬時に木棺とともに納められたものと思われる。人骨はほぼ1体分検出された。北を向いた座葬と推定される。遺物は木製の数珠の玉が6個（598）、土師器皿（271）が出土した。数珠は副葬品と思われる。

**木棺3** 長辺60.4 cm、短辺30.2 cm、器高9.0 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。幅4 cmの板が4本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。人骨は側臥屈葬で右を下にし、いわゆる北枕で埋葬されている。遺物は副葬品として木製の数珠の玉8個（599）が出土した。

**木棺4** 直径58.4 cm、器高61.0 cmの円形木棺である。木棺26の下に位置する。木棺はいわゆる早桶で、蓋は検出されなかった。人骨は成人1体分が検出された。北を向いた座葬と推定される。遺物は副葬品として木製の数珠の玉10個（600）が出土した。

**木棺5** 長辺27.0 cm、短辺29.7 cm、器高3.4 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。木棺の遺存状態は非常に悪い。

**木棺6** 直径32.2 cm、器高34.8 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶で、蓋には組み合わせて円形とした板が使用されていた。人骨は1体分が検出された。北を向いた座葬と推定される。遺物は副葬品として木製の玩具（273～277）、瓦質土器玩具（278）、陶器水注（279）、陶器小瓶（280）、アワビ、アカニシが1点ずつ出土した。アワビは貝殻中央に直径約2 cmの小孔が穿かれている。

**木棺7** 直径34.1 cm、器高39.3 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶で、蓋は腐敗が激しく、形状は不明である。人骨はほぼ1体分が検出された。北を向いた座葬と推定される。遺物は副葬品として木棺の数珠の玉1個（601）が出土した。

**木棺8** 直径35.6 cm、器高30.3 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶で、蓋は検出されなかった。人骨は1体分が検出された。北を向いた座葬と推定される。遺物は副葬品として骨製の数珠の玉が2個検出された。

**木棺9** 直径40.8 cm、器高42.3 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶である。人骨は1体は木棺内の底部と、他1体は木棺中に於かれた板上でそれぞれ検出された。中位の板は破損や腐敗のためもの形状は不明である。前者は北を向いた座葬と推定される。後者は解剖学的位置を保っていなかった。木棺には組み合わせて円形とした板による蓋があり、土圧で幾分つぶれているものの、後者は木棺外からの流入とは考えにくい。遺物は副葬品として木棺の数珠の玉が46個（602）が木棺の底で出土した。

**木棺10** 長辺36.6 cm、短辺15.8 cm、器高11.2 cmの方形木棺である。長辺の側板の中央に5.8 cm×1.4 cmと3.5 cm×0.5 cmの貫通した楕円形の孔がある。他の木製品ないしは部材からの転用と思われる。蓋は検出されなかった。人骨は2体検出された。埋葬姿勢は不明である。遺物は副葬品としてガラス製の数珠の玉（281）が1個出土した。

**木棺11** 直径38.0 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶で、蓋は検出されなかった。人骨は1体分検出された。北を向いた座葬と推定される。

**木棺12** 直径34.0 cm、器高39.5 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶で、蓋は検出されなかった。人骨はほぼ1体分検出された。北を向いた座葬と推定される。遺物は副葬品として木製の玩具（282、283）、磁器小坏（284）が出土した。

**木棺13** 直径25.7 cm、器高28.5 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶である。蓋には鉄釘の刺さったままの幅3 cmの板が2本平行に並べられていた。人骨は1体分検出された。北を向いた座葬と推定される。遺物は副葬品として木製の数珠の玉が29個出土した。

また、木棺の蓋の上からさらに人骨が1体検出された。

**木棺14** 長辺37.2 cm、短辺30.1 cm、器高13.5 cmの方形木棺である。蓋は厚さ2 mmの薄い方形のへぎ状であった。幅4 cmの板が3本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。人骨は側臥屈葬と思われる。頭骨が木棺北東隅にて検出されたためいわゆる北枕と推定される。遺物は副葬品として木製の数珠の玉7個が出土した。

**木棺15** 長辺51.8 cm、短辺29.5 cm、器高12.7 cmの方形木棺で、木棺16の下に位置する。蓋は厚さ0.5 mmの非常に薄い方形のへぎ状であった。幅3 cmの板が3本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。埋葬姿勢は不明である。

**木棺16** 長辺17.7 cm、短辺22.5 cm、器高7.0 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。底は一枚板である。埋葬姿勢は不明である。

**木棺17** 長辺44.8 cm、短辺31.1 cm、器高11.6 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。人骨は2体検出された。1体は人骨は右を下にした側臥屈葬で、いわゆる北枕であったが、他1体は遺存状態が悪く埋葬姿勢は不明である。流入の可能性もある。遺物は副葬品として銭が6枚（285～290）、土師器皿（291）が出土した。

**木棺18** 長辺40.2 cm、短辺25.1 cm、器高8.6 cmの方形木棺である。蓋は厚さ3 mmの薄い方形のへぎ状であった。蓋の直上から蓋を押さえるような状態で直径9.8 cmの礎一つ検出している。人骨は2体検出された。埋葬姿勢は不明である。遺

物は副葬品として木製の数珠の玉2個が出土した。

**木棺19** 直径31.6 cm、器高37.5 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶で、蓋には組み合わせて円形とした板が使用されていた。人骨は北を向いた座葬と推定される。遺物は副葬品として木製の数珠の玉40個（603）が出土した。

**木棺20** 直径28.0 cm、器高22.8 cmの円形木棺である。木棺はいわゆる早桶で、蓋には組み合わせて円形とした板が使用されていた。人骨の埋葬姿勢は不明である。

**木棺21** 長辺48.9 cm、短辺30.5 cm、器高12.0 cmの方形木棺である。木棺18と木棺22の下に位置する。蓋は厚さ0.2 cmの薄い板が使用されている。蓋には厚さ2 mmの薄い方形のへぎ状であった。幅3 cmの板が3本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。人骨は右を下にした側臥屈葬で、いわゆる北枕であった。

**木棺22** 直径23.5 cm、器高1.3 cmの円形木棺である。木棺は曲物を転用したものである。蓋は検出されなかった。底板の中央に直径0.4 cmの貫通した小孔が認められる。埋葬姿勢は不明である。

**木棺23** 長辺38.5 cm、短辺19.5 cm、器高5.6 cmの方形木棺である。木棺15の下に位置する。蓋には厚さ1.1 cmの方形の板が使用されていた。幅3 cmの板が4本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。人骨は概ね1体分が検出された。埋葬姿勢は不明である。

**木棺24** 直径32.0 cm、器高35.0 cmの円形木棺である。木棺23・木棺25の下に位置する。木棺はいわゆる早桶である。木棺の上には半円形の板と他の木製品などの部材が並べた状態で検出された。これらは蓋と思われる。木棺内からは人骨ほぼ1体分が検出された。北を向いた座葬と推定される。遺物は副葬品として木製の数珠の玉2個（604）が出土した。また、蓋の上からも人骨が出土している。

**木棺25** 長辺49.5 cm、短辺30.0 cm、器高15.2 cmの方形木棺である。木棺14の下に位置し、調査区外にかかるため法量など不明である。蓋は厚さ1 mmの非常に薄い方形のへぎ状であった。幅4 cmの板が4本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。人骨は概ね1体分が検出された。右を下にした側臥屈葬であり、いわゆる北枕であった。遺物は副葬品として木製の数珠の玉10個（292）が出土した。

**木棺26** 長辺52.5 cm、短辺30.2 cm、器高19.1 cmの方形木棺である。木棺3の下に位置する。蓋は検出されなかった。幅2.1 cm、2.9 cm、3.0 cm、4.3 cmが4本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。また、木棺の中心で短軸方向に幅2.3 cmと3.4 cmの角材を2本配し板を載せて、木棺内は上段と下段に区切られていた。この中くらいで検出された角材には木棺との接合箇所に対応しない位置に鉄釘がささっており、他の木製ないしは部材からの転用が考えられる。人骨は上下1体ずつ、計2体納められていた。いずれも右を下にした側臥屈葬で、いわゆる北枕であった。遺物は副葬品として木製の数珠22個（605）が出土した。

**木棺27** 器高27.2 cmの方形木棺である。木棺の遺存状態は悪く、側板1枚と底板1本のみが検出された。底板は木棺3と同様に平行かつ等間隔に配されていたものと思われる。埋葬姿勢は不明である。

**木棺28** 短辺32.0 cm、器高5.9 cmの方形木棺である。木棺は調査区外にかかっているため、法量や埋葬姿勢など全容は不明である。

**木棺29** 長辺31.5 cm、短辺24.1 cm、器高17.9 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。幅2 cmの板が2本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。埋葬姿勢は不明である。

**木棺30** 長辺60.3 cm、短辺32.5 cm、器高13.4 cmの方形木棺である。蓋は腐敗が激しく、形状は不明である。側板のうち長辺に使用されているものには、直径1.8 cmの貫通した孔がある。埋葬姿勢は不明である。

**木棺31** 長辺27.3 cm、短辺17.8 cm、器高11.3 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。底板は今井板が使用されている。木棺は土圧によりつぶれており、遺存状態はよくない。頭骨は木棺内の南西隅にて検出されたが、埋葬姿勢は不明であ

る。

**木棺32** 長辺20.0 cm、短辺15.0 cm、器高3.7 cmの方形木棺である。木棺31の下に位置する。蓋には直径9.3 cmの円形の板が使用されていた。埋葬姿勢は不明である。

**木棺33** 長辺54.0 cm、短辺34.9 cm、器高16.2 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。幅2 cmの板が4本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。木棺28の下に位置する。木棺は調査区外にかかっているため、法量など全容は不明である。人骨は概ね1体分が検出された。右を下にした側臥屈葬の可能性があり、頭骨は西端で検出された。

**木棺34** 長辺54.0 cm、短辺34.9 cm、器高16.2 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。底板は一枚板が使用されている。人骨は概ね1体分が検出された。頭骨は西端で検出された。

**木棺35** 長辺50.9 cm、短辺28.2 cm、器高14.4 cmの方形木棺である。蓋は腐敗が激しく、形状は不明である。底板は一枚板が使用されている。土圧により底板は下の木棺などに押しされ、側板との接合部より数cm浮いて検出された。木棺10の下に位置する。人骨は2体分検出された。埋葬姿勢は不明である。

**木棺36** 長辺50.8 cm、短辺29.8 cm、器高2.9 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。幅5 cmの板が3本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。木棺36の下に位置する。埋葬姿勢は不明である。

**木棺37** 長辺35.0 cm、短辺36.0 cm、器高10.6 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。底板は一枚板が使用されている。木棺40の下に位置する。人骨は木棺37と木棺40から合わせて2体検出されている。埋葬姿勢は不明である。

**木棺38** 長辺49.1 cm、短辺29.8 cm、器高16.0 cmの方形木棺である。木棺11の下に位置する。蓋は検出されなかった。埋葬姿勢等は不明である。

**木棺39** 長辺33.0 cm、器高6.8 cmの方形木棺である。木棺38の下に位置する。蓋は検出されなかった。埋葬姿勢は不明である。

**木棺40** 長辺30.4 cm、短辺23.2 cm、器高13.2 cmの方形木棺である。木棺25の下に位置する。蓋は検出されなかった。底板は一枚板が使用されている。木棺は土圧によりつぶれており、遺存状態は悪い。埋葬姿勢は不明である。

**木棺41** 長辺41.1 cm、短辺36.1 cm、器高12.1 cmの方形木棺である。木棺36の下に位置する。蓋は検出されなかった。幅3 cmの板が5本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。木棺は長辺の側板が片側欠損しており、遺存状態は不良である。埋葬姿勢は不明である。

**木棺42** 長辺49.5 cm、短辺26.5 cm、器高9.4 cmの方形木棺である。木棺30の下に位置する。蓋は厚さ3 mmの薄い方形のへぎ状であった。幅4 cmの板が3本底板に使用されており、平行かつ等間隔に配されていた。人骨は1体分が検出された。右を下にした側臥屈葬であり、いわゆる北枕である。遺物は副葬品として木製の玩具(294)が頭骨周辺で出土した。

**木棺43** 長辺54.1 cm、短辺25.8 cm、器高14.5 cmの方形木棺である。蓋は方形で板の接合には木釘が使用されている。木棺4の下に位置する。人骨は3体検出された。埋葬姿勢は不明である。

**木棺44** 直径19.9 cm、器高11.0 cmの円形木棺である。蓋は厚さ1 mmの非常に薄い方形のへぎ状であった。木棺は曲物の転用と思われる。木棺は大半が調査区外にかかっているため、法量や埋葬姿勢など全容は不明である。人骨は概ね1体分が検出された。遺物は副葬品として木製の数珠の玉2個(295,606)が出土した。

**木棺45** 長辺29.3 cm、器高4.1 cmの方形木棺である。木棺は大半が調査区外にかかっているため、法量など全容は不明である。頭骨は西端にて検出されたが、埋葬姿勢は不明である。遺物は副葬品と思われる土師器皿(296)が出土した。

**木棺46** 長辺54.0 cm、短辺23.5 cm、器高12.0 cmの方形木棺である。蓋は検出されなかった。木棺は調査区外にかかっている

るため、埋葬姿勢等は不明である。

## 第2節 杭群

墓域の北側、東西5.5 mに渡って杭が67本遺構面にほぼ直立した状態で検出された。配置に規則性は認められず、遺構の性格は不明であるが、位置関係から墓域との関連が考えられる。杭の断面形は正円形、扇形、角形等様々である。

## 第3節 不明遺構

杭群の北側で検出された長辺1.9 cm、高さ7.0 cmの木製の枠組である。トレンチにより北端は切られているが方形となる。長辺と短辺は鉄釘によって留められ下端のごくわずかな部分が土中に埋没していたが、人為的に埋められたかは判断としない。底板は蓋等は検出されなかった。

枠内の土中からは、漆碗(293)や多数の種子が出土した。また、南側の遺構面直上からは瓦葺(300)が出土している。遺構の性格は不明であるが、位置関係から墓域や杭群と何らかの関係があるものと思われる。

なお、枠組の樹種については第8章を参照されたい。

## 第4節 土坑

**土坑1** 東西5.4 m、深さ0.4 mを測る。南端が調査区外となるため、全体の規模は不明である。埋土中から多量の木片や瓦、陶磁器類などが検出された。とくに木片と瓦の出土は多く、木片は鮑屑状の薄片やいわゆる木端と思われるものがほとんどであった。また、出土状況は下層に木片、上層に瓦が集中する傾向にある。陶磁器片は出土層位に関係なく接合できたことから、埋土各層に時期差はほとんどなく、廃棄土坑と考えられる。

**土坑2** 直径1.4 m、深さ0.8 mの円形の土坑である。性格は不明である。

**土坑3** 東西1.2 m、南北1.1 m、深さ0.1 mの不整形な土坑である。埋土中には焼土や炭が多量に含まれており、遺構面もやや被熱している。

**土坑4** 東西0.8 m、南北0.6 m、深さ0.1 mの土坑である。性格は不明である。

**土坑5** 東西0.4 m、深さ0.1 mの土坑である。性格は不明である。

**土坑13** 東西0.4 m、南北0.5 m、深さ0.2 mの土坑である。性格は不明である。

**土坑6～12、14～17** それぞれ直径0.3 m、深さ0.1 mを測る。土坑6～12、土坑14～17はそれぞれほぼ一直線上に並び、垂直に位置する。土坑底部周辺は青色に還元されている。断面等の形状やほぼ等間隔に並ぶことから土坑と判断したが、その性格は不明である。

## 第5節 瓦列

調査区の南西部で凹面を上に向けた丸瓦が5個体、南北方向に連続して検出された。検出時のレベルは中央の丸瓦が他の瓦よりも若干高く、南及び北に向かってわずかに低くなるようである。瓦列の南には瓦が設置されていたと思われる溝状の痕跡が検出されている。排水施設であろうか。

## 第6節 石列

調査区のほぼ中央で東西方向に5.5 mにわたって検出された。大型の石の隙間及び北側に、小型の石を配している。上部は不揃いであり、さらに数段、連続して石が組まれていたと推測される。大型の石は南側に平らな面がくるように意識されており、北側の小型の石を裏込めと考えるなら、石垣状に組まれたものであった可能性もある。さらに北側にはこの石列を南限とする盛土を行って遺構面を形成していた可能性もある。

## 第6章 V面の調査

V面は-1.000 mのレベルにおいて検出した遺構面である。遺構は土坑5基と杭2本が検出された。検出面を形成する盛土は大きく2種類に分かれる。土坑のある周辺は暗灰褐色土層で破砕貝の混ざり方は少ないが、その他の部分には破砕貝が大量に混入する（図版9、V面平面図点線）。

以下に詳細を記す。出土遺物については一覧表を参照されたい。

### 第1節 土坑

**土坑1** 直径0.9 m、深さ0.3 mの土坑である。

**土坑2** 直径0.9 m、深さ0.2 mの土坑である。

**土坑3** 東西2.5 m、南北3.0 m、深さ0.3 mの土坑である。

**土坑4** 東西1.0 m、南北1.1 m、深さ0.2 mの土坑である。

**土坑5** 東西0.8 m、南北1.6 m、深さ0.3 mの土坑である。

### 第2節 杭

調査区の中央と北東隅にて杭が1基ずつ検出された。それぞれ関連性は不明である。

**杭1** 一辺23 cmの断面正方形の杭である。残存する長さは39 cmで、検出時には上部は欠損しており、検出レベルから下のみの遺存であった。杭の下部は鉛筆状に削られるが、先端は尖っておらず断面台形であった。

**杭2** 幅20 cm×16 cmの断面楕円形の杭である。残存する長さは29 cmで、検出時には上部は欠損しており、検出レベルから下のみの遺存状態であった。杭の下部は鉛筆状に削られるが、先端は尖っておらず断面台形であった。

また、V面包含層掘削中にV面調査区西端中央、-0.726 mのレベルで火葬骨が検出された。火葬骨は筵状の粗い繊維に挟まれた状態で検出された。残存状況が非常に悪かったため一部取り上げはできなかった。検出レベルでは遺構面として認められなかったため包含層出土のものとしたが、筵状のものにくるまれて当位置で火葬され、そのまま埋葬されたものと考えられる。

遺物番号	遺構面	層位/遺構	器種	法量(cm)			調整・技法の特徴等
				口径	底径	器高	
1	Ⅲ	包含層	山茶碗 鉢	-	12.2	-	付高台。東海地方南部系。12世紀後半。
2	Ⅲ	包含層	土師器 皿	13.5	9.1	1.7	非ロクロ成形。口縁部に油煙付着。
3	Ⅲ	包含層	土師器 皿	13.1	9.4	1.7	非ロクロ成形。口縁部に油煙付着。
4	Ⅲ	包含層	土師器 皿	12.6	-	-	非ロクロ成形。
5	Ⅲ	包含層	土師器 皿	12.0	5.0	1.7	非ロクロ成形。
6	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.8	9.3	1.8	非ロクロ成形。内外面底部周辺煤付着。
7	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.8	7.3	2.0	非ロクロ成形。口縁部に油煙付着。
8	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.9	5.2	2.0	非ロクロ成形。
9	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.7	7.7	1.9	非ロクロ成形。
10	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.7	7.6	1.5	非ロクロ成形。口縁部に油煙付着。
11	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.4	7.2	1.4	非ロクロ成形。
12	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.4	7.2	1.8	非ロクロ成形。
13	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.3	6.8	1.4	非ロクロ成形。
14	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.2	7.4	1.9	非ロクロ成形。
15	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.2	7.2	1.9	非ロクロ成形。
16	Ⅲ	包含層	土師器 皿	11.1	4.3	2.0	非ロクロ成形。
17	Ⅲ	包含層	土師器 皿	10.2	5.0	2.0	非ロクロ成形。
18	Ⅲ	包含層	土師器 皿	7.2	1.6	1.8	非ロクロ成形。
19	Ⅲ	包含層	土師器 皿	-	-	2.2	非ロクロ成形。
20	Ⅲ	包含層	土師器 皿	-	-	-	非ロクロ成形。
21	Ⅲ	包含層	土師器 皿	12.0	8.0	2.9	ロクロ成形。外面底部墨書。
22	Ⅲ	包含層	土師器 皿	10.2	5.1	2.3	ロクロ成形。
23	Ⅲ	包含層	土師器 皿	5.5	3.1	1.3	ロクロ成形。
24	Ⅲ	包含層	土師器 皿	-	5.4	-	ロクロ成形。
25	Ⅲ	包含層	土師器 皿	-	-	2.0	ロクロ成形。
26	Ⅲ	包含層	陶器 皿	-	5.1	-	軟質。内外面動輪か。
27	Ⅲ	包含層	土師器 鍋	-	-	-	外面煤付着。19世紀前半。
28	Ⅲ	包含層	土師器 鍋	-	-	-	外面煤付着。19世紀前半。
29	Ⅲ	包含層	土師器 鍋	-	-	-	外面煤付着。19世紀前半。
30	Ⅲ	包含層	土師器 鍋	-	-	-	外面煤付着。18世紀後半。
31	Ⅲ	包含層	土師器 埴壇壺	7.4	5.8	8.4	内面布目肌。
32	Ⅲ	包含層	土師器 埴壇壺	5.0	3.2	7.6	内面布目肌。
33	Ⅲ	包含層	陶器 天目茶碗	10.0	-	-	内外面鉄軸。瀬戸美濃。18世紀。
34	Ⅲ	包含層	陶器 碗	-	4.5	-	縁り込み。内外面灰軸。瀬戸美濃。
35	Ⅲ	包含層	陶器 御室茶碗	9.4	-	-	内外面灰軸。外面白化粧。瀬戸美濃。18世紀。
36	Ⅲ	包含層	陶器 碗	-	-	-	内面白化粧。外面色絵。薬田焼か。
37	Ⅲ	包含層	陶器 碗	-	4.1	-	内外面灰軸。刷毛目白化粧。肥前。17世紀後半～18世紀。
38	Ⅲ	包含層	陶器 碗	-	-	-	内外面灰軸。外面塗絵。
39	Ⅲ	包含層	陶器 雙輪碗	10.2	4.6	6.4	外面下平鉄軸。外面上平及び内面灰軸。瀬戸美濃。18世紀中葉。
40	Ⅲ	包含層	陶器 小碗	7.6	-	-	内外面灰軸。高台周辺無軸。瀬戸美濃。18世紀後半。
41	Ⅲ	包含層	陶器 小碗	5.5	4.1	3.7	内面・外面上部鉄軸。高台煤付着。内面鉄分付着。瀬戸美濃。18世紀後半。
42	Ⅲ	包含層	陶器 小碗	7.5	2.8	4.0	内外面灰軸。瀬戸美濃。18世紀後半。
43	Ⅲ	包含層	陶器 端反碗	9.3	-	-	内外面灰軸。外面鉄軸。
44	Ⅲ	包含層	陶器 播鉢	-	-	-	内外面灰軸。瀬戸美濃。18世紀後半。
45	Ⅲ	包含層	磁器 碗	9.8	3.9	4.4	染付。くらわんか手。肥前。18世紀中葉～後半。
46	Ⅲ	包含層	磁器 碗	-	3.6	-	染付。赤絵。一部剥落。肥前。18世紀。
47	Ⅲ	包含層	磁器 丸型湯呑	8.7	3.5	5.8	染付。肥前。19世紀。
48	Ⅲ	包含層	磁器 丸型湯呑	8.1	3.2	5.5	染付。肥前。18世紀後半。
49	Ⅲ	包含層	磁器 碗	11.0	4.5	5.6	染付。飯茶碗。肥前。19世紀前半。
50	Ⅲ	包含層	磁器 広東茶碗	-	7.0	-	染付。焼蓮。足込目鉢2ヶ所。肥前。18世紀後半。
51	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)碗	11.0	9.7	-	染付。瀬戸美濃。19世紀前半。
52	Ⅲ	包含層	磁器 小碗	-	4.0	-	染付。湯蓮。足込(赤茶碗)。管付(赤で「開口」)。瀬戸美濃。19世紀。
53	Ⅲ	包含層	磁器 小坏	7.2	2.8	5.7	染付。外面コンニャク印。肥前。18世紀前半。
54	Ⅲ	包含層	磁器 筒型湯呑	-	-	-	染付。外面青磁。肥前。18世紀後半～19世紀初期。
55	Ⅲ	包含層	磁器 筒型湯呑	-	-	-	染付。外面(柳堂)御(茶所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
56	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)筒型湯呑	-	-	-	染付。外面(柳堂)御(茶所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
57	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)筒型湯呑	7.4	3.6	5.8	染付。外面(柳堂)御(茶所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
58	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)筒型湯呑	7.4	3.6	5.1	染付。外面(柳堂)御(茶所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
59	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)筒型湯呑	7.2	3.1	5.5	染付。外面(柳堂)御(茶所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
60	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)筒型湯呑	7.2	-	-	染付。外面(柳堂)御(茶所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
61	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)筒型湯呑	7.0	3.4	5.5	染付。外面(柳堂)御(茶所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
62	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)筒型湯呑	7.0	3.2	5.8	染付。外面(柳堂)御(茶所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
63	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)筒型湯呑	6.5	3.4	6.1	染付。外面(柳堂)御(茶所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
64	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)筒型湯呑	6.5	-	-	染付。外面(柳堂)御(茶所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
65	Ⅲ	包含層	磁器 猪口	-	-	-	染付。肥前。

表1 遺物一覧表



遺物番号	遺構面	層位/遺構	器種	法量(cm)			調整・技法の特徴等
				口径	底径	器高	
66	Ⅲ	包含層	磁器 箱型湯呑	-	-	-	染付、肥前。
67	Ⅲ	包含層	磁器 陶胎箱型湯呑	-	-	-	染付、外面「御堂御茶所」、瀬戸美濃か、19世紀前半。
68	Ⅲ	包含層	磁器 陶胎箱型湯呑	9.6	4.7	7.3	染付、見込コンニャク印判、肥前か、17世紀後半。
69	Ⅲ	包含層	磁器 箱型湯呑	7.2	3.6	5.5	染付、肥前、19世紀前半。
70	Ⅲ	包含層	磁器 箱型湯呑	7.6	3.8	6.1	染付、肥前、18世紀後半。
71	Ⅲ	包含層	磁器 丸型湯呑	-	3.5	-	染付、肥前、18世紀後半～19世紀前半。
72	Ⅲ	包含層	陶器 皿	8.6	5.9	2.2	型による成形、内面口縁、見込底の7割、外部脚縁、瀬戸美濃、19世紀前半。
73	Ⅲ	包含層	陶器 皿	12.6	4.5	4.1	内面脚縁、外面透明釉、見込み蛇の目輪筋、肥前、17世紀後半。
74	Ⅲ	包含層	陶器 丸皿	8.3	5.2	1.3	内外面灰釉、瀬戸美濃、18世紀前半。
75	Ⅲ	包含層	陶器 輪光皿	13.5	5.7	3.1	内面、外面口縁部灰釉、見込裏脚縁による赤銅釉、瀬戸美濃、18世紀後半。
76	Ⅲ	包含層	陶器 丸皿	10.3	6.4	1.7	内外面灰釉、口縁部・裏台内に油漕付着、瀬戸美濃、18世紀前半。
77	Ⅲ	包含層	陶器 丸皿	11.5	6.4	2.1	内外面長石釉、外面底部目跡、瀬戸美濃、18世紀前半。
78	Ⅲ	包含層	陶器 丸皿	9.5	4.8	1.7	内面、外面口縁部灰釉、瀬戸美濃、18世紀後半。
79	Ⅲ	包含層	陶器 丸皿	-	-	-	内面、外面口縁部灰釉、内面磨目。
80	Ⅲ	包含層	陶器 丸皿	11.2	5.7	2.2	内外面長石釉、外面底部目跡、瀬戸美濃、18世紀前半。
81	Ⅲ	包含層	陶器 輪光皿	12.4	6.1	3.1	内外面灰釉、瀬戸美濃、18世紀前半。
82	Ⅲ	包含層	陶器 灯明皿	9.7	3.8	2.1	黒皿、内面、外面口縁部鉄釉、内外面重ね焼きによる溶着痕、口縁部に油漕付着、瀬戸美濃、18世紀後半～19世紀、内外面青磁、墨付による焼成時の溶着痕、肥前、17世紀後半。
83	Ⅲ	包含層	磁器 皿	-	5.5	-	染付、桃繪、肥前、18世紀中葉。
84	Ⅲ	包含層	磁器 皿	-	12.6	-	染付、肥前、17世紀前半。
85	Ⅲ	包含層	磁器 皿	13.8	4.8	3.3	染付、型による成形、高台費付砂付着、肥前、17世紀後半か。
86	Ⅲ	包含層	磁器 皿	7.4	2.7	2.0	染付、型による成形、内面型砥漕、肥前、18世紀前半。
87	Ⅲ	包含層	磁器 皿	長辺4.7	短辺3.4	2.1	染付、肥前、18世紀末葉。
88	Ⅲ	包含層	磁器 皿	14.5	9.3	3.5	型による成形、肥前、19世紀前半。
89	Ⅲ	包含層	磁器 皿	10.0	6.0	2.4	手塩皿、口紅、型による成形、肥前、19世紀前半。
90	Ⅲ	包含層	磁器 皿	7.9	4.2	2.2	染付、墨弾き「口福」「口寿」、肥前、19世紀前半。
91	Ⅲ	包含層	磁器 紅皿	4.7	2.0	2.5	型による成形、肥前、18世紀前半か。
92	Ⅲ	包含層	磁器 紅皿	4.9	1.6	1.4	型による成形、肥前、19世紀中葉。
607	Ⅲ	包含層	陶器 播鉢	38.5	17.3	17.2	内外面鉄釉、瀬戸美濃、18世紀後半。
93	Ⅲ	包含層	陶器 播鉢	26.6	-	-	内外面鉄釉、内面に刻印2ヶ所(丸に大)、瀬戸美濃、19世紀。
94	Ⅲ	包含層	陶器 播鉢	-	10.2	-	内外面鉄釉、見込重ね焼き、内面保付着、瀬戸美濃、19世紀。
95	Ⅲ	包含層	陶器 鉢	32.7	15.8	10.8	笠形鉢、内外面鉄釉、内面鉄釉、目跡7ヶ所、瀬戸美濃、17世紀後半。
96	Ⅲ	包含層	陶器 楕鉢	-	10.2	-	外面鉄釉、瀬戸美濃、19世紀前半。
97	Ⅲ	包含層	陶器 鉢	30.0	12.5	8.4	内外面鉄釉、内面鉄釉、目跡5ヶ所、肥前、17世紀後半。
98	Ⅲ	包含層	陶器 火鉢	26.8	-	-	赤物、常滑、19世紀前半。
99	Ⅲ	包含層	瓦質土器 火鉢か	-	16.0	-	-
100	Ⅲ	包含層	磁器 鉢	-	8.9	-	染付、高台内「大明成化年製」銘、肥前、18世紀後半。
101	Ⅲ	包含層	磁器 鉢	8.7	5.8	5.2	輪花、染付、桃繪、肥前、18世紀後半。
102	Ⅲ	包含層	磁器 鉢	12.1	7.4	7.6	染付、八角形、桃繪、肥前、18世紀後半。
103	Ⅲ	包含層	陶器 鉢	-	3.2	-	内外面灰釉、向付か、瀬戸美濃か。
104	Ⅲ	包含層	陶器 箱型湯呑	7.9	3.6	6.4	内外面灰釉、須臾絵、瀬戸美濃、19世紀。
105	Ⅲ	包含層	陶器 香炉	8.7	3.7	5.3	内面口縁部、外面緑釉、信楽か。
106	Ⅲ	包含層	陶器 香炉	7.9	-	-	外面青磁釉。
107	Ⅲ	包含層	陶器 火入	8.0	5.0	5.3	内外面上部灰釉、外端下部・底部鉄釉、外面横位の沈線に破位のしのみ、内面被焼、煤付着、瀬戸美濃、18世紀。
108	Ⅲ	包含層	陶器 水注	7.8	11.7	9.3	内外面灰釉、外面滑絵(鉄)、瀬戸美濃、18世紀後半。
109	Ⅲ	包含層	陶器 急須	-	-	-	型による成形、萬古焼か。
110	Ⅲ	包含層	陶器 壺	7.6	-	-	耳付き、無釉。
111	Ⅲ	包含層	陶器 茶入	2.7	-	-	外面鉄釉、反焼出しがけ、軸葉欠損部分を矢色漆で補修、19世紀。
112	Ⅲ	包含層	陶器 壺	7.9	7.2	11.1	双耳壺、外面灰釉、瀬戸美濃、18世紀。
113	Ⅲ	包含層	陶器 壺	7.1	-	-	双耳壺、外面灰釉、237と接合可、瀬戸美濃、18世紀後半。
114	Ⅲ	包含層	陶器 蓋	6.5	4.8	1.6	外面灰釉。
115	Ⅲ	包含層	陶器 壺	-	7.4	-	お茶黒染、外面鉄釉、内面に敷しう付着、瀬戸美濃。
116	Ⅲ	包含層	陶器 德利	-	11.1	-	外面灰釉、焼成前彫り「口福」「口」、瀬戸美濃、19世紀前半。
117	Ⅲ	包含層	陶器 德利	-	6.6	-	外面上半分灰釉、下半分鉄釉、瀬戸美濃、18世紀前半。
118	Ⅲ	包含層	陶器 小甕	6.3	-	-	内外面鉄釉、内面に敷しう付着、瀬戸美濃か、18世紀後半か。
119	Ⅲ	包含層	磁器 瓶	-	6.2	-	染付、肥前、17世紀後半か。
120	Ⅲ	包含層	磁器 水瀆	-	-	9.4	変形、扁筒、扁筒葉・脚のみダミのせ、型による成形、底部内外面とも布目跡、瀬戸美濃、19世紀前半。
121	Ⅲ	包含層	陶器 水瀆	-	3.8	-	型による成形、蓋子形、外面・内部鉄釉、内面鉄釉、梅鉢絵か、19世紀か。
122	Ⅲ	包含層	陶器 火入	9.9	9.9	8.5	軟質、上絵、部分的に白化粧、釉薬不明。
123	Ⅲ	包含層	陶器 水甕	33.3	-	-	内外面脚縁釉、外面雲電文貼付、瀬戸美濃、19世紀。
124	Ⅲ	包含層	陶器 半割	26.5	20.7	26.5	外面鉄釉、墨付目跡、見込み目跡3ヶ所、瀬戸美濃、19世紀前半。
125	Ⅲ	包含層	陶器 甕	59.2	-	-	赤物、常滑、19世紀前半。
126	Ⅲ	包含層	陶器 井戸筒	50.7	-	-	赤物、常滑、19世紀。

表2 遺物一覧表

遺物番号	遺構面	層位/遺構	器種	法量(cm)			調整・技法の特徴等
				口径	底径	器高	
127	Ⅲ	包含層	磁器 人形	—	—	—	大里か、上給。
128	Ⅲ	包含層	陶器 加工円盤	径6.9	—	—	焼粘土(灰軸)を加工。瀬戸美濃。18世紀後半。
129	Ⅲ	包含層	磁器 加工円盤	径6.0	—	—	染付碗を加工。中国。
130	Ⅲ	包含層	山形陶 加工円盤	径4.8	—	—	山茶碗を加工。東海地方南部系。13世紀。
131	Ⅲ	包含層	磁器(陶胎)加工円盤	径4.1	—	—	袋物を加工。瀬戸美濃。
132	Ⅲ	包含層	陶器 加工円盤	径3.4	—	—	徳利(灰軸、舞手)を加工。瀬戸美濃。
133	Ⅲ	包含層	陶器 加工円盤	径3.0	—	—	徳利(鉄軸)を加工。瀬戸美濃。
134	Ⅲ	包含層	陶器 加工円盤	径2.6	—	—	碗(灰軸)を加工。瀬戸美濃。
135	Ⅲ	包含層	瓦 加工円盤	径6.3	—	—	瓦を加工。
136	Ⅲ	包含層	瓦 加工円盤	径4.8	—	—	瓦を加工。
137	Ⅲ	包含層	骨製品 穀子	長さ0.8	幅0.9	高さ0.9	
138	Ⅲ	包含層	骨製品 不明	長さ9.0	最大幅0.5	厚さ0.4	
139	Ⅲ	包含層	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅製。天型元寶。
140	Ⅲ	包含層	金属製品 銭	2.4	1.9	0.6	銅製。寛永通寶(古寛永)。
141	Ⅲ	包含層	金属製品 銭	2.3	1.9	0.6	銅製。寛永通寶(新寛永)。
142	Ⅲ	包含層	金属製品 銭	2.4	1.9	0.6	銅製。寛永通寶(新寛永)。
143	Ⅲ	包含層	金属製品 銭	2.6	2.0	0.6	銅製。寛永通寶(新寛永)。背面「文」。
144	Ⅲ	包含層	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅製。寛永通寶(新寛永)。背面「文」。
145	Ⅲ	包含層	石製品 五輪塔	高さ13.7	幅21.4	孔径4.6	火輪。
146	Ⅲ	包含層	陶器 蓋	3.5	1.7	—	外面灰軸。
147	Ⅲ	包含層	陶器 蓋	9.6	4.7	2.4	内外面無軸。
148	Ⅲ	包含層	陶器 蓋	4.6	幅み4.4	2.6	内外面灰軸。外面イッチン盛り。
149	Ⅲ	包含層	陶器 蓋	10.6	幅み4.0	2.6	内外面灰軸。外面に鉄、貝須、化粧土。信楽か。18世紀中葉。
150	Ⅲ	包含層	陶器 蓋	8.3	5.4	2.1	外面鉄軸。内面煤付着。瀬戸美濃。18世紀後半。
151	Ⅲ	包含層	陶器 蓋	9.8	4.2	3.0	内外面無軸。
152	Ⅲ	包含層	磁器 蓋	11.0	幅み2.9	3.2	色絵染付。蓋文部分金・赤。つまみ内「富口長春」底。肥前。18世紀中葉。
153	Ⅲ	包含層	磁器 蓋	9.6	幅み3.9	2.8	飯茶碗蓋。染付。肥前。18世紀末葉。
154	Ⅲ	包含層	磁器 蓋	6.7	幅み4.2	1.9	飯茶碗蓋。染付。肥前。18世紀末葉。
155	Ⅲ	包含層	磁器 蓋	9.7	幅み4.0	3.0	飯茶碗蓋。染付。肥前。18世紀後半。
156	Ⅲ	包含層	磁器 蓋	9.9	幅み4.1	3.1	飯茶碗蓋。染付。肥前。18世紀後半～19世紀前半。
157	Ⅲ	包含層	磁器 蓋	10.2	幅み4.2	2.3	飯茶碗蓋。染付。肥前。19世紀前半。
158	Ⅲ	包含層	陶器 壺	—	—	—	外面灰軸。高台内に墨書。瀬戸美濃。
159	Ⅲ	包含層	陶器 壺	—	8.3	—	外面灰軸。瀬戸美濃。
160	Ⅲ	包含層	磁器 碗	—	4.7	—	染付。肥前。
161	Ⅲ	包含層	陶器 種鉢	—	—	—	内外面鉄軸。瀬戸美濃。19世紀前半。
162	Ⅲ	包含層	陶器 種鉢	—	—	—	内外面鉄軸。瀬戸美濃。19世紀前半。
163	Ⅲ	土坑1	土師器 羽釜	21.8	—	—	外面煤付着。尾張か。15世紀か。
164	Ⅲ	土坑5	陶器 人形か	—	—	—	—
165	Ⅲ	土坑6	磁器 碗	—	2.9	—	染付。肥前。19世紀前半。
166	Ⅲ	土坑6	金属製品 煙管	全長5.7	最大径0.9	最小径0.4	吸口。銅製。
167	Ⅲ	土坑12	土師器 皿	13.3	—	—	非口ロ成形。内面体・底部煤付着。
168	Ⅲ	土坑13	陶器 灯明皿	10.2	4.4	1.9	蓋皿。内面鉄軸。内面並む縁かによる器蓋。口縁部煤付着。瀬戸美濃。19世紀。
169	Ⅲ	土坑13	陶器 灯明皿	10.3	4.6	2.1	受皿。内外面鉄軸。内外面並む縁かによる器蓋。瀬戸美濃。19世紀前半。
170	Ⅲ	土坑13	陶器 平刷	18.0	11.0	14.7	内外面鉄軸。内面並む縁3ヶ所。瀬戸美濃。18世紀前半～19世紀。
171	Ⅲ	土坑13	陶器 蓋物	8.0	5.3	4.2	内外面灰軸。京・信楽か。19世紀。
172	Ⅲ	土坑14	陶器 急須	4.9	—	—	無軸。萬古焼か。
173	Ⅲ	土坑15	陶器 甕	—	24.0	—	赤物。常滑。
174	Ⅲ	土坑15	磁器 碗	10.9	—	—	染付。梅瀬。肥前。18世紀後半。
175	Ⅲ	甕1	陶器 灯明皿	10.2	5.0	2.5	受皿。内外面鉄軸。受皿・外面部に直に施すことによる器蓋。瀬戸美濃。19世紀前半。
176	Ⅲ	甕1	金属製品 釘	全長5.0	—	—	鉄製。
177	Ⅲ	甕2と3の間	陶器 鉄鉢皿	—	7.4	—	内外面灰軸。外面底部煤付着。見込鉄軸。瀬戸美濃。17世紀後半。
178	Ⅲ	甕2と3の間	陶器 丸皿	11.2	7.1	2.0	内外面長石軸。瀬戸美濃。17世紀後半。
179	Ⅲ	甕2と3の間	陶器 種鉢	37.2	—	—	内外面鉄軸。瀬戸美濃。18世紀第1四半期。
180	Ⅲ	溝1	土師器 鉢	—	—	—	外面煤付着。18世紀前半。
181	Ⅲ	溝1	磁器 小坏	6.1	3.3	4.4	染付。外面コシヤク印。内面に紅付着か。肥前。18世紀前半。
182	Ⅲ	溝1	磁器(陶胎)菊型壺	7.4	—	—	染付。外面(柳堂)御茶(所)。瀬戸美濃か。19世紀前半。
183	Ⅲ	溝1	陶器 皿	—	7.7	—	内外面灰軸。瀬戸美濃。
184	Ⅲ	溝1	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅銭。寛永通寶(新寛永)。被熱。
185	Ⅲ	溝2	磁器 菊型壺	—	4.3	—	染付。肥前か。
186	Ⅲ	溝2	陶器 火鉢	13.5	—	—	赤物。常滑。19世紀前半。
187	Ⅲ	溝3	土師器 皿	—	—	—	非口ロ成形。外面口縁部油煙付着。
188	Ⅲ	溝3	土師器 皿	10.6	4.4	2.1	非口ロ成形。内面油煙付着。内外面煤付着。
189	Ⅲ	溝3	磁器 碗	—	4.2	—	染付。肥前。17世紀中葉。
190	Ⅲ	溝3	磁器 碗	10.2	3.9	7.0	染付。肥前。17世紀後半。
191	Ⅲ	溝3	陶器 小碗	6.6	3.5	3.7	内外面灰軸。瀬戸美濃。17世紀後半。

表3 遺物一覧表

遺物番号	遺構面	層位/遺構	器種	法量(cm)			調整・技法の特徴等
				口径	底径	器高	
192	Ⅲ	溝3	陶器 丸皿	11.1	6.4	2.4	内外面長石釉、外面底部目跡、瀬戸美濃、17世紀後半。
193	Ⅲ	溝3	陶器 丸皿	11.4	7.0	2.3	内外面長石釉、内面目跡2ヶ所、瀬戸美濃、17世紀後半。
194	Ⅲ	土坑17	土師器 皿	11.8	5.6	2.1	非ロクロ成形、口縁部油煙付着、内外面煤付着。
195	Ⅲ	土坑17	磁器 碗	-	4.6	-	染付、肥前、18世紀後半～19世紀前半。
196	Ⅲ	土坑17	磁器 皿	-	8.0	-	染付、目跡1ヶ所、肥前、18世紀。
197	Ⅲ	土坑17	石製品 砥石	-	幅6.9	-	-
198	Ⅲ	溝6	土師器 皿	10.8	-	-	非ロクロ成形。
199	Ⅲ	溝6	陶器 丸皿	10.6	6.8	2.0	内外面長石釉、口縁欠損部に油煙付着、見込み、外面底部目跡1ヶ所、瀬戸美濃、18世紀前半。
200	Ⅲ	溝6	磁器 皿	13.8	4.8	3.3	染付、肥前、17世紀前半。
201	Ⅲ	溝6	陶器 播鉢	30.0	-	-	内外面錆蝕、瀬戸美濃、19世紀前半。
202	Ⅲ	溝6	金属製品 釘	全長4.0	幅0.3	-	鉄製。
203	Ⅲ	溝6	金属製品 釘	全長5.1	幅0.4	-	鉄製。
204	Ⅲ	溝6	金属製品 釘	全長3.6	幅0.4	-	鉄製。
205	Ⅲ	土管列(IV面)包含層	陶器 土管	全長53.4	胴径14.4	-	赤物、常滑、19世紀前半。
206	Ⅲ	土管列(IV面)包含層	陶器 土管	全長53.4	胴径13.8	-	赤物、常滑、19世紀前半。
207	Ⅲ	土管列(IV面)包含層	陶器 土管	全長50.4	胴径14.6	-	赤物、外面墨書「中」か。常滑、19世紀前半。
208	Ⅲ	土管列(IV面)包含層	陶器 土管	全長7	胴径14.0	-	赤物、外面墨書2ヶ所。常滑、19世紀前半。
209	Ⅳ	包含層	金属製品 銭	2.7	2.1	0.7	銅銭、文久寛永、背面波紋10波。
210	Ⅳ	包含層	土師器 皿	11.6	7.5	1.8	非ロクロ成形。
211	Ⅳ	包含層	土師器 皿	11.1	6.8	1.6	非ロクロ成形。
212	Ⅳ	包含層	土師器 皿	11.1	5.1	2.0	非ロクロ成形、口縁部煤付着。
213	Ⅳ	包含層	土師器 皿	10.3	6.4	1.7	非ロクロ成形。
214	Ⅳ	包含層	土師器 皿	9.8	5.4	1.7	非ロクロ成形。
215	Ⅳ	包含層	土師器 鉢	28.8	-	-	17世紀か。
216	Ⅳ	包含層	土師器 鉢	30.2	-	-	内外面煤付着、17世紀後半～18世紀前半。
217	Ⅳ	包含層	土師器 地壇盆	7.1	8.0	1.4	蓋、内面白灰。
218	Ⅳ	包含層	陶器 天目茶碗	10.1	-	-	内外面鉄釉、瀬戸美濃、18世紀。
219	Ⅳ	包含層	陶器 天目茶碗	11.4	-	-	内外面鉄釉、瀬戸美濃、18世紀。
220	Ⅳ	包含層	陶器 碗	-	5.0	-	内外面透明釉、肥前、18世紀。
221	Ⅳ	包含層	陶器 碗	12.6	4.9	5.0	内外面透明釉、「中金村」刻印、見込鉄絵、京焼風、肥前か、17世紀後半～18世紀前半。
222	Ⅳ	包含層	陶器 碗	-	3.7	-	内外面鉄釉、瀬戸美濃、18世紀後半。
223	Ⅳ	包含層	陶器 小碗	7.7	-	-	内外面鉄釉、瀬戸美濃、19世紀前半。
224	Ⅳ	包含層	磁器 碗	10.1	-	-	染付、肥前、18世紀後半。
225	Ⅳ	包含層	磁器 小碗	6.0	2.6	4.1	白磁、肥前、18世紀。
226	Ⅳ	包含層	磁器 小坏	6.6	2.8	4.4	染付、肥前、18世紀。
227	Ⅳ	包含層	陶器 丸皿	13.1	8.6	3.5	内外面長石釉、外面底部煤付着、外面重焼きによる溶着痕、被熱か、瀬戸美濃、18世紀前半。
228	Ⅳ	包含層	陶器 鉄絵皿	11.1	6.6	2.7	内外面鉄釉、内面鉄絵、目跡2ヶ所。
229	Ⅳ	包含層	陶器 皿	8.6	4.4	2.0	内外、外面上部鉄釉、見込標目、瀬戸美濃、18世紀後半。
230	Ⅳ	包含層	陶器 皿	-	5.1	-	内面鉄釉、外面鉄釉、見込標目、見込、肥前、17世紀中頃～後半。
231	Ⅳ	包含層	陶器 灯明皿	11.9	4.7	2.5	蓋皿、内外面鉄釉、内面磨目、口縁部油煙付着、信楽か。
232	Ⅳ	包含層	陶器 播鉢	-	15.1	-	内外面鉄釉、瀬戸美濃。
233	Ⅳ	包含層	陶器 壺	5.8	5.7	8.6	双耳壺、内外面鉄釉、瀬戸美濃、18世紀。
234	Ⅳ	包含層	陶器 壺	-	10.3	-	外面鉄釉、背垂として使用(火鉢骨)、瀬戸美濃、18世紀。
235	Ⅳ	包含層	陶器 徳利	-	14.1	-	外面鉄釉、瀬戸美濃、19世紀。
236	Ⅳ	包含層	陶器 壺	8.9	9.6	16.7	双耳壺、外面鉄釉、背垂として使用(火鉢骨)、瀬戸美濃、18世紀。
237	Ⅳ	包含層	陶器 壺	-	10.8	-	外面鉄釉、背垂として使用(火鉢骨)、113と読合可、瀬戸美濃、18世紀後半。
238	Ⅳ	包含層	陶器 壺	-	7.8	-	外面鉄釉、背垂として使用(火鉢骨)、瀬戸美濃、18世紀前半。
239	Ⅳ	包含層	陶器 壺	-	10.1	-	外面鉄釉、背垂として使用(火鉢骨)、瀬戸美濃、18世紀後半～19世紀前半。
240	Ⅳ	包含層	陶器 加工円盤	径3.8	-	-	染付碗を加工、瀬戸美濃、19世紀。
241	Ⅳ	包含層	瓦 加工円盤	径6.3	-	-	瓦(平瓦か)を加工、断面磨耗。
242	Ⅳ	包含層	金属製品 銭	2.5	1.9	0.7	銅製、嘉祐通寶(北宋銭)。
243	Ⅳ	包含層	金属製品 銭	2.4	1.9	0.6	銅製、元豊通寶(北宋銭)。
244	Ⅳ	包含層	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅製、寛永通寶(古寛永)。
245	Ⅳ	包含層	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅製、皇永通寶(北宋銭)。
246	Ⅳ	包含層	金属製品 銭	2.4	2.0	0.7	銅製、寛永通寶(新寛永)。
247	Ⅳ	包含層	瓦	長径9.7	短径8.1	厚さ2.0	断面磨耗激しい。砥石として転用か。
248	Ⅳ	包含層	陶器 加工円盤	径4.5	-	-	碗(鉄釉)を加工、瀬戸美濃。
249	Ⅳ	包含層	陶器 加工円盤	径4.5	-	-	皿(鉄釉)を加工、瀬戸美濃。
250	Ⅳ	包含層	陶器 加工円盤	径4.4	-	-	碗(鉄釉)を加工、瀬戸美濃。
251	Ⅳ	包含層	瓦 加工円盤か	径7.5	-	-	半円形、瓦(平瓦か)を加工、断面一部磨耗。
252	Ⅳ	包含層	瓦 加工円盤	径3.8	-	-	瓦(平瓦か)を加工、断面磨耗。
253	Ⅳ	木櫃1	金属製品 銭	2.5	2.1	0.5	銅銭、永樂通寶。

表4 遺物一覧表

遺物番号	遺構面	層位/遺構	器種	法量(cm)			調整・技法の特徴等
				口径	底径	器高	
254	IV	木棺1	金属製品 銭	2.5	1.9	0.6	銅銭, 寛永通寶(古寛永)。
255	IV	木棺1	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅銭, 寛永通寶(古寛永)。
256	IV	木棺1	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅銭, 寛永通寶(古寛永)。
257	IV	木棺1	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅銭, 寛永通寶(古寛永)。
258	IV	木棺1	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅銭, 寛永通寶(古寛永)。
259	IV	木棺1	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。背面「文」。
260	IV	木棺1	金属製品 銭	2.6	2.0	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。背面「文」。
261	IV	木棺1	金属製品 銭	2.5	2.0	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。背面「文」。
262	IV	木棺1	金属製品 銭	2.4	1.9	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。
263	IV	木棺1	金属製品 銭	2.3	1.9	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。
264	IV	木棺1	金属製品 銭	2.3	1.8	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。
265	IV	木棺1	金属製品 銭	2.3	1.9	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。
266	IV	木棺1	金属製品 銭	2.3	1.8	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。
267	IV	木棺1	金属製品 銭	2.6	2.0	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。
268	IV	木棺1	木製品 人形	-	-	-	-
269	IV	木棺1	木製品 燂突	径5.3	-	6.2	鉄芯。
270	IV	木棺1	木製品 多塔	径13.8	-	13.8	7段, 墨書(横線)。
597	IV	木棺1	木製品 数珠	-	-	-	中央に穿孔。
271	IV	木棺2	土師器 皿	12.3	5.9	2.6	ロクロ成形。
598	IV	木棺2	木製品 数珠	-	-	-	中央に穿孔。
272	IV	木棺2	磁器 仏飯器	8.1	4.3	5.8	染付, 高台内無軸, 肥前, 18世紀後半か。
599	IV	木棺3	木製品 数珠	-	-	-	中央に穿孔。
600	IV	木棺4	木製品 数珠	-	-	-	中央に穿孔。
273	IV	木棺6	木製品 小杯	6.1	5.1	4.8	274と275と入れ子状に出土。
274	IV	木棺6	木製品 小杯	4.9	2.3	4.0	273に入って出土。
275	IV	木棺6	木製品 小杯	4.7	2.0	3.6	274に入って出土。
276	IV	木棺6	木製品 鳥	全長19.6	幅3.7	高さ5.1	非輪/輪木製, 目と耳弁は骨で貫孔, 金製(目), 後輪は本体内に装嵌。
277	IV	木棺6	木製品 鳥	全長3.6	幅0.7	高さ1.4	体部朱色に彩色, 目を墨で表現。
278	IV	木棺6	瓦質土器 火舎か	-	-	-	脚部か。
279	IV	木棺6	陶器 水注	2.5	4.5	7.7	外面鉄軸に灰釉施しかけ, 瀬戸美濃, 18世紀前半。
280	IV	木棺6	陶器 小瓶	1.4	3.4	4.4	外面鉄軸+内面灰釉施しかけ(底部分張りおとし), 瀬戸美濃, 18世紀。
601	IV	木棺7	木製品 数珠	-	-	-	中央に穿孔。
602	IV	木棺9	木製品 数珠	-	-	-	中央に穿孔。
281	IV	木棺10	ガラス製品 数珠	高さ0.5	幅0.5	厚さ0.3	中央に穿孔。
282	IV	木棺12	木製品 不明	径4.1	-	5.0	先端に金属(鉄)打ち込まれる。
283	IV	木棺12	木製品 燂突	径4.8	-	6.6	上部平坦中央と先端に金属(鉄)打ち込まれる, 側面上半朱色彩色。
284	IV	木棺12	磁器 紅猪口	6.7	3.2	2.8	内面付着物, 肥前, 18世紀中葉。
285	IV	木棺17	金属製品 銭	2.5	1.9	0.6	銅銭, 寛永通寶(古寛永)。
286	IV	木棺17	金属製品 銭	2.5	2.0	0.5	銅銭, 寛永通寶(古寛永)。
287	IV	木棺17	金属製品 銭	2.4	1.9	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。
288	IV	木棺17	金属製品 銭	2.3	1.9	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。
289	IV	木棺17	金属製品 銭	2.5	1.9	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。
290	IV	木棺17	金属製品 銭	2.6	2.0	0.6	銅銭, 寛永通寶(新寛永)。背面「文」。
291	IV	木棺17	土師器 皿	11.4	5.5	1.4	非ロクロ成形。
603	IV	木棺19	木製品 数珠	-	-	-	中央に穿孔。
604	IV	木棺24	木製品 数珠	-	-	-	中央に穿孔。
292	IV	木棺25	木製品 数珠	直径0.6	厚さ0.2	-	中央に穿孔。
605	IV	木棺26	木製品 数珠	-	-	-	中央に穿孔, 中板の下にて出土。
294	IV	木棺42	木製品 不明	径4.9	孔径1.0	幅1.9	車輪小。
295	IV	木棺44	木製品 数珠	直径0.7	厚さ0.1	-	多角形の薄板, 中央に穿孔。
606	IV	木棺44	木製品 数珠	-	-	-	中央に穿孔。
296	IV	木棺45	土師器 皿	-	-	2.1	非ロクロ成形。
293	IV	不明遺構(方形木棺)	木製品 柄	-	0.2	-	朱色漆。
297	IV	墓 盛土	土師器 皿	11.8	-	-	非ロクロ成形。
298	IV	墓 盛土	土師器 皿	-	5.7	-	ロクロ成形。
299	IV	墓 盛土	金属製品 錠	長さ4.8	高さ3.0	厚さ1.4	鍍金。
300	IV	不明遺構の南	瓦質土器 瓦盤	直径20.2	-	器高19.6	-
301	IV	土坑1	山茶碗 碗	-	5.4	-	内面指圧風, 付高台, モミガラ瓶, 東海地方南部系, 13世紀前半。
302	IV	土坑1	土師器 皿	11.5	7.1	1.8	非ロクロ成形。
303	IV	土坑1	土師器 羽釜	-	-	-	外面体部ハクメ, 外面煤付着, 中北勢, 16世紀か。
304	IV	土坑1	土師器 鍋	31.6	-	-	外面煤付着, 18世紀後半。
305	IV	土坑1	陶器 碗	13.5	-	-	刷毛目茶碗, 内外面白泥刷毛目, 瀬戸美濃, 18世紀後半。
306	IV	土坑1	陶器 小碗	6.5	2.8	3.9	内外面灰釉。
307	IV	土坑1	磁器 碗	9.5	-	-	染付, 肥前, 18世紀。
308	IV	土坑1	磁器 碗	11.0	-	-	染付, 肥前, 19世紀。

表5 遺物一覧表

遺物番号	遺構面	層位/遺構	器種	法量(cm)			調整・技法の特徴等
				口径	底径	器高	
309	IV	土坑1	磁器 碗	-	4.5	-	染付、染付、裏付砂付着。肥前、18世紀。
310	IV	土坑1	磁器 碗	11.3	4.4	5.9	染付、飯茶碗。肥前、18世紀後半。
311	IV	土坑1	磁器 碗	9.3	4.9	5.0	染付、瀬戸美濃、19世紀中葉。
312	IV	土坑1	磁器 碗	12.7	3.8	5.8	内外面灰釉、高台周辺被熱。瀬戸美濃。
313	IV	土坑1	磁器 碗	11.1	4.8	6.3	染付、飯茶碗。徳藩。肥前、18世紀後半～19世紀前半。
314	IV	土坑1	磁器 碗	9.3	3.7	5.5	染付、瀬戸美濃か、19世紀中葉。
315	IV	土坑1	磁器 碗	10.9	4.8	6.1	染付、徳藩。瀬戸美濃、19世紀前半。
316	IV	土坑1	木製品 碗	12.0	6.1	4.3	内外面黒色漆。高台内に朱「柳」。
317	IV	土坑1	木製品 碗	-	6.0	-	内外面黒色漆。高台内に朱「柳」。
318	IV	土坑1	木製品 碗	11.9	5.8	4.2	内外面黒色漆。高台内に朱「柳」。
319	IV	土坑1	磁器(陶胎)茶器湯呑	7.2	3.2	5.8	染付、外面「柳堂御茶所」。瀬戸美濃か、19世紀前半。
320	IV	土坑1	磁器(陶胎)茶器湯呑	7.1	-	-	染付、外面「柳堂御茶所」。瀬戸美濃か、19世紀前半。
321	IV	土坑1	磁器(陶胎)茶器湯呑	6.8	-	-	染付、外面「柳堂御茶所」。瀬戸美濃か、19世紀前半。
322	IV	土坑1	磁器(陶胎)茶器湯呑	6.9	3.6	5.9	染付、外面「柳堂御茶所」。瀬戸美濃か、19世紀前半。
323	IV	土坑1	磁器(陶胎)茶器湯呑	6.8	-	-	染付、外面「柳堂御茶所」。瀬戸美濃か、19世紀前半。
324	IV	土坑1	磁器(陶胎)茶器湯呑	-	-	-	染付、外面「柳」(御茶所)。瀬戸美濃か、19世紀前半。
325	IV	土坑1	磁器 箱型湯呑	6.7	3.8	5.6	染付、外面口縁部漆付着。肥前、19世紀前半、19世紀後半。
326	IV	土坑1	磁器 猪口	8.0	4.2	6.2	染付、口紅。徳藩。肥前、17世紀末～18世紀初。
327	IV	土坑1	陶器 丸皿	10.0	6.6	1.8	内外面灰釉。高台内目跡2ヶ所。瀬戸美濃、18世紀後半。
328	IV	土坑1	陶器 灯明皿	10.5	5.9	2.1	蓋皿、内外面鉄釉。瀬戸美濃、18世紀後半～19世紀前半。
329	IV	土坑1	陶器 灯明皿	9.7	4.3	2.4	蓋皿、内外面鉄釉。内外面口縁部による帯形痕。瀬戸美濃、18世紀後半。
330	IV	土坑1	陶器 灯明皿	11.0	5.8	2.0	蓋皿、内外面鉄釉。内外面口縁部による帯形痕。瀬戸美濃、18世紀後半。
331	IV	土坑1	陶器 灯明皿	7.4	3.6	2.4	受皿、内面灰釉、受部周辺油焼。
332	IV	土坑1	磁器 皿	14.9	8.9	2.9	染付、目跡2ヶ所。肥前、17世紀後半。
333	IV	土坑1	磁器 皿	13.6	10.4	4.2	染付、徳藩。肥前、18世紀前半。
334	IV	土坑1	陶器 種鉢	-	20.2	-	内外面鉄釉。底部中央に直径4.0の穿孔。瀬戸美濃、19世紀。
335	IV	土坑1	陶器 鉢	-	17.4	-	笠原鉢、内外面灰釉、内面鉄釉。瀬戸美濃、17世紀後半。
336	IV	土坑1	陶器 鉢	-	13.5	-	笠原鉢、内外面灰釉、内面鉄釉。瀬戸美濃、17世紀後半。
337	IV	土坑1	陶器 鉢	-	8.2	-	内外面灰釉、内面目跡1ヶ所。瀬戸美濃。
338	IV	土坑1	磁器 蓋物	12.7	-	-	外面瑠璃釉、内面無釉。
339	IV	土坑1	陶器 植木鉢	14.0	-	-	外面灰釉。瀬戸美濃、19世紀。
340	IV	土坑1	陶器 壺	-	14.2	-	内外面錆釉。瀬戸美濃、16世紀か。
341	IV	土坑1	陶器 德利	3.7	10.3	25.5	内外面灰釉、外面口縁部「口馬印」(半七)「口和屋」。瀬戸美濃、19世紀。
342	IV	土坑1	磁器 小瓶	-	4.0	-	染付、瀬戸美濃、19世紀前半。
343	IV	土坑1	陶器 兼用	5.7	4.4	4.7	内外面鉄釉。底部釘穴。瀬戸美濃、18世紀後半。
344	IV	土坑1	瓦質土器 火鉢か	28.4	21.8	22.3	
345	IV	土坑1	陶器 土瓶	9.9	-	-	内面上方、外面鉄釉、口縁端部無釉、外面横位に沈線・幾丁線。外面底部煤付着。内外面底部付着物。
346	IV	土坑1	陶器 甕	51.5	-	-	赤物、常滑、19世紀前半。
347	IV	土坑1	陶器 加工円盤	径4.8	-	-	甕(鉄軸)を加工。瀬戸美濃。
348	IV	土坑1	陶器 加工円盤	径3.3	-	-	甕か壺(真徳)を加工。常滑。
349	IV	土坑1	金属製品 釘	全長9.0	幅0.5	-	鉄製。
350	IV	土坑1	金属製品 釘	全長5.9	幅0.3	-	鉄製。
351	IV	土坑1	金属製品 釘	全長4.3	幅0.5	-	鉄製。
352	IV	土坑1	金属製品 釘	全長2.9	幅0.3	-	鉄製。
353	IV	土坑1	木製品 柳	全長8.0	幅3.2	厚さ0.5	
354	IV	土坑1	木製品 曲物	-	-	10.0	
355	IV	土坑1	木製品 下駄	-	-	-	差南下駄。縦幅22.3 横幅7.1 最大高6.8 最小高5.5
356	IV	土坑1	木製品 下駄	-	-	-	連南下駄。縦幅22.2 横幅7.2 最大高4.0 最小高2.9
357	IV	土坑1	木製品 下駄	-	-	-	連南下駄。縦幅22.5 横幅7.3 最大高4.5 最小高2.5
358	IV	土坑1	木製品 板	直径12.7	-	厚さ0.9	円形。外周付帯に幅5の曲付つまみ。横印「御坊」[物]。
359	IV	土坑1	木製品 板	直径8.4	-	厚さ0.6	円形。墨書「伊勢」[口乃]「桑」[口乃]「口寺」。
360	IV	土坑1	石製品 砥石	-	横幅5.8	厚さ1.5	
361	IV	土坑1	磁器 碗	9.2	4.3	5.1	染付、瀬戸美濃、19世紀中葉。
362	IV	土坑1	磁器 碗	7.2	3.7	3.7	染付、肥前、19世紀。
363	IV	土坑1	陶器 蓋	7.7	-	-	外面灰釉。瀬戸美濃。
364	IV	土坑1	陶器 土瓶	-	5.7	-	内外面灰釉。外面体部銅緑釉。外面底部墨書。
365	IV	土坑1	磁器 蓋	9.7	-	-	染付、口紅。肥前、18世紀後半～19世紀前半。
366	IV	土坑1	磁器 蓋か	5.0	-	-	製付。内面体部灰釉。外面白色に朱の鉄。口縁部内面口縁部周辺被熱。
367	IV	土坑1	磁器 壺	6.8	4.1	1.9	染付、つまみ内におわずかに朱の痕跡。肥前、18世紀中葉。
368	IV	土坑1	陶器 炭鉢	縦幅38.0	横幅38.8	-	内面内端角磨削。
369	IV	土坑2	土師器 皿	10.1	5.6	1.9	非口口成形。
370	IV	土坑2	陶器 碗	11.2	5.3	7.2	内外面鉄釉。高台周辺煤付着。内面部分着。瀬戸美濃、18世紀前半。
371	IV	土坑2	磁器 碗	10.5	4.2	6.0	染付、肥前、17世紀後半。
372	IV	土坑2	木製品 木杓	11.5	5.1	4.6	外面黒色漆。内面朱色漆。外面に草花の絵が彩色で磨かれる。

表6 遺物一覧表

遺物番号	遺構面	層位/遺構	器種	法量(cm)			調整・技法の特徴等
				口径	底径	器高	
373	IV	土坑 2	木製品 羽子板	-	-	-	
374	IV	土坑 2	木製品 不明	-	-	-	黒色漆、朱色漆、朱で「羨寛口」。
375	IV	土坑 4	陶器 皿	-	7.4	-	内外面灰軸。見込貝須絵。目跡 1ヶ所。瀬戸美濃。
376	V	包含層	須恵器 椀	11.0	5.9	2.6	痕跡か。8～9世紀。
377	V	包含層	山茶碗 碗	-	8.7	-	付台高。モミガラ瓶。東海地方南部系。12世紀中葉。
378	V	包含層	山茶碗 碗	-	6.4	-	付台高。モミガラ瓶。東海地方南部系。12世紀後半。
379	V	包含層	山茶碗 碗	-	5.3	-	付台高。モミガラ瓶。内面磨け付。見込みに附着。東海地方南部系。12世紀後半。
380	V	包含層	山茶碗 碗	-	-	4.4	東海地方南部系。13世紀～14世紀。
381	V	包含層	山茶碗 碗	-	5.8	-	見込みに指圧痕。東海地方南部系。13世紀後半。
382	V	包含層	山茶碗 碗	-	4.9	-	見込みに重ね焼きによる滑痕。東海地方南部系。13世紀後半。
383	V	包含層	山茶碗 碗	-	4.2	-	破損後被熱。東海地方南部系。13世紀後半。
384	V	包含層	山茶碗 碗	-	-	4.5	東海地方南部系。13世紀～14世紀。
385	V	包含層	山茶碗 小皿	7.8	5.2	1.6	見込みに附着。内面磨け付。外面磨け付。東海地方南部系。12世紀中葉。
386	V	包含層	古瀬戸 平碗	18.2	-	-	内外面灰軸。瀬戸美濃。14世紀末～15世紀初頭。
387	V	包含層	古瀬戸 縁軸小皿	9.4	5.0	2.4	内外面とも、口縁のみに灰軸。瀬戸美濃。15世紀中葉。
388	V	包含層	古瀬戸 壺	11.0	-	-	内外面灰軸。破損後被熱。瀬戸美濃。15世紀中葉。
389	V	包含層	磁器 皿	-	-	-	青磁。中国。
390	V	包含層	磁器 皿	-	-	-	青磁。中国。15世紀。
391	V	包含層	土師器 皿	12.8	7.9	2.0	非口ロク成形。
392	V	包含層	土師器 皿	11.8	7.0	2.0	非口ロク成形。
393	V	包含層	土師器 皿	11.8	6.8	2.0	非口ロク成形。
394	V	包含層	土師器 皿	11.5	5.4	1.9	非口ロク成形。
395	V	包含層	土師器 皿	11.3	8.1	1.6	非口ロク成形。
396	V	包含層	土師器 皿	11.3	5.1	1.6	非口ロク成形。
397	V	包含層	土師器 皿	11.1	7.3	1.4	非口ロク成形。
398	V	包含層	土師器 皿	11.0	7.3	1.8	非口ロク成形。
399	V	包含層	土師器 皿	10.6	7.6	1.7	非口ロク成形。
400	V	包含層	土師器 皿	-	-	2.1	非口ロク成形。
401	V	包含層	土師器 皿	-	-	1.9	非口ロク成形。
402	V	包含層	土師器 皿	-	-	1.4	非口ロク成形。
403	V	包含層	土師器 皿	12.2	8.5	2.0	非口ロク成形。口縁部油煙付着。
404	V	包含層	土師器 皿	12.1	6.0	1.8	非口ロク成形。口縁部油煙付着。
405	V	包含層	土師器 皿	12.0	-	-	非口ロク成形。口縁部油煙付着。
406	V	包含層	土師器 皿	11.5	7.5	1.7	非口ロク成形。口縁部油煙付着。
407	V	包含層	土師器 皿	11.2	6.8	1.5	非口ロク成形。口縁部油煙付着。
408	V	包含層	土師器 皿	-	-	1.9	非口ロク成形。口縁部油煙付着。
409	V	包含層	土師器 皿	10.6	7.2	1.8	非口ロク成形。口縁部油煙付着。
410	V	包含層	土師器 鍋	28.2	-	-	外面下半へ削り。外面煤付着。17世紀末～18世紀初。
411	V	包含層	土師器 鍋	-	-	-	内外面ナゲ調整。
412	V	包含層	土師器 羽釜	-	-	-	外面煤付着。
413	V	包含層	土師器 鍋	-	-	-	外面体部へ削り。内面刷毛外面煤付着。17世紀末～18世紀初。
414	V	包含層	土師器 蓋	7.1	4.8	1.9	壊壇壺。
415	V	包含層	土師器 蓋	6.1	-	1.8	壊壇壺。内面口縁部煤付着。
416	V	包含層	土師器 蓋	6.7	-	1.7	壊壇壺。
417	V	包含層	土師器 壊壇壺	5.2	-	-	内面底部。体部下半に布目痕。
418	V	包含層	陶器 天目茶碗	12.0	4.8	6.7	内面・外面上部鉄軸。瀬戸美濃。18世紀中葉。
419	V	包含層	陶器 天目茶碗	11.4	-	-	内面・外面上部鉄軸。瀬戸美濃。18世紀前半。
420	V	包含層	陶器 天目茶碗	-	-	-	内面・外面上部鉄軸。瀬戸美濃。18世紀前半。
421	V	包含層	陶器 天目茶碗	-	3.7	-	内面鉄軸。削り出し高台。瀬戸美濃。18世紀中葉。
422	V	包含層	陶器 天目茶碗	-	4.4	-	内外面鉄軸。瀬戸美濃。18世紀中葉。
423	V	包含層	陶器 碗	10.2	-	-	尾呂系。内外面鉄軸。灰軸なし。瀬戸美濃。17世紀後半から18世紀前半。
424	V	包含層	陶器 碗	11.0	-	-	内外面灰軸。京焼風。
425	V	包含層	陶器 丸碗	-	6.1	-	内外面灰軸。削り出し高台。瀬戸美濃。18世紀前半。
426	V	包含層	磁器 碗	8.9	4.8	6.4	白磁。畳付砂目。肥前。17世紀。
427	V	包含層	磁器 碗	-	4.2	-	高台内にハリの痕跡。畳付砂付着。肥前。17世紀中葉。
428	V	包含層	磁器 碗	10.7	4.7	5.8	染付。肥前。17世紀後半。
429	V	包含層	磁器 碗	10.6	-	-	染付。
430	V	包含層	磁器 小坏	6.7	2.7	4.9	染付。砂目。内面鉄しょう付着。肥前。17世紀後半。
431	V	包含層	磁器 碗	14.0	5.8	4.4	染付。畳付砂付着。外面体部下半。高台内削り。中国か。
432	V	包含層	磁器 仏飯器	-	4.2	-	高台内に軸。畳付無軸。肥前。
433	V	包含層	陶器 皿	12.5	7.2	2.9	内外面灰軸。高台内墨書「寺」。瀬戸美濃。17世紀後半。
434	V	包含層	陶器 丸皿	10.9	4.0	4.3	内外面鉄軸の上に灰軸。肥前。16世紀後半か。
435	V	包含層	陶器 丸皿	11.3	7.1	1.9	内外面長石軸。底部軸めぐり取り。瀬戸美濃。17世紀前半。
436	V	包含層	陶器 皿	12.6	5.2	2.2	内外面灰軸。口縁部油煙付着。
437	V	包含層	陶器 碗か	-	8.0	-	内外面長石軸。見込目跡。

表7 遺物一覧表

遺物番号	遺構面	層位/遺構	器種	法量(cm)			調整・技法の特徴等
				口径	底径	器高	
438	V	包含層	陶器 茶皿	12.9	8.3	2.6	内外面灰釉、瀬戸美濃、17世紀後半。
439	V	包含層	陶器 皿	12.3	5.7	2.8	輪壳皿、内外面灰釉、内面見込磨面、高台部磨面、瀬戸美濃、17世紀後半。
440	V	包含層	陶器 輪壳皿	12.4	7.1	3.1	輪壳皿、内外面灰釉、瀬戸美濃、17世紀後半。
441	V	包含層	陶器 丸皿	12.8	6.7	2.9	内外面長石釉、高台内輪めぐり取り、瀬戸美濃、17世紀前半。
442	V	包含層	陶器 皿	12.3	8.1	3.1	内外面灰釉、摺絵(鉄)、瀬戸美濃、18世紀前半。
443	V	包含層	陶器 皿	13.5	6.7	2.7	輪壳皿、内外面灰釉、瀬戸美濃、17世紀後半。
444	V	包含層	陶器 碗	13.5	4.5	4.5	内外面灰釉、内面鉄絵、弓紙摺り、金彩、京・信楽、18世紀前半。
445	V	包含層	陶器 播鉢	31.4	-	-	内外面鉄釉、内面煤付着、瀬戸美濃、17世紀後半。
446	V	包含層	陶器 播鉢	-	-	-	内外面鉄釉、瀬戸美濃、18世紀前半。
447	V	包含層	陶器 鉢	-	-	-	焼締。
448	V	包含層	陶器 播鉢	39.2	-	-	内外面鉄釉、瀬戸美濃、18世紀後半。
449	V	包含層	陶器 鉢	26.3	17.1	8.7	笠形鉢、内外面灰釉、見込、高台周辺目録、瀬戸美濃、17世紀後半。
450	V	包含層	陶器 鉢	21.8	-	-	無軸、常滑古。
451	V	包含層	陶器 鉢	29.6	-	-	無軸、常滑、15世紀。
452	V	包含層	陶器 香炉	13.3	-	-	外面灰釉、内面上部煤付着、瀬戸美濃。
453	V	包含層	陶器 香炉	-	7.8	-	摺絵(鉄)、外面灰釉、瀬戸美濃、18世紀前半。
454	V	包含層	吉瀬戸 梅型形香炉	-	6.9	-	外面鉄釉、底部糸切り軌、瀬戸美濃、14世紀末～15世紀中葉。
455	V	包含層	陶器 碗	11.7	13.0	5.4	無軸、常滑、13世紀。
456	V	包含層	陶器 風炉	30.0	18.0	-	無軸、内面上半煤付着。
457	V	包含層	陶器 梨型 全長11.0	幅6.4	4.0	-	内外面灰釉、摺絵(鉄)、瀬戸美濃、17世紀後半～18世紀前半。
458	V	包含層	陶器 水注	5.0	8.1	10.4	外面灰釉・緑釉流し掛け。
459	V	包含層	陶器 甕	36.6	-	-	無軸、常滑、13世紀第3四半期。
460	V	包含層	陶器 甕	-	-	-	無軸、常滑古。
461	V	包含層	陶器 加工円盤	径10.5	-	-	甕(高埴)の底部加工。一部断面磨耗、常滑。
462	V	包含層	瓦 加工円盤	径5.4	-	-	瓦(平瓦か)を加工。
463	V	包含層	骨製品 不明	全長4.0	全径1.6	孔径1.0	-
464	V	包含層	金属製品 押幣	全長6.6	-	孔径1.0	鎌首、銅製、鎌字一部残存。
465	V	包含層	金属製品 銭	2.4	2.0	0.6	銅銭、寛永通寶(新寛永)。
466	V	包含層	木製品 板	全長9.6	幅2.5	厚さ0.4	荷札か、墨書。
467	V	包含層	木製品 板	全長7.9	幅2.7	厚さ0.5	荷札か、墨書両面、「暫く上」。
468	V	包含層	木製品 板	直径13.4	-	厚さ0.6	円形、外裏付近に4×5の木製のつまみ、墨書「納豆 十念寺」。
469	V	包含層	石製品 硯	長さ13.8	幅7.2	厚さ1.2	裏面に釘書「天下第一」(3ヶ所)。
470	V	包含層	陶器 播鉢	-	14.0	-	内外面鉄釉、見込使用痕、瀬戸美濃。
471	V	包含層	陶器 小碗	-	2.6	-	内外面灰釉、高台内に墨書。
472	V	包含層	陶器 播鉢	-	-	-	内外面鉄釉、瀬戸美濃、17世紀後半。
473	V	包含層	陶器 播鉢	-	-	-	内外面鉄釉、瀬戸美濃、17世紀後半。
474	V	包含層	陶器 播鉢	-	-	-	内外面鉄釉、瀬戸美濃、17世紀後半。
475	V	包含層	陶器 播鉢	-	11.4	-	内外面鉄釉、見込焼成時の溶着痕、瀬戸美濃。
476	V	包含層	山茶碗 碗	-	5.9	-	付高台、東海地方南部系、12世紀中葉。
477	V	土坑1	陶器 播鉢	-	-	-	錆釉、瀬戸美濃、17世紀中葉。
478	V	土坑3	土師器 皿	-	-	1.5	非ロクロ成形、口縁部に油漉付着。
479	V	土坑3	土師器 皿	-	-	-	非ロクロ成形。
480	V	土坑3	陶器 皿	10.6	6.0	2.4	内外面灰釉、見込、外面底部目録、瀬戸美濃、17世紀後半～18世紀前半。
481	V	土坑3	陶器 皿	-	-	-	変型、内外面灰釉、瀬戸美濃。
482	V	土坑3	陶器 鉢	-	-	-	無軸。
483	V	土坑3	木製品 匱	全長20.7	-	厚さ0.3	-
484	V	土坑5	木製品 碗	-	6.1	-	外面黒色漆、内面朱色漆、外面紋様。
485	V	土坑5	磁器 皿	8.8	3.3	1.9	白磁、口縁部に油漉、肥前、18世紀。
486	V	土坑5	金属製品 釘	全長5.0	幅0.4	-	鉄製。
487	B/F(下面)	包含層	山茶碗 碗	-	4.8	-	東海地方南部系、13世紀後葉。
488	B/F(下面)	包含層	土師器 鉢	長さ約3.5cm	-	-	外面煤付着、15世紀～16世紀か。
489	B/F(下面)	包含層	土師	長さ3.9	幅1.2	孔径0.3	-
490	B/F(下面)	包含層	陶器 壺	12.6	-	-	外面灰釉。

註 銭貨の法量は外径・内径・孔径の順に掲げた。

表8 遺物一覧表



遺物番号	遺構面	層位/遺構	種類	部位	刻印 へら書き	刻印・へら書き内容	備考
491	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	下面	刻印	「御(用)」「勢州桑名」「御瓦師」丸に「十」	
492	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	下面	刻印	「曾井村」「小生村」「小山村」「七津屋村」「真同行」	
493	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	下面	刻印	「曾井村」「小生村」「小山村」「七津屋村」「真同行」	
494	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	下面	刻印	「曾井村」「小生村」「小山村」「七津屋村」「真同行」	
495	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	下面	刻印	「小山村」「七津屋村」「真同行」	同一瓦に517と併存
496	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「十」	
497	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「十」	
498	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「十」	
499	Ⅲ	包含層	丸瓦	後端面	刻印	丸に「セ」か	
500	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(直径約1.1cm)	
501	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(直径約1.1cm)	
502	Ⅲ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
503	Ⅲ	包含層	棧瓦	上面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
504	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
505	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(直径約0.8cm)	
506	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(直径約0.8cm)	
507	Ⅲ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	八弁花(直径約1.0cm)	
508	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	八弁花(直径約1.0cm)	
509	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	八弁花(直径約1.0cm)	
510	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	八弁花(直径約1.0cm)	
511	Ⅲ	Ⅱと2の間	丸瓦	凸面	刻印	八弁花(直径約0.9cm)	
512	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	八弁花(直径約0.7cm)	
513	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「三」(「三」は三角形に配置)	
514	Ⅲ	Ⅱ	平瓦	切込部端面	刻印	丸に「三」(「三」は三角形に配置)	
515	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「三」(「三」は三角形に配置)	
516	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「大」	
517	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「大」	同一瓦に495と併存
518	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	三角に隔「丸」	
519	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	三角に隔「丸」	
520	Ⅲ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	三角に隔「丸」	
521	Ⅲ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	三角に隔「丸」	
522	Ⅲ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	三角に隔「丸」	
523	Ⅲ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	三角に隔「丸」	
524	Ⅲ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	三角に隔「丸」	
525	Ⅲ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	三角に隔「丸」	
526	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	三角に隔「丸」	
527	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「上」	
528	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「上」	
529	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「上」	
530	Ⅲ	包含層	軒平瓦又は軒棧瓦	脇区石	刻印	丸に隔「上」	
531	Ⅲ	包含層	道具瓦?	上面	刻印	全面に複数種類の花形かが多数(292個)	
532	Ⅲ	包含層	道具瓦?	上面	刻印	全面に複数種類の花形かが多数(262個)	
533	Ⅲ	包含層	道具瓦?	上面	刻印	全面に複数種類の花形かが多数(223個)	
534	Ⅲ	包含層	不明	面	刻印	全面に複数種類の花形かが多数(92個)	
535	Ⅲ	包含層	丸瓦	玉縁部上面	刻印	全面に丸が多数(5個)	
536	Ⅲ	包含層	軒丸瓦	瓦当裏	へら書きか	不明	
537	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「へ」	
538	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸(枠のみ)	
539	Ⅲ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸(枠のみ)	
540	Ⅲ	土坑13	平瓦又は棧瓦	下面	刻印	「(勢州桑名)」	
541	Ⅲ	土坑14	平瓦又は棧瓦	切込部端面	刻印	丸に「三」(「三」は三角形に配置)	
542	Ⅲ	土坑14	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「三」	
543	Ⅲ	Ⅱと3の間	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸	
544	Ⅲ	Ⅱと3の間	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	八弁花(直径約1.0cm)	
545	Ⅲ	溝1	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線細い、直径約1.0cm)	

表9 瓦刻印・へら書き一覧

遺物番号	遺構面	層位/遺構	種類	部位	刻印 ヘラ書き	刻印・ヘラ書き内容	備考
546	Ⅲ	溝 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	三角に「丸」	
547	Ⅲ	溝 3	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	三角に「丸」	
548	Ⅲ	土坑17	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	八弁花(直径約1.0cm)	
549	Ⅲ	土坑17	平瓦又は棧瓦	切込部端面	刻印	丸に「三」	
550	Ⅲ	土坑17	軒平瓦又は軒棧瓦	脇区右	刻印	丸に「一」(直径約0.7cm)	
551	Ⅲ	土坑17	平瓦	端面	刻印	八弁花(直径約0.7cm)	
552	Ⅲ	竈 5	軒平瓦又は軒棧瓦	平部分の取置区内	刻印	丸に「一」(直径約0.8cm)	
553	Ⅲ	竈 8	平瓦又は棧瓦	上面	ヘラ書き	「寛延」□□	
554	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
555	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
556	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
557	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
558	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
559	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
560	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線細い、直径約1.0cm)	
561	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線細い、直径約1.0cm)	
562	Ⅳ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(線細い、直径約1.0cm)	
563	Ⅳ	包含層	平瓦	端面	刻印	丸に「一」(線細い、直径約1.0cm)	
564	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線細い、直径約1.0cm)	
565	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(直径約0.8cm)	
566	Ⅳ	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(直径約0.9cm)	
567	Ⅳ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	八弁花(直径約1.0cm)	
568	Ⅳ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	三角に「丸」	
569	Ⅳ	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	三角に「丸」	
570	Ⅳ	包含層	浦貝瓦	上面	刻印	全面に複数種類の花形が多数(204個)	
571	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	切込部端面	刻印	丸に「十」(一が短い)	
572	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(直径約1.5cm)	
573	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(直径約1.5cm)	
574	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(直径約1.5cm)	
575	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(直径約1.3cm)	
576	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(線細い、直径約1.0cm)	
577	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(線細い、直径約1.0cm)	
578	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(線細い、直径約1.0cm)	
579	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「一」(線細い、直径約1.0cm)	
580	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	八弁花(直径約0.7cm)	
581	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「三」(「三」は三角形に配置)	
582	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	切込部端面	刻印	丸に「三」(「三」は三角形に配置)	
583	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「三」(「三」は三角形に配置)	
584	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	三角に「丸」	
585	Ⅳ	土坑 1	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	丸に「梅」	
586	Ⅳ	土坑 1	平瓦	上面	ヘラ書き	(不明 記号か)	
587	V	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
588	V	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
589	V	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
590	V	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
591	V	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
592	V	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
593	V	包含層	丸瓦	凸面	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
594	V	包含層	軒平瓦又は軒棧瓦	脇区右	刻印	丸に「一」(線太い、直径約1.0cm)	
595	V	包含層	平瓦又は棧瓦	端面	刻印	三角に「丸」	
596	V	包含層	軒丸瓦	瓦当裏	ヘラ書き	「又三」か	

部位の表現についての基本位置関係は屋根に負った状態で「上」「下」を決め、軒先側を「前」、棟側を「後」と定める。また、上下を「面」、前後の端を「端」、左右の端を「側」とし、基準面をそれぞれ「凸面」「凹面」「前端面」「後端面」「左側面」「右側面」とする。

表10 瓦刻印・ヘラ書き一覧



木箱番号	形状	直径(cm)	長辺(cm)	短辺(cm)	器高(cm)	蓋の有無	備考	年齢	性別	副葬品
木箱1	円形木箱	38.2	-	-	39.6	有	早桶、木釘、襷	4才前後	不明	金属製品銭15枚 水雲通寶(253) 寛永通寶(古)(254) 寛永通寶(古)(255) 寛永通寶(古)(256) 寛永通寶(古)(257) 寛永通寶(古)(258) 寛永通寶(文)(259) 寛永通寶(文)(260) 寛永通寶(文)(261) 寛永通寶(新)(262) 寛永通寶(新)(263) 寛永通寶(新)(264) 寛永通寶(新)(265) 寛永通寶(新)(266) 寛永通寶(新)(267) 木製品玩具 人形(268) 木製品玩具 独楽(269) 木製品玩具 多塔(270) 木製品数珠の玉9個(297)
木箱2	円形木箱	34.4	-	-	33.1(残)	有	早桶、木釘、襷	4才前後	不明	木製品数珠の玉6個(598)
木箱3	方形木箱	-	60.4	30.2	9.0	なし	鉄釘、底板4本	5才前後	不明	木製品数珠の玉8個(559)
木箱4	円形木箱	58.4	-	-	61.0(残)	なし	種、漆、部は付、量	壮年	男	木製品数珠の玉19個(600)
木箱5	方形木箱	-	27.0	29.7	3.4	なし	鉄釘	不明	不明	
木箱6	円形木箱	32.2	-	-	34.8(残)	有	早桶、木釘、襷	3～4才	不明	木製品玩具(273) 木製品玩具(274) 木製品玩具(275) 木製品玩具(276) 木製品玩具 鳥(277) 瓦器玩具カ(278) 陶器水注(279) 陶器小瓶(280) アワビ アカニシ
木箱7	円形木箱	34.1	-	-	39.3	有	早桶、木釘、襷	3～4才	不明	木製品数珠の玉1個(601)
木箱8	円形木箱	35.6	-	-	30.3	なし	早桶、木釘、襷	3～4才	不明	
木箱9	円形木箱	40.8	-	-	42.3	有	早桶、木釘、襷	6才前後、 2～3才	不明	木製品数珠の玉8個(602)
木箱10	方形木箱	-	36.6	15.8	11.2	なし	早桶、木釘、襷	2～3才、 乳児	不明	ガラス製品数珠の玉1個(281)
木箱11	円形木箱	38.0	-	-	不明	なし	早桶、木釘、襷	4才前後	不明	
木箱12	円形木箱	34.0	-	-	39.5	なし	早桶、木釘、襷	2～3才	不明	木製品玩具(282) 木製品玩具(283) 磁器小埴(284)
木箱13	円形木箱	25.7	-	-	28.5	有	早桶、木釘、襷	新生児	不明	木製品数珠の玉29個
木箱14	方形木箱	-	37.2	30.1	13.5	有	鉄釘、底板3本	2才前後	不明	木製品数珠の玉7個
木箱15	方形木箱	-	51.8	29.5	12.7	有	鉄釘、底板3本	2才前後	不明	

表12 IV面木箱一覧表

木箱番号	形状	直径(cm)	長辺(cm)	短辺(cm)	器高(cm)	蓋の有無	備考	年齢	性別	副産品
木箱16	方形木箱	-	17.7	22.5	7.0	なし	鉄釘	新生児	不明	
木箱17	方形木箱	-	44.8	31.1	11.6	なし	木釘、一枚板	12才前後、 8才前後	不明	金属製品銭6枚 寛永通寶(古)(285) 寛永通寶(古)(286) 寛永通寶(新)(287) 寛永通寶(新)(288) 寛永通寶(新)(289) 寛永通寶(新)(290) 寛永通寶(文)(291)
木箱18	方形木箱	-	40.2	25.1	8.6	有		2才前後、6 ヵ月前後	不明	木製品数珠の玉2個
木箱19	円形木箱	31.6	-	-	37.5	有	早桶、木釘、羅	1才6ヵ月、 新生児	不明	木製品数珠の玉40個(603)
木箱20	円形木箱	28.0	-	-	22.8	有	早桶、木釘、羅			
木箱21	方形木箱	-	48.9	30.5	12.0	有	鉄釘、底板3本	2才前後	不明	
木箱22	円形木箱	23.5	-	-	1.3	なし	早桶、一枚板	新生児	不明	
木箱23	方形木箱	-	38.5	19.5	5.6	有	鉄釘、底板4本	新生児	不明	
木箱24	円形木箱	32.0	-	-	35.0	有	早桶、木釘、羅	3～4才	不明	木製品数珠の玉2個(604)
木箱25	方形木箱	-	49.5	30.0	15.2	有	鉄釘、底板4本	3～4才	不明	木製品数珠の玉10個(292)
木箱26	方形木箱	-	52.5	30.2	19.1	なし	鉄釘、底板4本 中板有り、角材 を配し、上段と 下段に分けて ある。	6～12ヵ月 3～4才	不明	木製品数珠の玉22個(605)
木箱27	方形木箱	-	不明	不明	27.2	なし				
木箱28	方形木箱	-	不明	32.0	5.9	なし	鉄釘	3～4才	不明	
木箱29	方形木箱	-	31.5	24.1	17.9	なし	底板2本	6～7才	不明	
木箱30	方形木箱	-	60.3	32.5	13.4	有		4才	不明	
木箱31	方形木箱	-	27.3	17.8	11.3	なし	鉄釘、一枚板	5.0	不明	
木箱32	方形木箱	-	20.0	15.0	3.7	有		3～4才 新生児	不明	
木箱33	方形木箱	-	54.7	34.9	16.2	なし	鉄釘、底板4本	3～4才	不明	
木箱34	方形木箱	-	54.0	32.2	7.0	なし	木釘、一枚板	3～4才	不明	
木箱35	方形木箱	-	50.9	28.2	14.4	有	鉄釘、一枚板	3～4才 (2体)	不明	
木箱36	方形木箱	-	50.8	29.8	2.9	なし	鉄釘、底板3本	3才	不明	
木箱37	方形木箱	-	35.0	36.0	10.6	なし	鉄釘、一枚板			
木箱38	方形木箱	-	49.1	29.8	16.0	なし	鉄釘	3～4才	不明	
木箱39	方形木箱	-	33.0(残)	不明	6.8	なし	鉄釘			
木箱40	方形木箱	-	30.4	23.2	13.2	なし	鉄釘、一枚板小			
木箱41	方形木箱	-	41.1	36.1	12.1	なし	鉄釘、底板5本	5才	不明	
木箱42	方形木箱	-	49.5	26.5	9.4	有	木釘(蓋)	3才	不明	木製品玩具(294)
木箱43	方形木箱	-	54.1	25.8	14.5	なし	鉄釘、一枚板小	5才前後 2才前後	不明	
木箱44	円形木箱	19.9	-	-	11.0(残)	有	曲物、木釘、羅	新生児	不明	木製品数珠の玉2個(295,606)
木箱45	方形木箱	-	29.3(残)	不明	4.1	有		2才	不明	
木箱46	方形木箱	-	54.0	23.5(残)	12.0	なし	鉄釘	3才	不明	

表13 IV面木箱一覧表

## 第7章 出土人骨の分析

### 緒言

三重県桑名市に所座する浄土真宗法盛寺の境内から、木棺に埋葬された人骨が出土した。木棺は総数46基が検出され、円形と方形の2種類がある。それぞれの木棺は、4～5点づつ積み重ねられており、平面的には切り合いがない。したがって、まとめて埋葬されたと考えられる。概ね一つの木棺に1体が埋葬されているが、中には同一木棺内に複数の被葬者が埋葬されているものもある。人骨の記載は木棺番号に従う。なお、番号のついていない木棺外・木棺周辺等のラベルのついた人骨、火葬骨についてはそれに続いて記載してある。

木棺4以外の人骨は全て未成年の骨であった。未成年の頭蓋は成人のものと大きさだけでなく、形態的に大きく異なる。未成年の頭蓋の特徴として、歯槽部が発達せず上下顎骨が低いために顔面が小さい。鼻腔は幅が広く低い。眼窩は顔面が小さい割りに大きい。また、前頭結節と頭頂結節が明瞭に隆起するが、眉間や眉弓、乳様突起、外後頭隆起などの突出はない。四肢骨は骨体が滑らかな柱状であり、成人の四肢骨に見られる筋粗面の隆起などない。当遺跡出土人骨は、上記の特徴をもち、未成人骨として一般的である。したがって、人骨記載は個体数、年齢、保存状況、特記事項を示した。なお、小児の年齢を、浜田(1971)の7期の区分を参考にして、歯の萌出状態による年齢推定はBrothwell(1981)にしたがった。

### 第1節 人骨所見

**木棺1(4才前後)** ほぼ1体分の人骨が出土している。頭蓋は顔面から頭蓋底が大きく破損している。頭頂骨にも部分的に破損箇所がある。前頭縫合は10mm程度認められる。頭蓋形は卵形である。眼窩上壁には鉄欠乏性貧血が原因と考えられているクリブラ・オルビタリアが認められる。下顎骨は骨体部分のみが保存されている。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

	<u>1</u>	
v		iv v
		<u>6 7</u>

下線の永久歯は歯冠が半分以上形成されておらず、未萌出。

体幹骨では、椎体と椎弓が癒合していない椎骨が数点認められる。軸椎では、歯突起は癒合するが、椎体は未癒合である。肋骨は部分的に破損している箇所があるが、全体的保存は良好である。四肢骨は、左右上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、左右腸骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨が保存される。大腿骨以外は骨体部分の骨端が部分的に破損している。

**木棺2(4才前後)** ほぼ1体分として矛盾はない。頭蓋は、顔面と頭頂骨が破損している。前頭縫合はない。蝶後頭軟骨結合は未癒合である。下顎骨は、左側の一部が破損している。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

			6
		iii iv v	
v iv iii ii i	i ii iii iv v		
			6

体幹部では肋骨2点、椎骨破片、右鎖骨、左右腸骨が保存される。四肢骨では、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨が保存されている。大腿骨、脛骨、腓骨の両端は破損している。

**木棺3(5才前後)** 頭蓋は、前頭骨と右側頭骨が保存されている。眼窩上縁は曲線を呈する。眼窩上壁にはクリブラ・オルビタリアが認められる。右側頭骨の乳様突起は破損している。下顎骨は左側が破損している。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

7 6	1 2	6 7
v iv	i i ii	iv v
v iv iii		iv v
7 6		6 7

体幹・四肢骨では椎骨6点、肋骨片、左上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、左右腸骨、左右坐骨片、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左右距骨、左右踵骨と少数の骨端片が保存されている。いずれも骨端や骨幹の一部が破損している。

**木棺4（壮年 男）** 成人1体分の骨が比較的良好な保存状態で保存されている。

（頭蓋）頭蓋はほぼ完全であるが、頭蓋底の一部、顔面の一部、および右頬骨弓が破損している。頭蓋の大きさ、顔面の大きさも江戸時代人として平均的であるが、耳プレグマが大きい。上面観は、楕円形に近い。縫合の走向は比較的単純で、外板では分離する。右頭頂孔が開存している。前面観では、額は狭く、前頭結節の膨隆はない。前頭縫合や前頭縫合上痕跡は認められない。眉間や眉弓の隆起はさほど認められない。鼻根部の陥入はやや強い。前頭骨頬骨突起はやや頑丈である。眼窩上縁はゆるい曲線を描く。左眼窩上孔は孔をなす。眼窩口は高く、長軸は傾斜する。鼻前窩はない。梨状口の下縁は鋭角である。上顎骨歯槽突起は小さい。犬歯窩はない。側面観において、額の傾斜はさほど強くない。側頭線は高く、明瞭で、後頭骨まで入り込む。乳突上縁の隆起は強く、乳突上溝が深い。乳様突起は大きく頑丈である。頭頂切痕はない。頬骨は太く頑丈である。頬骨の張り出しはさほど強くない。鼓室板は比較的厚い。外耳孔は楕円形で、さほど大きくない。後面観の輪郭は、頭頂部が突出した家型である。外後頭隆起が明瞭である。底面観では、右側の一部が破損している。大後頭孔は楕円形で、後頭顆は小さい楕円形である。頭蓋の小変異は表1に示す通りである。

下顎骨は右下顎骨の一部が破損している。オトガイ隆起およびオトガイ結節は明瞭であるが、オトガイ三角を形成するほどではない。下顎枝幅（31）は狭い。筋突起自体は大きい。先端がやや後方を向き、下顎切痕は浅く狭い。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

／／6 5 4 3 0 0	0 0 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 2 0	1 2 3 4 5 6 7 8

咬耗は、エナメル質が磨り減る程度であるが、切歯の一部で象牙質がわずかに露出しており、プロカのⅠ～Ⅱに相当する。下顎右第3大臼歯は、近心方向に向かって萌出する。カリエスはない。

（上肢骨）鎖骨は、左右とも完全に保存されている。全体的に大きく頑丈である。円錐韧带結節は隆起する。肩甲骨は、肩峰や関節窩が大きく頑丈である。上腕骨は、右骨頭が破損している。鎖骨頭は大きい。骨自体はさほど太くなく、三角筋粗面も特に明瞭とはいえない。左右尺骨の橈骨切痕直下は陥没する。回外筋稜はやや張り出し、下方へのびる骨間縁の発達はおおむね良い。橈骨の骨頭や骨端は大きい。骨自体はさほど太くない。橈骨粗面の発達も概して悪い。したがって、肩甲骨など骨自体は大きい。上肢骨の筋肉の発達は良好とはいえない。

（下肢骨）左右寛骨は腸骨翼の一部に破損や亀裂があるだけで、ほぼ良好な保存状態である。大坐骨切痕の湾入は強く、寛骨臼は大きく深い。左右寛骨がつくる恥骨弓は鋭角である。仙骨は、幅広く、湾曲が強い。耳状面は狭く長い。左右大腿骨はほぼ完形である。比較的長く太い。殿筋粗面が明瞭で転子下縁が認められ、後面粗線はさほど発達していない。脛骨および腓骨の筋付着部の発達は比較的良好である。

（推定慎重）右大腿骨から推定した身長は藤井法で165 cmである。江戸時代男性平均を上回る。

そのほかに、3才から4才の右尺骨と、新生児あるいは乳児の右上腕骨、右尺骨、左右脛骨片が保存されている。

**木棺6（3～4才）** 1体分である。頭蓋では、顔面から頭蓋底が大きく破損し、頭蓋のみ保存されている。前頭結節が明瞭である。前頭縫合はなく、右眼窩上壁にはクリブラ・オルビタリアは見られない。上面観では、頭蓋形の輪郭は菱形に近い。インカ骨や縫合骨は認められない。右乳様突起は小さい。下顎骨は、左下顎骨の一部破損するが、右側の保存状態は良い。歯の保存状態は次の歯式の通りである。

	0 0 iii iv v
v iv 0 0 0	0 0 0 iv v

下顎第1大臼歯は歯槽に埋伏している。

体幹・四肢骨では、椎骨、肋骨、左右鎖骨、左右肩甲骨片、左右上腕骨、左右尺骨、左右橈骨、左右尺骨、左右腸骨、

左右坐骨、左右恥骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、そして左右距骨が保存されている。椎骨の椎弓と椎体は未癒合であるが、左右の椎弓は胸椎において癒合が完了している。

**木棺7 (3~4才)** ほぼ1体分が保存されている。頭蓋は頭蓋冠しか残っていない。顔面から頭蓋底にかけて破損している。頭蓋は類五角形で長頭に属する。前頭結節が顕著である。前頭縫合痕跡が5mm程度認められる。眉間や眉弓の隆起はない。鼻根部は平坦である。眼窩上壁には軽度のクリブラ・オルビタリアがある。縫合は、ラムダ縫合において縫合骨が認められる。下顎骨は比較的頑丈である。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

$$\begin{array}{c} \text{v iv iii oo} \quad | \quad \text{ooo iv v} \\ \hline \text{v iv iii oo} \quad | \quad \text{ooo iv v} \end{array}$$

第1大臼歯が歯槽の中にあり、未萌出状態である。

体幹・四肢骨では、椎骨、肋骨、左右鎖骨、右肩甲骨片、左上腕骨、左右尺骨、左右桡骨、左右尺骨、左右腸骨、左右坐骨、左右恥骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨が保存されている。椎骨は、椎体と椎弓が未癒合である。鎖骨は華著である。

**木棺8 (3~4才)** 1体分の人骨が保存されている。頭蓋は比較的保存状態がおおむね良好である。上面観においては、頭蓋はほぼ類五角形に近い。右頭頂結節は顕著である。前面観では、前頭結節が顕著である。前頭縫合はない。眼窩口は大きく、正方形に近い。梨状口の下縁は鈍で、前鼻棘は突出していない。側頭骨の乳様突起は小さい。縫合の走向はやや複雑である。左ラムダ縫合に縫合骨がある。後頭骨は概ね滑らかであるが、オビストクラニオン周辺がやや膨隆する。頭蓋底は、蝶後頭軟骨結合は未癒合。右の顎管は開存していない。下顎骨は、オトガイ部分がとっしゅしている。下顎体の下縁はやや曲線を描く。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

$$\begin{array}{c} \text{v iv iii ii o} \quad | \quad \text{i ii o iv v} \\ \hline \text{v iv iii ii i} \quad | \quad \text{oo iii iv v} \end{array}$$

第1大臼歯が歯槽の中にあり、未萌出状態である。

体幹・四肢骨では、椎骨、肋骨、左右鎖骨、右肩甲骨片、左上腕骨、右尺骨片、右桡骨片、左右腸骨、左右大腿骨、右脛骨、右腓骨が保存されている。椎骨は、椎体と椎弓が未癒合である。左右の椎弓も癒合していない。

**木棺9 (6才前後、2~3才)** 同一木棺内において、板の上から検出された頭蓋1と板の下から検出された頭蓋2とに分類されるが、頭蓋片のほとんどは6才前後の幼児のものである。右側頭骨椎体だけが2~3才の幼児のものである。

**6才前後** 前蓋骨片、上顎骨、左右側頭骨、後頭骨が保存されている。上顎骨の歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

$$\begin{array}{c} \text{6 v ooo 1} \quad | \quad \text{1 ooo v 6} \end{array}$$

この頭蓋に属する四肢骨は、右鎖骨、左尺骨、左右桡骨である。椎骨は椎体と椎弓が癒合し始めているものが数点認められる。

**2~3才** 頭蓋は右椎体のみ保存される。四肢骨は、左鎖骨、左上腕骨、左右桡骨、右尺骨、右脛骨が保存される。6才前後の四肢骨に比べ、一回り小さく華著である。咬絛がほとんどない左上顎第1乳切歯が保存される。根尖の吸収はない。椎骨は、椎弓と椎体未癒合である。

**木棺10 (2~3才、乳児)** 2~3才に属するものは、左右大腿骨近位部分と上顎左第2乳臼歯である。根尖は未完成である。乳児に属するものは右脛骨の近位半、腸骨片、基筋骨片である。2体ともそれぞれ1体分としては断片的で、保存されている骨も破損箇所が多い。

**木棺11 (4才前後)** 4才前後の幼児骨が1体分保存される。頭蓋は、頭頂骨片と上・下顎骨が残っているだけである。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。



v iv ○○○	i ○ iii iv
	○ iv v

第1大臼歯が歯槽中に埋伏している。乳臼歯はエナメル質が磨り減っているが象牙質は露出してない。

体幹・四肢骨は、椎骨、肋骨、左右鎖骨、左肩甲骨片、左右上腕骨、左右尺骨、左右橈骨体片、左右腸骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨片が保存されている。椎骨は、椎体と椎弓は未癒合であるが、左右の椎弓は癒合が完了している。

**木箱12 (2～3才)** 1体分の人骨がほぼ保存されている。

頭蓋は、頭頂骨、側頭骨の一部および右側の顔面が破損している。上面観において頭蓋形は卵形である。顔面では、前頭縫合が見られる。眉間や眉弓の隆起はなく、頭頂結節が明瞭である。鼻根部は平坦で、鼻骨も広い。眼窩口は高く、正方形に近い。眼窩上壁には軽度のクリブラ・オルビタリアが認められる。縫合の走向は全体として複雑である。ラムダ縫合に縫合骨がある。後面観は中央付近の高まりはなく、円形である。オピストクラニオン付近がやや膨隆する。乳様突起は小さいが下垂する。外耳孔は比較的大きな楕円形である。底面観では、蝶形骨が破損している。後頭窩は不完全である。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

		v
	○ ii ○ iv	
iv ○○○	○○○ iv	
v		v

第2乳臼歯は萌出が始まったばかりである。下顎骨は左下顎枝が破損する。オトガイ付近ではわずかながら隆起している。

体幹・四肢骨では、椎骨、肋骨、左右鎖骨、左右肩甲骨片、左右上腕骨、右尺骨、右橈骨体片、左右腸骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨片である。椎骨は、椎体と椎弓は未癒合であるが、左右の椎弓は癒合が完了している。

木箱12の上からは、別個体の頭蓋底破片と乳児の脛骨片が検出されている。

**木箱13 (新生児2体)** 木箱の中から新生児1体分と木箱内と蓋の上からもう1体の新生児の左上腕骨体遠位部、左右尺骨、左右橈骨、左大腿骨、右大腿骨体近位部、左右脛骨、左右腓骨片が検出された。

木箱内の新生児の頭蓋はすべて破片である。骨質は薄く脆い。2体の頭蓋は混ざっているものと思われる。歯は検出されていない。もう1体の新生児の四肢骨は、先の新生児四肢骨の太さに準ずる。椎骨も2体分が混ざっている。椎体と椎弓は未癒合で、椎弓も左右は未癒合である。

**木箱14 (2才前後)** 頭蓋は、頭頂骨と顔面の一部が小片となって保存されている。左下顎骨体は保存されているが、歯は保存されていない。右鎖骨片、左右不明の上腕骨体片、左右尺骨、左右橈骨、左右脛骨体片、左右大腿骨体近位部が保存されている。

**木箱15 (2才前後)** 頭蓋は保存されていない。左右不明の尺骨片、(左)上腕骨、左右脛骨、左右大腿骨、肋骨片などが保存されている。断片的で、1体分としては不完全である。

**木箱16 (新生児)** 頭蓋では右側頭骨錐体と頭頂骨片、四肢骨では左上腕骨遠位半と左尺骨近位半、左右大腿骨体片が保存されている。

**木箱17 (12才前後・8才前後)・木箱17周辺 (2才前後)** 12才の頭蓋と思われるものは、頭蓋底が大きく破損する頭蓋冠と右上顎骨と右下顎骨が保存されている。眉間や眉弓の隆起は認められない。右眼窩上壁には軽度のクリブラ・オルビタリアがある。縫合の走向は比較的単純で、縫合骨は認められない。側頭骨乳様突起は破損している。後頭骨の外後頭隆起は認められない。項平面は滑らかである。上下顎骨に伴う歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

7	6	v	4	3	○	1		1	2	4	6	
7	6	5	4	3	2	1		1	4	○	6	7

上顎第2大臼歯は萌出してまもない。カリエスは見られない。咬耗はエナメル質が磨り減る程度である。  
 体幹・四肢骨は、左右鎖骨、左右肩甲骨、右上腕骨、右尺骨、右橈骨、右腸骨、右坐骨、左右大腿骨、左右脛骨、右腓骨が保存されている。骨端が破損し、骨体しか残っていないものもある。椎骨、肋骨、手骨および足骨は断片的に保存されている。椎骨は断片的に残っている程度であるが、椎体と椎弓は癒合している。

8才前後の頭蓋は、前頭骨の一部、頭頂骨後半部分から後頭骨の一部と左錐体が保存されている。下顎骨は下顎体と歯が保存されている。歯の保存状態は以下の通りである。

6	v	iv	○○○	○○○	iv	v	6
---	---	----	-----	-----	----	---	---

この個体の四肢骨は保存されていない。

木棺16周辺から数点の人骨が出土し、左肩甲骨片は木棺16内のものと接合した。それ以外の、左上腕骨骨体、左大腿骨体、肋骨片は2才前後の幼児のもので、木棺内の人骨とは別個体である。

**木棺18（2才前後・6ヶ月前後）** 木棺18にともなう人骨は2体分認められる。まず、ほとんどの骨は2才前後の幼児に属する。頭蓋片、歯、椎骨、左鎖骨、右尺骨片、右腸骨、左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨が保存されている。骨端が破損し、完全なものはない。歯は以下の歯式の通りである。

	i	ii	iii	iv	v			
v	iii	ii	i	i	ii	iii	iv	v

歯根は根尖が未完成である。

6ヶ月前後の乳児に属する骨は椎骨と歯である。椎骨は左右椎弓と椎体がそれぞれ未癒合状態である。歯は歯冠形成途中のものが3点（右上顎第2乳臼歯と左上顎第2乳臼歯が2点）ある。

**木棺19・木棺20（新生児・1才6ヶ月前後）** 二重になった木棺が木棺19と木棺20に分けられているが、2体分の人骨が混ざり合って出土している。まず、1才6ヶ月の個体のものは、頭蓋冠が保存されている。また、下顎骨は下顎体が左右とも破損している。前頭縫合はない。頭蓋の邦語の走向は比較的単純で、縫合骨はない。眼窩上縁は曲線を呈する。また、眼窩上壁にはクリブラ・オルビタリアが認められる。

左右側頭骨の乳線突起は小さい。下顎骨のオトガイ部分はおおむね突出している。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

v		v					
iv	iii	ii	i	i	ii	iii	iv
iv	iii	ii	i	i	ii	iii	iv

歯にカリエスは認められない。

体幹・四肢骨は、右鎖骨、左右上腕骨、左右尺骨、左橈骨、腸骨、左右大腿骨、左右脛骨が保存されている。椎骨は、左右の椎弓と椎体部分がそれぞれ未癒合である。

新生児のものと思われる四肢骨で保存されているのは、左上腕骨、右橈骨片、左大腿骨、左右脛骨である。脛骨の最大長は70mmである。

**木棺21（2才前後）** 頭蓋冠と下顎骨片、肋骨片、椎骨片、左鎖骨、左上腕骨、左尺骨、左橈骨、左右大腿骨、左右脛骨片である。

頭蓋の顔面頭蓋において、眼窩上縁は曲線を呈する。眼窩上壁にはクリブラ・オルビタリアは認められない。前頭縫合は見られない。三主縫合の走向は比較的単純である。縫合骨はない。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

v	iv		i	ii	iii	iv
	○		○○○	iv		
v						

下顎第2乳臼歯が歯槽骨に埋伏しているが、上顎第2乳臼歯は萌出している。したがって、2才前後と思われる。椎

骨は椎弓と椎体、脛骨は骨体の大部分が、その他の四肢骨は骨体の両端が破損している。

**木棺22(新生児)** 後頭骨片、左上腕骨片、左尺骨、左右腸骨、左右大腿骨、左脛骨、細かい頭蓋片が検出された。四肢骨には筋断面などは見られず骨表面は滑らかである。大腿骨の最大長が75mmである。新生児であると推定される。

**木棺23(新生児)** 概ね1体分がそろっている。頭蓋、左右上腕骨、右尺骨、左右橈骨、左大腿骨片、左右脛骨、左右肩胛骨へん、左右腸骨片などが保存されている。上腕骨や脛骨の最大長は日本人の新生児平均値と概ね一致する。

なお、木棺14と木棺15の間から検出された新生児の左右大腿骨体近位片は、木棺23のものである可能性が高い。

**木棺24(3~4才・3~6ヶ月)** ほぼ1体分の人骨(頭蓋、下顎骨、肋骨、椎骨、左鎖骨、左右肩甲骨、左右上腕骨、左右尺骨、左右橈骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨)が保存されている。頭蓋は上面観においてひし形である。三主縫合の走向はやや複雑である。前頭結節および頭頂結節が良好に発達し、15mmほど前頭縫合残存が認められる。眼窩口は円形に近い。眼窩上壁には軽度のクリブラ・オルビタリアが確認できる。鼻根は平坦である。梨状口は幼児型である。後面観では、ラムダには縫合骨が左右一箇ずつ、左側にはアステリオン骨がある。後頭骨はやや突出する。側頭線はほとんど発達していない。左右にプテリオン骨がある。乳様突起はわずかに下垂しているだけである。外耳孔は比較的大きい。頭蓋底は螺旋骨が未癒合である。咽管は左右とも開存している。下顎骨は右側が破損している。オトガイ部がよく発達している。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

v	iv	ooo	ooo	iv	v
v	iv	o	ii	i	i
i	ii	iii	iv	v	

乳臼歯の咬耗はほとんどない。

上腕骨は左側の遠位端の一部が破損している。三角筋付着面はやや隆起する。大腿骨後面粗線の隆起が形成されはじめている。椎骨は椎弓部分が2点保存される。左右の椎弓は癒合している。大腿骨は骨体の骨端が破損している以外は、ほぼ完形である。

木棺の蓋の上から、右下顎骨片と左大腿骨が検出された。右下顎骨体には第1乳臼歯の歯冠が形成途中で。したがって、生後3ヶ月~6ヶ月と思われる。

さらに、上記の個体と咬耗が同程度の上顎左第1乳臼歯が検出されている。粉れ込みの可能性が大きい。

**木棺25(3~4才)** 保存されている部位は概ね1体分である。それぞれの部位には破損箇所が多数ある。頭蓋は、頭頂骨や顔面の一部、頭蓋底の半分が破損する。前頭結節と頭頂結節の発達が良好である。上面観の頭蓋形はひし形である。三主縫合の走向は比較的単純である。左右のラムダに縫合骨はない。前頭骨には前頭縫合が存在している。眼窩口は隅丸方形。眼窩上神経孔は左右ともない。眼窩上壁は破損している。鼻根部は平坦で、梨状口下縁は鈍である。後頭骨はゆるやかな膨隆がある。側頭骨の乳様突起は発達していない。外耳孔は大きな円形を呈する。下顎骨では右下顎枝が破損する。オトガイ部分の発達は不明瞭である。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

v	iv	iii	ii	i	i
ii	iii	iv	v		
v	o	iii	ii	i	o
o	iii	iv	v		

下顎左第2乳臼歯にはC2程度のカリエスが認められる。

四肢骨は、骨体が破損しているものもある。右上腕骨は骨体の下端が破損し、左上腕骨は骨体近位部が残っているだけである。左尺骨は骨体近位端が破損している。鎖骨の最大長は74mmである。椎骨は左右椎弓が未癒合である。

**木棺26(9ヶ月前後の乳児・幼児)** 概ね6ヶ月から12ヶ月程度の乳児1体分の人骨が保存される。さらに、それよりやや大きい年齢(3~4才)の個体の前頭骨のみが検出されている。

乳児の頭蓋は顔面と頭蓋底が大きく破損する。前頭骨には前頭縫合が認められる。下顎骨には乳犬歯や乳臼歯が埋伏し未萌出の状態である。下顎左第2切歯は萌出したばかりである。左上顎犬歯と左右の上顎第1乳臼歯は未萌出である。左上腕骨は近位半が破損する。右尺骨は遠位部が破損する。椎骨は、椎体と椎弓が未癒合で、椎弓も左右がまだ癒合していない。肋骨やそれ以外の骨は細かい骨片である。

3~4才の幼児の前頭骨には5mmほど前頭縫合がある。前頭結節が顕著である。眼窩上縁は曲線を呈する。この頭蓋に伴う上顎骨が3点保存されている。以下の歯式の通りである。

切歯はやや磨り減っている。

**木棺28(3~4才)** 木棺内と双上の人骨は同一個体である。頭蓋片1点、左肩甲骨片、左右大腿骨と左大腿骨未癒合の骨端部分、左右脛骨、左右腓骨が断片的に保存される。大腿骨は骨体の中央部分しか残っていない。骨体周は41mmである。

**木棺29(6~7才)** 頭蓋は保存されていない。右尺骨、右橈骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、右腸骨と細かい骨片が保存される。大腿骨は左右とも骨端部が破損しているが、最大長は約27cm前後と思われ、6才から7才のものと推測できる。大腿骨の骨体周は50mmである。後面粗線は発達していないが、殿筋粗面は比較的明瞭である。脛骨も骨端が破損している。骨体断面は扁平ではない。腸骨の大坐骨切底の湾入はやや鋭角である。したがって、性別は男性の可能性が高いが、小児であるため同定が難しい。

**木棺30(4才)** 頭蓋片と左尺骨片、左橈骨片、左大腿骨片が保存されている。それ以外は細かい四肢骨片である。大腿骨骨体周(40)から4才前後と推測される。

**木棺31(5才)** 頭蓋底と顔面が大きく破損する頭蓋冠が保存されている。前頭骨は頭頂結節が顕著である。眼窩上縁は曲線を示す。眼窩上壁には中程度のクリブラ・オルビタリアが確認できる。右上顎骨に右上顎第1乳臼歯と右上顎第2乳臼歯が植立した状態で保存されている。咬耗程度は、エナメル質が磨り減る程度である。

それ以外に保存されている骨は、右脛骨片と左腸骨である。脛骨の遠位部は破損し最大長は20cmをやや下回る程度と推測でき、5才前後のものと思われる(体中央横径12.8/体中央最大径14)。また、新生児の左右不明の腓骨体片と腸骨が検出されている。木棺32の新生児の可能性が高い。

**木棺32(3~4才・新生児)** まず、3~4才のものと思われる人骨は、右側頭骨および椎体、頸椎1点、右上顎骨と歯が保存されている。歯の保存状態は歯式の通りである。

### ○○ iii iv

乳歯にカリエスはない。

新生児のものは、左脛骨と右大腿骨の骨体部分である。

**木棺33(3~4才)** 概ね1体分の人骨が保存されている。頭蓋、上下顎骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左右大腿骨、左右脛骨、右腓骨中央部、椎骨、肋骨および腸骨が保存されている。

歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

iv ○○○	○ ii iii iv v
v iv iii ii i	iv v

下顎骨のオトガイ部はほとんど隆起していない。

四肢骨は骨体の骨端部分が破損し最大長は不明である。3~4才程度の骨としてはやや細く華者である。椎骨の椎弓部分は癒合していない。

さらに年齢が同程度の右上腕骨と左脛骨の骨体の一部が検出される。先の個体の四肢骨よりやや大きめである。この2点の骨は上層の木棺からの混入は考えられない。

**木棺34(3~4才)** 3~4才のものと思われる概ね1体分の人骨が検出されている。頭蓋は、前頭骨、頭頂骨、左右椎体、後頭骨片が保存される。前頭骨の眼窩上縁は曲線で、上壁にはクリブラ・オルビタリアが認められている。栄養状態が不良であったと推測できる。下顎骨が保存されており、右下顎骨体に永久歯の右第1大臼歯の歯冠が埋伏している。下顎枝高は低い。四肢骨は、左右上腕骨、右橈骨、左尺骨、左右大腿骨、左腓骨が保存されている。長さ、太さともほぼ平均的である。

**木棺35 (3~4才:2体)** 木棺35は3~4才程の幼児骨が2体分検出された。上層の木棺10からの混入はない。頭蓋は2点とも顔面及び頭蓋底を大きく破損する。上下顎の骨(①)、下顎骨が保存されている(②)。それぞれの歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

①	②	
$\begin{array}{c c} \text{v iv iii } \bigcirc \bigcirc & \bigcirc \bigcirc \text{iii iv v} \\ \hline \text{v iv } \bigcirc \text{ii } \bigcirc & \text{i } \bigcirc \bigcirc \text{iv v} \end{array}$	$\boxed{\text{v iv}}$	

上記の①と②の下顎骨オトガイ部分は比較的隆起している。①の下顎角は破損しているが②の下顎角は張り出しが弱い。①の下顎骨に伴う四肢骨は左上腕骨、右尺骨、右橈骨、左脛骨が保存される。骨体の中央部分しか残っていない。②の下顎骨に伴う骨は、左鎖骨、左上腕骨、左尺骨、左橈骨、左大腿骨、左右脛骨および肋骨が保存される。骨体の中央部が保存されている。骨端は破損し、最大長が計測できないが、太さとしては3~4才として平均的な大きさである。

**木棺36 (3才)** 右大腿骨の骨体中央部だけ保存されている。木棺35は上層になるが木棺36への混入はない。また、木棺36の右大腿骨は上記の2体とは別個体のもので骨体がやや小さく、形態的に類似傾向が認められない。

**木棺37と木棺40 (新生児:2体)** 頭蓋の左右錐体と頭蓋片、右鎖骨、肩甲骨片、左右上腕骨、左尺骨、右橈骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨片、左右腸骨、椎弓などはほぼ1体分が保存される。さらに、別個体の右腸骨と恥骨が保存されている。いずれも新生児である。鎖骨最大長45ミリ、大腿骨75mmである。鎖骨の大きさから判断すると1体は女の子である可能性が高い。

**木棺38 (3~4才)** 右大腿骨体中央部、右脛骨体中央部、肋骨片、左腸骨片が保存されている。上下の木棺からの混入は認められないが、1体分としては断片的である。再埋葬の可能性も伺える。大腿骨骨体周は42mmで、やや大きい。

**木棺41 (5才)** 木棺内から検出された人骨は、右大腿骨、左脛骨、左右腸骨、肋骨片だけである。大腿骨は骨体が残っているが、最大長が20cm近くあり、5才程度と思われる。左右腸骨は別個体である。左腸骨が他の四肢骨と同一個体である。右腸骨は一回り小さい。あるいは、右腸骨は上層の木棺36の個体に属する可能性もあるが、いずれにして断片的である。

**木棺42 (3才)** 木棺内から検出された人骨は、概ね3~4才の幼児1体分の骨である。頭蓋は、顔面や頭蓋底が大きく破損している。前頭骨には前頭縫合が20mm残存している。眼窩上縁は破損している。鼻根は平坦である。縫合の走向は単純で、縫合骨はない。側頭骨の乳様突起はその痕跡を確認できる程度である。外耳孔は比較的大きな楕円形である。下顎骨はオトガイ周辺の下顎体は保存されているだけである。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

6		6
v	i	v
v ○○○○	○○○○	v
6		6

永久歯の第1大臼歯は歯冠が形成途中である。カリエスはない。

頭蓋以外で保存されている骨は、右鎖骨、左右上腕骨骨体片、左右大腿骨、左右脛骨、左右腸骨、肋骨片、椎骨体と椎弓である。鎖骨の最大長がやや小さい。四肢骨は骨体の骨端が破損し、最大長が計測できない。大腿骨の太さは34mmで3才~4才程度である。椎骨の椎体と椎弓は未適合であるが、左右の椎弓は適合している。

**木棺43 (幼児2体:5才・2才、新生児1体)** 年齢の異なる幼児の骨が2体分検出されている。5才前後に属する骨は、下顎骨、左右鎖骨、右腓骨が保存され、2才前後の幼児に属する骨は右鎖骨、左大腿骨、左脛骨、左腸骨片と肋骨1点である。

5才児前後と思われる個体の鎖骨は最大長が80mmである。腓骨の最大長は約140mmである。下顎骨は、下顎角が発達しているが、外反傾向はない。下顎突起は後方を向く。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

6 v iv ○○○○ | ○○○ iv v 6

切歯窩に間隔があり、3～4才以上であることが明らかである。

2才前後の頤骨の最大長は68mmで2才平均値を下回る。大腿骨の骨体周32mmはほぼ平均値と思われる。左上腕骨や脛骨も骨端部分の破損が大きい。

**木棺44（新生児）** 新生児概ね1体分が保存されている。左鎖骨、左上腕骨近位反、右橈骨、左右尺骨、右大腿骨、左右脛骨、右腸骨が2点保存されている。左鎖骨は胸骨端が破損しているが、最大長は40mmに達しておらず、新生児の最大長を下回る。大腿骨の最大長は70mmである。

右腸骨が2点保存されているが、新生児よりはるかに大きく、2～3才のものとして推測される。木棺44南周辺から検出された骨片3点は、2～3才の腸骨と同一個体の可能性があるが、保存が断片的であるため断定できない。

**木棺45（2才）** 頭蓋では、頭蓋冠が保存されている。左右側頭骨の乳様突起はその痕跡を確認できる程度である。外耳孔は小さく楕円形である。左の上下顎体が保存されている。歯の萌出状態は以下の通りである。

○ iv ○  
○ iii iv v  
2

第2乳臼歯は萌出が始まったばかりである。左側切歯は歯冠が形成途中である。左尺骨と左橈骨は骨体の近位半が破損している。

**木片46（3才）** 頭蓋の右側頭骨、右大腿骨骨体、肋骨片と未萌出の上顎左第1大臼歯が検出されている。

側頭骨の乳様突起は小さいながら下垂傾向を認める。外耳孔も大きい円形である。右大腿骨の骨体周は38mmで平均値に近い。未萌出の上顎左第1大臼歯は歯冠が形成途中である。

**木棺外出土人骨（最小個体数3体）** 木棺1・木棺2・木棺30・木棺42周辺より出土した人骨群に4才前後の大腿骨と新生児の四肢骨が検出されているが、それぞれの木棺内の人骨と重複することはない。

また、器械による掘削で出土した人骨群の中に6～7才の人骨が1体分ある。頭蓋は顔面と頭蓋底を大きく破損している。頭蓋は楕円形を呈し、長頭に属する（134/185）。頭頂結節が顕著である。眼窩上孔は右側のみ開存している。前頭縫合20mm程度残存している。眉間や眉弓の隆起はほとんどなく、鼻根も平坦である。眼窩上縁は前頭骨頬骨突起付近にかけて極端に下向する。眼窩上壁にはクリブラ・オルビタリアは見られない。縫合の走向は単純で、縫合骨はない。左右の側頭骨の乳様突起は破損している。外耳孔は比較的大きな楕円形を呈する。下顎骨は右下顎枝が破損する。オトガイ周辺は隆起していない。左下顎枝幅（28）は頑丈でない。下顎角は緩やかで、外反傾向はない。下顎骨の歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

v iv ○○○ | ○○○ iv v

左下顎第1乳臼歯、左下顎第2乳臼歯にC2ほどのカリエスがある。

この頭蓋に属すると思われる体幹・四肢骨は、肩甲骨へ、左上腕骨、右尺骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左右腸骨、肋骨7点、椎骨3点が保存される。大腿骨は、骨体遠位端が破損する。最大長は約250mm前後、太さ50mmである。骨端の癒合はない。椎骨は椎体と椎弓は癒合している。腸骨の大坐骨切痕の溝入は大きい。したがって女性の可能性が高い。

それ以外の人骨は断片的である。

#### 火葬骨

壺（234・236・237・238・239）の中から焼かれた人骨が検出された。すべて完全に灰化しており、収縮・変形・亀裂が著しい。一般に、焼成温度が600℃以下では骨自体の変化はほとんどおこらない。800℃付近でもっとも著しく変化する。すなわち、色は灰白色になり、部位と方向により異なるが、数%から20%ほどの収縮が起こり、骨が硬くなる。その際に、内部にも変化が起こり、本来の骨の微細構造は見られなくなる。また、歯もエナメル質が崩壊し、歯冠が失

われる。したがって、これらの骨はおよそ 800℃以上の温度で長時間焼かれたと考えられる。また、焼成温度のむらによる収縮・変形・亀裂が著しいことから、晒された状態ではなく、軟部の付着した状態で焼かれたと推定される。

蓋 (234) 頭蓋片と四肢骨片が 20 g 保存される。年齢や性別を同定するのは困難である。

蓋 (236) 総重量 200 g である。頭蓋では頭頂骨と左右側頭骨の一部、下顎骨片が保存されている。左右の側頭骨乳様突起は破損しているが、乳突上縁は明瞭で、左錐体がやや大きい。外耳孔は大きく円形を呈する。下顎骨はオトガイ付近が保存されている。歯槽の閉鎖はない。頭蓋の縫合は、外板において閉鎖はないが、内板では癒合が始まっている部分がある。四肢骨は細かい破片で、部位の同定が困難である。壮年男性と推定される。

蓋 (237) 総重量 190 g の焼骨が検出された。ほとんど 2 cm 四方の頭蓋片とそれより細かい四肢骨片であった。頭蓋で保存されている部位は、頭頂骨、側頭骨、下顎骨である。下顎骨は左下顎骨が保存されている。久利した顎枝幅は広く、頑丈である。熱による収縮を考慮しても広い (31.5)。下顎角はやや外反傾向が強い。歯は死後に抜け落ち、歯槽はすべて開放している。椎体には骨髄などの経年性的変化はない。左右不明の焼骨骨頭が保存されている。骨端は癒合している。

この蓋から検出された人骨は、下顎骨が頑丈であることから男性の可能性が伺える。年齢は比較的若く、壮年 1 体分としては保存状態が少なく断片的である。

蓋 (238) ほとんど 3 cm 四方の破片が 10 数点保存されるだけである。保存されている部位は、頭頂骨から後頭骨の頭蓋冠である。また、単根の歯根だけが保存される。エナメル質が崩壊している。小臼歯と思われるが詳細な部位は不明である。成人ではあるが性別は不明である。

蓋 (239) 総重量 300 g が保存され、頭蓋は全体の半分程度保存されている。側頭骨、頭蓋底、上顎骨体および下顎骨のオトガイ付近が保存されている。上顎骨の切歯付近の歯槽骨は破損している。第 3 大臼歯が萌出していることから壮年以降と思われる。側頭骨の乳様突起部分が保存されており、基底部が頑丈で、下垂部分が大いことから、明らかに男性と思われる。単根の歯根が 1 点保存されている。歯冠部は崩壊している。

その他 機械による掘削でも焼骨が出土している。総重量は 100 g である。すべて 1 cm 四方の細かい骨片である。頭蓋は頭頂骨付近が保存されている。断面は緻密質が厚く、頑丈である。明らかに成人のものである。性別は不明である。

## 第 2 節 考察

桑名城下町遺跡堂町 93 地点から出土した人骨は、木棺を 3～4 個ずつ重ねたものが 7～8 点集まった遺構から出土し、木棺ごとの平面的な切り合い、人骨の上下の混ざり合いはほとんどない。出土人骨数はそれぞれの木棺から出土した人骨が少なくとも 53 体、火葬され蓋に埋葬されたものが 6 体の、合計 59 体である。木棺 4 から出土した 1 体を除く全てが未成年であり、そのうちの 70% は、歯牙の萌出状態から乳歯 20 本が全て萌出した乳歯列後期 (3～5 才程度) のものであると推定された。

当地点出土人骨の形態的特徴として計測値は表 14～表 18 に示すとおりである。当地点出土人骨中唯一の成人である、木棺 4 から出土した壮年男性の体格は、大腿骨から推定される身長が 165 cm で、江戸時代男性平均 163 cm を上回る。しかし、四肢骨骨体は平均的な太さで、筋粗面の発達状態は江戸時代人として普通である。頭蓋は、眼窩口や梨状口がやや大きい傾向にあるが、その他の計測値は江戸時代人平均値とほぼ一致する。したがって、木棺 4 の壮年男性は、体格的にみて江戸時代男性として全く矛盾がない。

今回、一般に保存されにくい未成年の人骨が例外的に保存が良好であったため、長幹骨の計測データを得ることが出来た。そこで、当地点出土人骨との比較資料として、被葬者のほとんどが未成年であった、江戸時代初期の御府内に所在した日蓮宗明徳寺と判断される、八丁堀 3 丁目遺跡出土人骨についても新たに計測し比較を行った。その結果、四肢骨の中央部の形態は幼児期までは円形に近いこと、年齢ごとの比較においては両遺跡間でのサイズに大差はないことが判明した。菟美大島和野トフル墓 20 号出土の 3 才の人骨も同様である。しかし、国内における未成年出土人骨の計測データは非常に少なく、比較資料として使用するには不十分であり、信頼性が低いと考えられる。そのため、個体数が多く、比較資料として有効と考えられる欧米人の四肢骨計測データ (表 20) との比較を行った。その結果、当遺跡出土人骨の四肢骨ははるかに小さいことが判明した。また、頭蓋の大きさについては、欧米人のものは未癒合の頭蓋骨片ごとに

計測されており、頭蓋全体の大きさが不明であったため、ここでは現代インド人乳幼児の頭蓋の計測値が比較資料として有効と判断し、当遺跡出土人骨の頭蓋計測値と比較を行った(表14)。その結果、年齢ごとの比較において、インド人の数値より大きい傾向を認めた。結果を総合すると、インド人との比較において頭蓋は大きいのが、欧米人との比較においては体格は小さい傾向が見られた。出土した頭蓋のほとんどに鉄欠乏症貧血と関連のあるクリブラ・オルビタリアが多く認められ、すべての歯にエナメル形成不全があることから、日常的に栄養失調状態であったようである。しかしながら、このことが四肢骨のサイズが小さきことの要因小さいのであるかどうかの判断はこの結果からのみでは困難である。一方、当遺跡の埋葬については、木棺の切り合いや木棺ごと上下の混入がないことから、すべて同時に埋葬されたと考えて矛盾はない。一部の木棺では、骨自体の保存状態が良好であるにもかかわらず、1体分としては少量しか残っていない。これらの人骨は、他の地点からの改葬人骨である可能性が高い。また、当該地域及びその周辺は低湿地のため人骨の保存が良好で、改葬の際の個体識別は比較的容易であったと考えられる。そのため、ほぼ1体分が保存されている木棺についても、改葬の可能性はある。したがって、出土人骨すべてが同時埋葬と判断されるが、それが一次埋葬の人骨である可能性、改葬された人骨である可能性、一次埋葬の人骨と改葬された人骨が混じっている可能性の三つが考えられる。また、当地点は、年齢の近い幼児が狭い範囲に集中して埋葬されているため、墓域は成人と未成年が区別されていた可能性もある。未成年が出土している他の遺跡においては、墓域内では成人と未成年が混在して埋葬されているようである。当地点出土人骨のもう一つの特徴として、死亡年齢の偏りが見られる。当地点出土人骨の死亡年齢は、乳歯列後期(3~5才)に集中し、それに続くのは萌出期である。これに対し、八丁堀3丁目遺跡出土人骨の死亡年齢は、萌出期(出生~6ヶ月)から混合歯列中期(7~8才)の乳幼児それぞれの年齢に分散して分布し、そのような例は弥生時代から古墳時代の大友遺跡にも見られる。このことから、当地点出土人骨の死亡年齢が混合歯列後期(3~5才)に極端に集中するのは特殊な事例といえる。しかし、木棺のほとんどは約500平方メートルで、木棺は発掘くいk胃の4分の1程度にあたる南東隅から検出されたもので、木棺44・45は区域外であり、墓域は南東方向に広がりをもつと思われることから、この人骨群は墓域の端から出土したことを考慮しなければならない。しかしながら、年齢の近い幼児が、狭い範囲に集中して埋葬されるのは、やはり特徴的であるといわざるを得ない。意識的に同世代の埋葬を行った結果とも、あるいは、何らかの伝染病による大量死亡の結果とも考えられる。今後の調査区域の拡大や同様な埋葬の類型、未成年者骨の発掘例の増加を期待したい。

### 第3節 結語

一般に幼児骨は保存状態が悪いことや取り扱いが困難な為、発掘時あるいはその後の過程で簡略的に取り扱われることが多い。年齢ごとの体格の基礎データや死亡率の検討等において非常に貴重なものとなるため、慎重な取り扱いと詳細な整理報告が望まれる。

### 謝辞

当人骨を鑑定するにあたり、膨大な人骨の整理・復元作業のほとんどを当研究部の中塚彰子氏の協力をいただきました。なお、江戸御府内以外での遺跡で、資料の保存状態が極めて良好な小児人骨の研究の機会を与えてくださった桑名市教育委員会の方々へ深くお礼を申し上げます。

#### 参考文献

Virginia L. Merchant and Douglas H. Ubelaker

Skeletal Growth of the Protohistoric Arikara A. J. Phys. Anthropol., 46: 61-72

永盛 肇・江部道夫・佐々木美左雄・黒田直 1965 胎児に関する法医学研究(II) 日医大誌 第19巻 第5・6号

清水康 1983 インド人小児頭蓋の計測学的研究 日医大誌 第50巻 第5号

小片丘彦・峰和 治・川路朋友・山本代子・岡本満子 1988 「鹿児島県奄美大島和野トブル墓出土の人骨」  
鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(45)

溝口優司 1997 池之端七軒町遺跡出土人骨 池之端七軒町遺跡(慶安寺跡)

台東区池之端七軒町遺跡調査会

森本岩太郎・小片丘彦・平本憲助・吉田俊嗣 1985 人骨

「江戸一都立一橋高校地点発掘調査報告一」都立一橋高校内遺跡調査団

Louise Scheuer and Sue Black 2000

Developmental Juvenile Osteology Academic Press



計測項目 /	木棺1 4才	木棺11 4才	木棺25 3~4才	八丁塚№74 4才	八丁塚№110 3才	インド人 3~5才	木棺4 成人男性	江戸時代(♂) 鈴木1967	現代人(♂) 鈴木1967
1.最大長	165	164	170	152	170	154.4	183	181.9	178.9
5.頭蓋底				70	83	77.8	101	101.9	100.7
8.最大幅	130	125	133	126	135	122.7	130	139.8	140.3
9.最小前頭幅	84		89	82.5	79.5	79.9	101.8	-	-
8:1頭蓋長幅示数	78.8	76.2	78.2	82.9	79.4	79.5	71	76.9	78.5
17.バジオンブレグマ高		120		115	127	114.7	138	137.5	138.1
1:17頭蓋長高示数				75.7	74.7	74.1	75.4	75.6	77.3
40.顔長				78	77		99	99.3	97.2
45.眉骨弓幅			96.5	94	100		134	135.4	132.9
46.中顔幅			76.5	71	79		99.5	99.6	98.6
47.顔高		82.5	82.9	77	88.9		121	11.8	123.8
4.8.上顔高		50	51	45	54.5		73	83.3	70.7
47:45コルマン顔示数			58.2	81.9	88.9		90.2	88.3	93.1
47:46ウィルヒョウ顔面示数				108.6	112.5		121.6	116.2	125.5
48:45コルマン上顔示数				47.8	54.5		54.4	51.1	53.3
48:46ウィルヒョウ上顔示数				63.3	68.9		73.4	69.7	125.4
50.前眼窩間隔				18.5	18.5		24	20.9	17.2
51.眼窩幅		32	32	33.2	35		43	43.2	42.7
52.眼窩高		33	35	29	30		36	34.4	34.3
52:51眼窩示数				87.3	85.7		83.2	79.5	80.8
54.鼻幅				18.1	21		31	26.2	25
55.鼻高				32.5	37		56	52.5	52
54:55鼻示数				55.6	56.7		55.3	49.9	48.4
65.下顎関節突起幅		70		73	76.5		108.5	127.5	122
66.下顎角幅		66.5		70	60		104	102.2	96.9
68.下顎長				55.5	76.5		79	76.5	-
70.枝高				35	43.5		58	68.2	62.6
71.枝幅		24.5		27	31		31	35.4	33.1
71:70				77.1	71.2		53.4	52	53.1

表14 法盛寺出土人骨(幼児・成人)頭蓋計測値と成人男性頭蓋計測値比較表(mm)

	R	L		R	L
1. 前頭縫合		×	14. 前額結節	×	×
2. 眼窩上神経溝	×	×	15. 鼓室骨裂孔	×	×
3. 眼窩上孔	×	○	16. 舌下神経管二分	×	×
4. ラムダ小骨	×	×	17. 顔静脈孔骨橋	×	×
6. 後頭乳突縫合間骨	×	×	18. 脛額突起	×	×
7. インカ骨		×	19. 網孔形成不全	×	/
8. 横後頭縫合残存	×	×	20. ベサリウス孔	×	×
9. 頭頂切痕	×	×	21. 翼棘孔	×	/
10. 上ブテリオン骨	×	×	22. 内側口蓋管	/	/
11. 前額頭縫合	×	×	23. 外耳道骨橋	×	×
12. 顔骨橋縫合痕跡	/	×	24. 顎舌骨神経溝骨橋	×	×
13. 咽管開通	×	×			

表15 木棺4出土成人男性頭蓋小変異

計測項目\木箱番号	1	2	3	4	6	7	8	9		11	12
	年齢	4才	5才	成人	3~4才	3~4才	3才	6才	2~3才	4才	3才
<b>頤骨</b>											
4.中央垂直径	7.1			13.5			8		9	7	7
5.中央矢状径	6			11.5			4	5.5		4	5
5/4.中央断面示数	84.5			85.1		50		61.1		57.1	71.4
<b>上胸骨</b>											
1.最大长	160			310			115				128
5.体最大径	11.5		13.5	21.5	12	8.9	9.5	9		10	10
6.体最小径	9.5		11.2	15.5	8.3	11	10.7	11		10.5	9.8
6/5.体断面示数	82.6		82.9	72.1	69.1	80.9	88.7	81.8		95.2	98
<b>桡骨</b>											
1.最大长					102				75		
4.体横径			9.8	13.5	7.8	6.5		10	7.5	8	7
5.体矢状径			7.4	11.5	5.5	5		7	6	5.5	5.5
5/4.体断面示数			75.5	85.2	70.5	76.9		70	80	68.7	78.5
<b>尺骨</b>											
1.最大长				245	112				85	115	
11.体矢状径			8	11.9	6	5.5		7	5.5	6	6
12.体横径			11	16	7	8		9	7	8	8.5
11/12.体断面示数			72.7	74.4	85.7	68.7		77.7	78.5	75	70.5
<b>大腿骨</b>											
1.最大长				448	180	175	150				153
6.体中央矢状径		10.2	16.2	28	13	10	10.5			11.5	10.5
7.体中央横径		12	16	26.5	12.5	12.5	11.5			12.8	12.2
8.中央周		45	55	88	40	38	35			40	41
6/7.体中央断面示数		85	101.3	105.7	104	8	91.3			89.8	86.6
<b>胫骨</b>											
1.全长				365	148	135					118
8.体中央最大矢状径		10	14.4	27	13.5	14	11	10.5		12.5	12
9.中央横径		11	18.5	19	10	9.5	10	9		11.5	9.5
9/8.体断面示数		90.9	77.8	70.4	74	67.8	90.9	85.7		89.8	79.2
<b>腓骨</b>											
1.最大长											
2.中央最大径				14.5		6				6.5	
3.中央最小径				11.5		5.5				4.8	
3/2.体断面示数				79.3		91.5				73.8	

表16 四肢骨計測値(mm)

計測項目\木箱番号	13	14	15	17	18	19	20	22	21	23
	年齢 新生児	2才	2才	12才	2才	1才半	新生児	新生児	2才	新生児
<b>頤骨</b>										
4. 中央垂直径	3.2			9				5		
5. 中央矢状径	3			6.2				4.9		
5 / 4. 中央断面示数	93.7			68.8				98		
<b>上胸骨</b>										
1. 最大長										60
5. 体最大径			8.5	15		10	6		10	5.5
6. 体最小径			7.5	11		10	6		8	5
6 / 5. 体断面示数			89.4	73.3		100	100		80	90.9
<b>横骨</b>										
1. 最大長	58	80								50
4. 体横径	4	6.5				7				4.5
5. 体矢状径	3.8	5				5.5				3.5
5 / 4. 体断面示数	95	76.9				78.5				77.7
<b>尺骨</b>										
1. 最大長	63									55
11. 体矢状径	3.5	5.5		8.5	7	5.5			6.2	3.1
12. 体横径	4	6		11	9	7			7	4.5
11 / 12. 体断面示数	87.5	91.6		77.2	77.7	78.5			88.5	68.8
<b>大腿骨</b>										
1. 最大長	78					138				
6. 体中央矢状径	5.5	9	8.5	17	9	10.5	6.8	5.5	9	
7. 体中央横径	6.2	11	9	18.5	10	12.5	7.5	6	11	
8. 中央周	20	33	29	55	33	38	25	19	31	
6 / 7. 体中央断面示数	88.7	81.8	94.4	91.9	90	84	90.6	91.6	81.8	
<b>脛骨</b>										
1. 全長	73						70			61
8. 体中央最大矢状径	7		9	18.5	9	10.5	7	6		7
9. 中央横径	6.5		8	14	9	10.2	7.5	5.5		6
9 / 8. 体断面示数	92.8		88.8	75.6	100	97.1	93.3	93.3		85.7
<b>腓骨</b>										
1. 最大長				21cm						
2. 中央最大径				8	4					
3. 中央最小径				11	5.5					
3 / 2. 体断面示数				72.7	72.7					

表17 四肢骨計測値(mm)

計測項目\木箱番号	24	25	26	29	33	34	35	概測人骨	
	年齢 3~4才	3~4才	9ヶ月	6~7才	3~4才	3~4才	3~4才	3~4才	6~7才
<b>頤骨</b>									
4. 中央垂直径		5							5
5. 中央矢状径		8							7
5/4. 中央断面示数		62.5							71.4
<b>上胸骨</b>									
1. 最大長	120		80						
5. 体最大径	12		8.1		10	12.5	10	11.5	13
6. 体最小径	10		6.9		7.5	10	9	10	10.5
6/5. 体断面示数	83.3		85.1		75	80	90	86.9	80.7
<b>横骨</b>									
1. 最大長									
4. 体横径	8		6	9			7	9	8.5
5. 体矢状径	6.5		5	7			5	6.5	7
5/4. 体断面示数	81.2		83.3	77.7			71.4	72.2	82.3
<b>尺骨</b>									
1. 最大長	105	103							
11. 体矢状径	6	6.5	5	6.5			6	7.8	7
12. 体横径	9	8.5	5.5	10			7.2	7	6
11/12. 体断面示数	66.6	76.4	90.9	65			83.3	89.7	85.7
<b>大腿骨</b>									
1. 最大長	155	150	105						
6. 体中央矢状径	12	11.5	7.5	14	9		11.5		12
7. 体中央横径	13.1	13	82	14.5	11		10		13
8. 中央周	40	40	30	50	32		32		34
6/7. 体中央断面示数	91.6	88.5	91.5	96.5	81.8		86.9		92.3
<b>胫骨</b>									
1. 全长	130		82						
8. 体中央最大矢状径	12	12	9	16.5	11	13	10	13	17
9. 中央横径	11	11	7.8	13	7.9	11.5	10	12	14
9/8. 体断面示数	91.6	91.6	86.7	78.5	71.8	88.5	100	92.3	82.5
<b>腓骨</b>									
1. 最大長	130		80						
2. 中央最大径	6.5	6.2	4	7	5		5.5		9
3. 中央最小径	5	5.2	5.2	8	4.5		4.8		6.5
3/2. 体断面示数	76.9	83.8	76.9	87.5	90		87.2		72.2

表18 四肢骨計測値(mm)

計測項目\木箱番号	10	15	22	24	26	39	43	49	69	74	110
	年齢 3才	6才	4才	9ヶ月	6~7才	1才	7才	4才	3才	3才	6~8才
頤骨											
4. 中央横直径		4.5									
5. 中央矢状径		7.8									
5/4. 中央断面示数		57.6									
上腕骨											
1. 最大長			135	52						132	162
5. 体最大径		12	11.5	4	12	9.5			7.5	10	12.2
6. 体最小径		10	9.5	3.5	11	9.2			9.2	11	9.8
6/5. 体断面示数		83.3	82.6	87.5	91.6	96.8			81.5	90.9	80.3
橈骨											
1. 最大長											116
4. 体横径		8	7.5								7.5
5. 体矢状径		5	6.5								6.5
5/4. 体断面示数		62.5	86.6								86.6
尺骨											
1. 最大長										95	129
11. 体矢状径	5.8	7	8			5			5.5	9	9
12. 体横径	6	9	6.2			6			7	7	6.2
11/12. 体断面示数	96.6	77.7	77.5			83.3			78.5	77.7	68.8
大腿骨											
1. 最大長	165	120	175	105	152	130			120	175	225
6. 体中央矢状径	10.5	13	12	7	14.5	11	13.5	12	9	13.5	13.5
7. 体中央横径	11.5	13.5	12.5	8.5	15	12	14.1	13	11	12.5	10.5
8. 中央周	35	44	42	27	50	38	45	40	32	43	48
6/7. 体中央断面示数	91.3	96.2	96	82.3	96.6	91.6	95.7	92.3	81.8	92.5	77.7
脛骨											
1. 全长			140							143	177
8. 体中央最大矢状径			13.5	8	15.5		14.5		9.6	14.5	14
9. 中央横径			11.5	7	13		13		9	11.2	12.5
9/8. 体断面示数			85.1	87.5	83.8		89.6		93.7	72.2	89.8
腓骨											
1. 最大長	130									135	175
2. 中央最大径	4.5									8	7.2
3. 中央最小径	6									7.8	5.8
3/2. 体断面示数	76.6									97.5	80.5

表19 四肢骨計測値(mm)

性別	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
計測項目\年齢	40w~新生児		0.5才		1才		2才		3才		4才	
上腕骨: length	64.9		88.4	86.8	105.5	103.6	130	127.7	147.5	145.3	162.7	160.9
橈骨: length	59.7	57.8	70.8	67.6	82.6	78.9	98.6	95	111.6	107.7	123.1	119.2
尺骨: length	67		65.3		79.1	75.7	92.6	89	109.7	107.1	123.4	120.6
大腿骨: length	74.4				144.8	148.1	181.5	182.3	210.9	212.9	236.5	239.2
脛骨: length	65.2		91	88.9	110.3	108.5	140.1	138.2	163.5	161.1	182.8	180.8
腓骨: length	59		87.2	84.9	107.1	105	123.9	121.3	162.1	159.4	181.8	179.5
性別	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
計測項目\年齢	5才		6才		7才		8才		9才		10才	
上腕骨: length	177.4	176.3	190.9	190	203.6	202.6	210.4	209.3	228.7	228	241	238.9
橈骨: length	133.8	130.2	143.8	140	153	149.3	162.9	158.9	171.3	167.6	180.5	176.8
尺骨: length	147	144.6	157.5	154.9	167.3	164.8	177.8	174.9	186.4	184.3	196.2	194.4
大腿骨: length	259.2	263.2	280	285.2	302.5	306	322.8	327.2	343.6	347.1	362.9	367.2
脛骨: length	201.4	199.9	218.9	217.4	236.2	234.1	253.3	251.7	268.7	265.5	284.9	284.4
腓骨: length	200.4	198.6	217.5	216	234.2	232.1	251	248.8	265.6	263.7	281.3	279.4

表20 乳・幼児四肢骨最大長(欧米人)(mm)

写真図版番号	
写真図版14	木箱4 頭蓋
写真図版15	木箱4 四肢 骨1:右橈骨 2:右尺骨 3:右上腕骨 4:左上腕骨 5:左尺骨 6:左橈骨 7:右腓骨 8:右脛骨 9:右大腿骨 10:左大腿骨 11:左脛骨 12:左腓骨
写真図版16	木箱4 体幹骨 1:右橈骨 2:左鎖骨 3:右肩甲骨 4:左肩甲骨 5:右寛骨 6:仙骨 7:左寛骨
写真図版17	木箱1 頭蓋(4才前後)
写真図版18	木箱8 頭蓋(3才前後)
写真図版19	木箱24 頭蓋(3~4才)
写真図版20	1:木箱3 頭蓋(5才前後) 2:木箱17 頭蓋(12才前後)
写真図版21	四肢骨 1:木箱26 四肢骨(9ヶ月) 2:木箱19・20 四肢骨(1才6ヶ月) 3:木箱24 四肢骨(3~4才)
写真図版22	四肢骨 1:木箱1 四肢骨(4才) 2:木箱3 四肢骨(5才) 3:木箱17 四肢骨(12才)

表21 写真図版14~22対応表

## 第8章 IV面墓出土木製品の樹種同定

当遺跡は長良川下流右岸の桑名市萱町93番地に所在し、近世を主体とする桑名城下町遺跡の一地点で、現在は浄土真宗法盛寺の敷地内にある。

当遺跡のIV面からは土葬の墓域が検出され、46基の木棺が出土した。複数の木棺が重なり検出された地点もあり、木棺は円形木棺と四角い箱型のもの（以後、方形木棺と記す）があり、大きさも様々であった。埋められた木棺の出土状況は、土層に切り合いが見られないため、短期間に一括して埋葬されたのではないかと考えられている。また、人骨が残っていた木棺が多く、その殆どは乳幼児であった。このような状況の埋葬において、どのような樹種が木棺の材として使用されていたのか、今までに調査された事例は少ない。ここでは出土した大半の木棺にあたる42基について、その側板と底・蓋などの樹種を調査した結果を報告する。また、一部の副葬品や不明な出土材も樹種同定した。

### 第1節 樹種同定試料の選別と樹種同定の方法

木棺にかんしては、各木棺のすべての部材を樹種調査する事は出来なかった。そこで、各木棺がどのような樹種の材を使用して作られていたのかを可能な限り記録するために、各木棺を構成していた部材について異なる木取りや形状そして材の質感の違いなどに注目して、樹種同定試料を選択した。また、円形木棺の底板を繋ぐ木釘や、方形木棺の底や側板に打たれた木釘についても、樹種を調べた。

材の組織標本は、片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（経目）の3方向を薄く剥ぎ取りスライドガラスの上に並べ、ガムクロラルで封入し永久プレパラートを作成した。光学顕微鏡を用いてこれらの材組織を観察し同定を行った。

プレパラートは、株式会社バレオ・ラボに保管されている。

### 第2節 結果

各試料の同定結果を表22～表25に示した。表26には円形木棺に使用されていた、側板・蓋・底・底板木釘の検出樹種を各木棺ごと、表27には方形木棺に使用されていた、側板・蓋・底・椀木・木釘の検出樹種を各木棺ごとにまとめた。表28は、木棺の中から出土した副葬品と、土坑1から出土した木製品の樹種同定結果をまとめた。

#### 木棺の樹種

木棺を構成していた側板や蓋・底の板材からは、ヒノキ科のヒノキ・サワラ・アスナロ・クロベ、マツ科のモミ属・トウヒ属・アカマツ・マツ属単維管束亜属、スギ科のスギ、合計3科9分類群が検出された。このほかに材組織の保存が悪いためヒノキ属・ヒノキ科・マツ属のレベルまでしか同定できなかった試料もあるが、これらも含めすべて針葉樹材であった。

全体的にヒノキとサワラが多くこの2種が属するヒノキ属も含めると、調査試料数の半数以上を占めている。次に、モミ属が多く使われていた。円形木棺と方形木棺では、特に樹種選択性の違いは見られなかった。ただし方形木棺では円形木棺に比べ、モミ属が多く検出された。

各木棺における側板の樹種構成は、木取りや材の質感などに着目して選択抽出した結果であり、残存していたすべてを調査した結果ではないが、樹種構成からは次の4つのタイプが見られた。

①同一または類似性の高い分類群が検出されたことから、同一の樹種で作られたと推測されるもの。ヒノキまたはサワラが主体の円形木棺に多く見られた。ただし、方形木棺の木棺45はモミ属であった。

円形木棺：木棺2（ヒノキ・ヒノキ属）・木棺6（サワラ）・木棺8（サワラ）・木棺13（サワラ）  
木棺19（ヒノキ・ヒノキ属・ヒノキ科9）・木棺20（ヒノキ・ヒノキ科9）

方形木棺：木棺18（ヒノキ・ヒノキ属）・木棺26（ヒノキ・ヒノキ属）・木棺45（モミ属）

②ヒノキ科（ヒノキ・サワラ・アスナロ・クロベ）の材から構成され、主に2～3種類が使われている。

円形木棺：木棺1（サワラ・アスナロ・ヒノキ属）

方形木棺：木棺36（ヒノキ・クロベ）

③主にヒノキまたはサワラなどヒノキ科の材と、マツ科のモミ属・トウヒ属・アカマツ・マツ属単維管束亜属の剤から構成され、主に2～3種類が使われている。

円形木棺：木棺4（ヒノキ・サワラ・モミ属）・木棺9（ヒノキ・アカマツ）

木棺12（ヒノキ・アスナロ・モミ属）

方形木棺：木棺3（ヒノキ・モミ属）・木棺23（ヒノキ属・モミ属）・木棺34（サワラ・モミ属）

④ マツ科の剤の組み合わせで構成されたもの

方形木棺：木棺32（モミ属・トウヒ属）・木棺39（アカマツ・マツ属単維管束亜属）

また、側板と蓋や底に使われていた樹種の組合せも多様であったが、側板と蓋・底が共にヒノキ科の材である木棺（木棺1・木棺2・木棺6・木棺8・木棺13・木棺18・木棺26・木棺19・20・木棺22・木棺24・木棺35）が尤も多い。これらは、方形木棺の木棺18・木棺26・木棺35を除き、すべて円形木棺であった。このほかの木棺においても蓋や底の樹種は、ヒノキ科の材が多く使われていた。ヒノキ科以外では、木棺14底・木棺23蓋・木棺34蓋・木棺44蓋・木棺45蓋がモミ属、木棺7蓋がトウヒ属、木棺9蓋がマツ属であった。

## 木釘の樹種

円形木棺の底板を繋ぐ木釘を木棺1・木棺2・木棺8・木棺24について調べた結果、すべてタケ類から作られた木釘であった。底板の樹種は、木棺1・木棺8がサワラ、木棺2がヒノキ、木棺24がヒノキ科であった。タケ類の木釘の横断面は、竹の稈の硬い表皮系を一边に含む角形であった。

方形木棺の底や側板を繋ぐ木釘は、木棺17・木棺34について調べた。木棺17には多数の木釘が各板材に刺さっており、その内の2点から材組織標本を作り、ほかの2点は横断面だけを採取して同一性を予察した。その結果、すべて同一分類群と思われ、材組織からウツギ属と同定された。この木釘の横断面はφ2～2.5mmの楕円形で、長軸は材の放射方向と一致しており、接線断面で面取り加工をしている。釘の両端は同じ太さで、片端が細く削られた形状はなく、同じ太さのようであった。ウツギ属の木釘が刺さっていたのは、モミ属の材であった。木棺34の木釘は、抜けて小瓶に保存されているもの3点を調べた。これらの木釘の横断面はφ5mm前後の多角形で、長さは2.5～3cmあり、片方の先端部に向い細く削られている。樹種はすべて、ヒノキであった。この木釘がどの板に刺さっていたのかは不明であるが、クロベの底板にも同様な木釘が刺さっていた。そして、調査した側板はモミ属とサワラであったことから、ヒノキの木釘はこれらの樹種の材を繋いでいたと思われる。

## 木製品の樹種

差歯下駄（355）の本体はヒノキ、前歯と後歯はクリであった。前歯と後歯は斜めの木取りで縦方向も材の軸方向に沿わず斜めに形成されている。そしてその板は、前歯と後歯では逆向きに嵌められていた。恐らく歯が均一に磨り減るような工夫と思われる。2点の連場下駄は、前後が丸く形成されていた下駄（356）はサワラ、角形の下駄（357）はヒノキであった（表28）。

墓の木棺から出土した副葬品（表28）からは、ヒノキ・マツ属複維管束亜属の針葉樹と、クスノキ・エゴノキ属・モチノキ属の広葉樹材が検出された。幼児が埋葬されていた墓域であったためか、玩具またはその木製品と思われる木製品が多く、その樹種はヒノキが目立つ。木棺14の数珠は、多角形の薄い板状を繋いだもので、その1片の材組織を調べたが、組織の保存が悪い事もある特定はできなかったが、モチノキ属？に類似していた。方形木棺（表25）は底がない枠のみのもので、供物を載せていたと推測されており、その材は保存が悪いためヒノキ科であることまでしか判らなかった。

V面土坑3埋土から出土した筥（483）は、サワラであった。

## 材組織の記載

**モミ属** *Abies* マツ科 写真図版23 1a-1c（木棺45-②）

仮道管・放射柔細胞からなり、樹脂細胞は無い針葉樹材。年輪幅は広く、早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の量は多い。放射断面において、放射柔細胞の壁は厚く接線面の細胞壁には数珠状肥厚が見られ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型のS型やヒノキ型で、1分野に1～4個で、配置はやや不規則である。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の山地に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツなどがある。

**トウヒ属** *Picea* マツ科 写真図版23 2a-2c（木棺32-①）

垂直と水平の樹脂道があり、仮道管・放射柔細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。樹枝道を囲むエビセルウム細胞は、厚壁である。分野壁孔はトウヒ型で1分野に普通2個ある。放射仮道管の有縁壁孔対はトウヒ型である。仮道管・放射仮道管にらせん肥厚は見られなかったことから、トウヒ *P. jezoensis* (Sieb. et Zucc.) Carr. の可能性が高い。

トウヒ属は温帯上部の山地に生育する針葉樹で、ハリモミ・ヒメバラモミ・マツハダ・トウヒなどがあがる。



**マツ属単維管束亜属 *Pinus subgen. Haploxyon*** 写真図版 23 3a-3c (木箱 39-②)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射仮道管の内壁は平滑で肥厚が見られない。細胞壁は全般に薄壁で、早材から晩材への移行はやや急であり、年輪幅は比較的狭い。

マツ属単維管束亜属は枝からマツ葉に入る維管束が1本である分類群で、日本産では5葉松類がこれに対応し、ヒメコマツ・チョウセンマツ・ハイマツなどがある。

**アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.** マツ科 写真図版 24 4a-4c (木箱 41-②)

垂直と水平の樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の量は多く年輪幅は広い針葉樹材である。分野壁孔は窓状、放射仮道管の内壁は先の鋭く尖った鋸歯状の肥厚が顕著である。また放射仮道管は、放射組織の上下端だけではなく中間部にもあり、1層以上の事も多い。このような形質から、アカマツと同定した。

アカマツは日当たりの良い乾燥地に多く生育し、人の活動地周辺では二次林の主要樹となる。

**マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxyon*** マツ科

アカマツとクロマツ (*P. thunbergii* Parl.) を含む分類群である。材組織では放射仮道管の内壁の肥厚の程度により、アカマツは鋭利な鋸歯状をなし、クロマツはゆるやかな鋸歯状である点で区別されるが、保存状態の悪さや鋸歯状肥厚の状態から2種を明確に識別できなかった試料である。

**スギ *Cryptomeria japonica* D. Don** スギ科 写真図版 24 5a-5c (木箱 43-②)

仮道管・放射細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部の量は多く、その仮道管の壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は孔口が水平に楕円形に大きく開いたスギ型、1分野に1~3個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。

**クノベ *Thuja standishii* Carr.** ヒノキ科 写真図版 24 6a-6c (木箱 28-③)

仮道管・放射細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかであるが晩材部の仮道管壁はやや厚く肥厚している。分野壁孔は、ヒノキ型やスギ型が見られ、1分野に2~6個で全体的にヒノキ属に比べ分野壁孔の数が多い。

クノベは本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木であり、特に中部地方以北に多く分布する。

**アスナロ *Thujaopsis dolabrata* sieb. et Zucc.** ヒノキ科 写真図版 25 7a-7c (木箱 1-①①)

仮道管・放射細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は概して少なく、その仮道管の肥厚は厚く、樹脂細胞は晩材部に散在する。分野壁孔は小さく、孔口は細くレンズ状に開いたヒノキ型でスギ型に近い壁孔も混在し、1分野に2~4個ある。

アスナロは日本特産の1属1種で、本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。

**ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Endl.** 写真図版 25 8a-8c (木箱 3-③)

仮道管・放射細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の量は極めて少なく、晩材部の仮道管の肥厚は目立たない。分野壁孔は孔口が細いレンズ状に斜めに開いたヒノキ型で、1分野に主に2個が水平に整然と配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州の山地のやや乾燥した根柢や岩上に生育する。

**サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.)** ヒノキ科 写真図版 25 9a-9c (木箱 1-⑦)

仮道管・放射細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の量は少なく、晩材部の仮道管は厚く肥厚している。分野壁孔はヒノキ型であるがその孔口は楕円形に大きく開いたものが多く、1分野に2~4個でおもに2個が水平に配列する。孔口の開口がヒノキより大きく水平に近いことからサワラと同定した。

サワラはヒノキより分布域は狭く、東北部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する。

**ヒノキ属 *Chamaecyparis*** ヒノキ科

ヒノキまたはサワラと思われるが、細胞壁の保存が悪く分野壁孔の特徴が充分観察できない試料や、中間的で2種の識別が困難であった試料である。

**ヒノキ科 *Cupressaceae***

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材で、晩材部の量は比較的少なく、晩材部の仮道管の肥厚もスギのように厚くはない。分野壁孔は1分野に2~4個、壁孔の外形は丸いことからヒノキ科の材と同定した。しかし保存が悪いため、これ以上は分類群を絞ることができなかった。

**針葉樹 *conifer***

仮道管がおもな軸方向要素であるが、保存が悪いため同定の根拠となる形態を観察できなかった針葉樹材である。

**コナラ属 *Quercus* 亜属 *クヌギ節 *Quercus subgen. Q. sect. Cerris**** ブナ科 写真図版 26 10a-10c (木箱 12-④)

年輪の始めに大型の管孔が1~3層ほど配列し、その後は孔口が丸く厚壁の小型の管孔が単独で分布し、広放射組織が存在する環孔材。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性、広放射組織以外は単列であり、道管との壁孔は大きく

て櫛状や交互状である。

クスギ節は落葉性のドングリの間でクスギとアベマキが属し、暖帯の山野に普通で二次林にも多い。

**クリ** *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真図版 26 11a-11c (355 下駄衝)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し徐々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火災状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状や櫛状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

**クスノキ** *Cinnamomum camphora* (L.) Presl. 写真図版 26 12a-12c (269 独楽)

中型の管孔が単独または2個か放射方向に複合して散在し、周囲状柔組織と大きな油細胞が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は異性、おもに2細胞幅、上下端に大型の方形または直立細胞があり、道管との壁孔は大きく階段状や交互状である。

クスノキは本州の中部以西・四国・九州の暖帯に生育する常緑高木である。

**ウツギ属** *Deutzia crenata* Sieb. et Zucc. ユキノシタ科 写真図版 27 13a-13c (木棺 17-④ 木釘)

非常に小型で多角形の管孔が散在し、径の大きな細胞からなる幅の広い放射組織が特徴的な散孔材。道管の壁孔は小さくて交互状に密在し、穿孔は横棒数が多い階段穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅であるが放射柔細胞が大きいので細胞幅は広く、放射細胞高は非常に高く、放射組織の縁辺には鞘細胞が見られる。

ウツギ属は北海土以南の暖帯～温帯下部の山野に普通の落葉低木である。

**モチノキ属?** *Ilex?* モチノキ科 写真図版 27 14a-14c (木棺 14 数珠)

全体に組織の保存が悪く不明瞭であるが、非常に小型の管孔からなる散孔材である。放射組織は年輪層と思われる部分でやや膨らんでいた。放射組織は異性、1～8細胞幅の紡錘形、上下端に方形や直立細胞がある。道管の壁孔や穿孔は不明であるが、階段穿孔の横棒が道管のらせん肥厚かと思われるすじが観察され、道管と放射組織との壁孔は小型で密在する。

モチノキ属は、温帯～暖帯の山地に生育する常緑または落葉性の高木または低木で、約15種がある。

**エゴノキ属** *Styrax* エゴノキ科 写真図版 27 15a-15c (270 木棺 1)

小型から中型で厚壁の管孔が単独または2～4個が複合し放射方向に配列し、晩材部では径が減少し雪線状柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒数が少ない階段穿孔である。放射組織は異性、1～2細胞幅、上下端の単列部は方形・直立細胞からなり、道管との壁孔は小型で交互状である。

エゴノキ属は暖帯から温帯下部の山地に生育する落葉高木である。

**タケ類** (タケ亜科 Gramineae subfam. Bambusoideae) イネ科 写真図版 28 16 (木棺 1 箱)

17 (木棺 1 底板木釘) 18 (木棺 24 底板木釘)

維管束は不整中心柱で多数が同心円上に均質に配置している。維管束は向軸側に原生木部、その左右に後生木部の2個の管孔、背軸側に篩部があり、全体としては4～3個の穴の集合に見える。維管束の周りは厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘が非常に厚く発達している。このような形質からイネ科のタケ類とササ類を含むタケ亜科であり、維管束鞘の発達が著しいことから、タケ類と同定した。

## 第3節 まとめ

当遺跡から出土した木棺と副葬品や生活用品などの樹種は、ヒノキ・サワラなどが優先していた。このほかにもヒノキ科のクロベヤアスナロ、マツ科のモミ属・トウヒ属・アカマツ・マツ属単維管束亜属など、全体的に針葉樹材が多く使用されていた。針葉樹材の利用が多く特にヒノキやヒノキ科が優先する樹種構成は、近世江戸城周辺の藩邸・社家・旗本屋敷地など複数の遺跡から出土した、建築材や生活用品などの樹種調査からすでに知られている(松葉, 1999)。当時の主要地方都市である桑名城下町の一般庶民の生活においても、江戸城周辺と同じような樹種利用であったことが判った。とりわけ当遺跡の墓域の木棺を多数調べた結果、江戸時代に広く流通していた木材の樹種構成と類似していたことから、木棺として製品化されたものや、または生活に使用していたものを転用したと思われる。また鉄釘のほかに、タケ類・ウツギ属・ヒノキから作られた精巧な木釘を使用した木棺も出土している。これらは職人の手が加わったものと思われる。各木棺の側板の樹種構成は、①同一種類、特にヒノキまたはサワラから作成されていると類推されるもの、②2～3種類のヒノキ科の材から作られているもの、③主にヒノキ科の材を使いマツ科(モミ属・トウヒ属・アカマツなど)の材も使用しているもの、④2種類のマツ科の材を使用しているものがあった。そして、側板・蓋・底の樹種は全体的にヒノキ・サワラを種としたヒノキ科の材が圧倒的に多く、木棺として特別な樹種選択が行われていた傾向は見られなかった。江戸時代の木棺の樹種調査事例は、あまり無いようであるが、神奈川県逗子市の池子杖敷戸遺跡の報告がある(松葉, 2000)。池子杖敷戸遺跡の木棺側板は杉、正方形・長方形の側板・底板はアカマツ・ヒノキ・ス

ギなどで、この遺跡ではアカマツの割合が高かった。複数の針葉樹材が使用されている事、池子棧敷戸遺跡の7号墓塚の木棺では底（ヒノキ）と側板（マツ属）で異なる樹種が使われているなど、当遺跡と同様な樹種利用が見られた。

当遺跡の木棺からは、ナシ亜科とモチノキ属の材で作られたモクセイの数珠が多数出土している（第9章参照）。木棺14の数珠も、モチノキ属？に似た材構造であった。当墓域内から出土した木製数珠の樹種はかなり限定されていたことから、同一の販売元から入手して、埋葬品として納棺した可能性も考えられないであろうか。

今回の調査では桑名市教育委員会の指摘もあり、今までにあまり調査例が知られていない木釘の樹種同定も行った。その結果、円形木棺の底板を繋ぐ木釘はすべて竹類であった。方形木棺で使用されていた木釘からは、ヒノキとウツギ属が検出された。そして木釘と板材樹種との環形は、竹類の木釘とヒノキ科の板、ヒノキの木釘とおそらくクロベ・サワラ・モミ属などの板、ウツギ属の木釘とモミ属の板であり、木釘とそれあ打たれる板材は、異なる樹種の組み合わせであった。また、ウツギの材は木釘に利用されることが、植物関係の本にはしばしば書かれている（例：「原色日本植物図鑑 木本編Ⅱ」保育社）。材組織からはウツギと特定は出来なかったが、事例からウツギで作られた木釘の可能性が高いようである。

#### 引用文献

- 松葉礼子 1999 菟池遺跡・汐留遺跡・黒田区三遺跡から出土した木製品の樹種から類推される近世江戸城周辺の木材消費 59-70 植生史研究 第7巻 第2号。
- 松葉礼子 2000 棧敷戸遺跡の弥生時代旧河道から出土した流木と近世の墓塚木棺の樹種同定 「池子棧敷戸遺跡（近江市No.100）発掘調査報告書」 東国歴史考古学研究所。

木棺番号	形状	試料№	部位	木取り等	樹種	備考
木棺 1	丸	①	側板	板目	サワラ	
		②	側板	板目	サワラ	
		③	側板	板目	サワラ	
		④	側板	板目	アスナロ	
		⑤	側板	板目	サワラ	
		⑥	側板	板目	サワラ	節部を含む
		⑦	側板	板目	サワラ	
		⑧	側板	板目	サワラ	
		⑨	側板	板目	アスナロ	
		⑩	側板	板目	ヒノキ属	
		⑪	側板	板目	アスナロ	
		⑫	底		サワラ	
		⑬	底板木釘		タケ類	横断面は角形:0.3×0.15cm
		⑭	蓋		ヒノキ	
木棺 2	丸	①	側板	板目	ヒノキ	
		②	側板	板目	ヒノキ属	
		③	側板	板目	ヒノキ	
		④	側板	板目	ヒノキ	
		⑤	側板	板目	ヒノキ	
		⑥	側板	板目	ヒノキ属	
		⑦	側板	板目	ヒノキ属	
		⑧	側板	板目	ヒノキ	
		⑨	側板	板目	ヒノキ属	
		⑩	側板	板目	ヒノキ	
		⑪	側板	板目	ヒノキ	
		⑫	蓋		ヒノキ	
		⑬	底		ヒノキ	
		⑭	蓋		タケ類	幅 1 cm
木棺 3	四角	①	側板	斜め	モミ属	
		②	側板	斜め	ヒノキ	
		③	側板	板目	ヒノキ	
		④	側板	斜め	アカマツ	
		⑤	側板	斜め	モミ属	
		⑥	側板	斜め	モミ属	
木棺 4	丸	①	側板	板目	サワラ	
		②	側板	板目	ヒノキ	
		③	側板	板目	ヒノキ	
		④	側板	板目	サワラ	
		⑤	側板	板目	ヒノキ	
		⑥	側板	板目	サワラ	
		⑦	側板		モミ属	
		⑧	側板カ	斜め	モミ属	
		⑨	楔形材	斜め	ヒノキ	
		⑩	側板	板目	サワラ	
		⑪	側板		サワラ	
		⑫	丸木材		ヒノキ科	
		⑬	底		ヒノキ	

表22 木棺の樹種

木棺番号	形状	試料№	部位	木取り等	樹種	備考
木棺5	四角	①	側板		サワラ	鉄釘あり
木棺6	丸	①	側板	板目	サワラ	
		②	側板	板目	サワラ	
		③	蓋		サワラ	
		④	蓋		サワラ	
		⑤	蓋		サワラ	
木棺7	丸	⑥	羅		タケ類	肉眼観察
		①	側板	斜め	サワラ	
		②	側板	板目	サワラ	
		③	側板	板目	サワラ	
		④	底		サワラ	
		⑤	蓋		トウヒ属	
		⑥	蓋		ヒノキ属	
木棺8	丸	⑦	蓋の上		アカマツ	
		①	側板	板目	サワラ	
		②	底		サワラ	
		③	底板木釘		タケ類	
木棺9	丸	①	側板	板目	ヒノキ	
		②	側板		アカマツ	
		③	蓋		マツ属	
		④	蓋	板目	ヒノキ属	
木棺10	四角	①	側板	(薄板)	ヒノキ科	
木棺10下		①			サワラ	
木棺12	丸	①	側板	板目	ヒノキ	
		②	側板	板目	ヒノキ	
		③	側板	板目	ヒノキ	
		④	側板	斜め	ヒノキ	
		⑤	側板	板目	ヒノキ	
		⑥	側板	板目	ヒノキ	
		⑦	側板	板目	ヒノキ	
		⑧	側板	板目	ヒノキ	
		⑨	側板	板目	ヒノキ	
		⑩	側板	板目	モミ属	
		⑪	側板	斜め	アスナロ?	
		⑫	側板		ヒノキ	
		⑬	底		ヒノキ	
		⑭	丸木材		クスギ節	
木棺13	丸	①	側板		サワラ	
		②	蓋		サワラ	
		③	側板		サワラ	
木棺14	四角	①	側板	斜め	アカマツ	
		②	蓋	薄板	ヒノキ属	
		③	底	角形	モミ属	
		④	底	丸破片	ヒノキ	
		⑤	底	角棒	ヒノキ	
木棺15	四角	①	側板	板目	モミ属	
		②	蓋	薄板	サワラ	
木棺16	四角	①	側板	板	ヒノキ	
		②	側板	枠	アカマツ	

表23 木棺の樹種

木棺番号	形状	試料№	部位	木取り等	樹種	備考
木棺17	四角	①	側板	斜め	モミ属	
		②	側板	板目	モミ属	
		③	側板		モミ属	
		④	①の木釘		ウツギ属	横断面は楕円形2.0×2.5cm
		⑤	③の木釘		ウツギ属	横断面は楕円形2.0×2.5cm
木棺18	四角		側板		針葉樹	φ8.0cm厚み1cm 節節が残存?
木棺17	四角	①	側板		ヒノキ属	
		①	蓋		ヒノキ	
		②	蓋		ヒノキ	
木棺17	四角	①	蓋		ヒノキ	木棺20の蓋か?
木棺17上		①	蓋		モミ属	
木棺19	丸	①	底		ヒノキ	
		②	蓋		ヒノキ属	厚み1.1mm
		③	蓋		ヒノキ属	厚み3.0mm ②と接合しない
		④	蓋の上破片		アスナロ	
		⑤	側板	板目	ヒノキ科	
		⑥	側板	板目	ヒノキ	
		⑦	側板	板目	ヒノキ	
木棺20	丸	①	側板		ヒノキ	
		②	側板		ヒノキ科	
		③	底		ヒノキ科	
		④	底		ヒノキ	
木棺21	四角	①	側板		モミ属	
		②	側板		モミ属	
		③	蓋		ヒノキ	木棺19Bの底の可能性あり
木棺22	丸	①	側板		ヒノキ	曲物か?
		②	蓋		ヒノキ	直径24.5cm
木棺23	四角	①	側板	板目	モミ属	鉄釘あり
		②	側板	角棒状	ヒノキ属	鉄釘あり
		①	蓋	斜め	モミ属	鉄釘あり
木棺24	丸	①	側板		ヒノキ属	
		②	蓋		サワラ	
		③	底		ヒノキ科	
		④	③の木釘		竹類	
		⑤	板		モミ属	木棺21の北に縦に刺さっていた板
木棺25	四角	①	側板		モミ属	
		②	蓋		ヒノキ属	
木棺26	四角	①	側板		ヒノキ	鉄釘あり
		②	側板		ヒノキ	横板
		③	側板		ヒノキ属	横板
		④	側板		ヒノキ属	②と同側の横板
		⑤	中板の角材		ヒノキ属	
		⑥	中板		ヒノキ属	上の遺体を載せていた
木棺28	四角	①	側板	板目	ヒノキ属	
		②	側板	板目	ヒノキ属	鉄釘あり
		③	側板	板目	クロベ	鉄釘あり
木棺29	四角	①	板	板目	モミ属	木棺26の東の板
		②	側板	斜め	モミ属	
		③	角材		サワラ	
		④	蓋	斜め	ヒノキ	

表24 木棺の樹種

木棺番号	形状	試料No.	部位	木取り等	樹種	備考
木棺30	四角	①	側板	柁目～やや斜め	モミ属	丸穴あり
			蓋			
木棺31	四角	①	底	柁目～やや斜め	ヒノキ	
木棺32	四角	①	側板	斜め	トウヒ属	
		②	側板		モミ属	
		③	細枝		竹類	
		④	側板	柁目	モミ属	
		⑤	蓋?		ヒノキ	
木棺33	四角	①	側板	柁目	モミ属	側板
		②	縁角材		ヒノキ	
		③	中身		ヒノキ属	蓋の落ちたものか、曲物破片か?
		④	蓋		ヒノキ属	
木棺34	四角	①	底		クロベ	
		②	側板	斜め	モミ属	板
		③	側板	斜め	サワラ	角板
		④	蓋		モミ属	
		⑤	木釘		ヒノキ	横断面は多角形 径5mm,長さ2.5cm
		⑥	木釘		ヒノキ	横断面は多角形 径5mm,長さ3.0cm
		⑦	木釘		ヒノキ	横断面は多角形 径5mm,長さ3.0cm
木棺35	四角	①		サワラ		直径24.5cm 木棺33の南側より検出
		②	側板		ヒノキ	板
		③	中身		アカマツ	
		④	蓋		サワラ	
木棺36	四角	①	側板		サワラ	薄い板 曲物転用か?
		②	側板		ヒノキ	鉄釘あり
木棺37	四角	①	側板		クロベ	
		②	側板		ヒノキ	鉄釘あり
木棺38	四角	①	側板		アカマツ	鉄釘あり
		②	側板		アカマツ	
		③	中身		ヒノキ	角棒 枝木か?
木棺39	四角	①	側板	斜め	アカマツ	
		②	側板	柁目	マツ属甲羅管束亜属	鉄釘あり
木棺41	四角	①	側板	柁目	ヒノキ科	鉄釘あり
		②	側板	柁目	アカマツ	
		③	側板	柁目	ヒノキ	
		④	側板	柁目	ヒノキ	
木棺42	四角	①	側板		ヒノキ	釘穴?あり
		②	側板		クロベ	
		③			モミ属	釘穴?あり
		④	蓋		サワラ	
木棺43	四角	①	側板		アスナロ	
		②	底		スギ	
木棺44	丸	①	側板		ヒノキ	曲物の側板に類似、繋ぎ目もあり
		②	底		ヒノキ属	
木棺45	四角	①	側板	柁目	モミ属	
		②	蓋	柁目	モミ属	
木棺46	四角	①	側板		ヒノキ	鉄釘あり
不明遺構	方形木枠	①	側板		ヒノキ科	

表25 木棺の樹種

木棺番号	部位	ヒノキ	サワラ	ヒノキ属	アスナロ	ヒノキ科	モミ属	トウヒ属	アカマツ	マツ属	タケ類
木棺1	側板		7	1	3						
	蓋	1									
	底		1								
	底板木釘										1
木棺2	側板	7		4							
	蓋	1									
	底	1									
	底板木釘										1
木棺4	側板	4	5				2				
	底	1									
木棺6	側板		2								
	蓋		3								
木棺7	側板		3								
	蓋	1						1			
	底		1								
木棺8	側板		1								
	底		1								
	底板木釘										1
木棺9	側板	1							1		
	蓋			1						1	
木棺12	側板	10			1		1				
	底	1									
木棺13	側板		2								
	蓋		1								
	底										
木棺19	側板	2				1					
	蓋			2							
	底	1									
木棺20	側板	1				1					
	底	1				1					
木棺22	側板	1									
	蓋	1									
木棺24	側板			1							
	蓋		1								
	底					1					
	底板木釘										1
木棺44	側板	1									
	蓋						1				

表26 円形木棺の樹種



木棺番号	部位	ヒノキ	サワラ	ヒノキ属	アスナロ	タロベ	ヒノキ科	スギ	セミ属	トウヒ属	早稲等 ツツ属	アカマツ	ウツギ属
木棺3	側板	2							3			1	
木棺5	側板		1										
木棺14	側板											1	
	底	1											
	蓋			1									
木棺15	側板	1							1				
	蓋		1										
木棺16	側板	1										1	
木棺17	側板								3				
	木釘												2
木棺18	側板			1									
	蓋	2											
木棺21	側板								2				
	蓋	1											
木棺23	側板			1					1				
	蓋								1				
木棺25	側板								1				
	蓋			1									
木棺26	側板	2		2									
	中板			2									
木棺28	側板			2		1							
木棺29	側板								1				
	角材		1										
	蓋	1											
木棺30	側板							1					
木棺31	側板	1											
木棺32	側板								2	1			
	蓋?	1											
木棺33	側板	1							1				
	蓋			1									
木棺34	側板		1						1				
	蓋								1				
	底					1							
	木釘	3											
木棺35	側板	1											
	蓋		1										
	底		1										
木棺36	側板	1				1							
木棺37	側板	2											
木棺38	側板											2	
	底	1											
木棺39	側板										1	1	
木棺41	側板	2					1					1	
木棺42	側板	1				1			1				
	蓋		1										
木棺43	側板				1			1					
木棺45	側板								1				
	蓋								1				
木棺46	側板	1											

表27 方形木棺の樹種

## 第9章 木製品・種子製品の同定

### はじめに

桑名城下町遺跡堂町93番地点では、合計5面の遺構面が確認されている。このうちIV面では、土葬墓や廃棄土坑等が検出された。土葬墓は木棺を伴うものが46基確認されており、副葬品の数珠、銭、木製品などが出土している。また、数珠には、木製と種子製とが認められる。

今回の分析調査では、これらの副葬品を中心とした木製品・種子製品の同定を行い、用材・植物利用に関する資料を得る。

### 第1節 試料

試料は、出土した木製品・種子製品31点である。このうち、292、603、606は種子製品（数珠）であり、292には2片の木製品が含まれていた。また、木製品のうち、276には3点、268には2点の部品があったため、それぞれについて同定を行う。数珠には、1ケース中に40点以上入っている試料もあった。

### 第2節 方法

#### (1) 樹種同定

木製の数珠については、実体顕微鏡で形態分類を行ったうえで、各試料中から各種類1点を選択して、1/4をカットして試料とした。1点のみの試料については、形態分類のみでカットは行わなかった。剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水黒ラール流、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

#### (2) 種実同定

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定する。

### 第3節 結果

樹種同定および種実同定結果を表1に示す。603のうち、3片は保存状態が悪く種類の同定には至らなかった。また、292には種実とともに木製の数珠も入っていたが、表面の保存状態が悪く、同定には至らなかった。その他の試料は、木材が針葉樹4（モミ属・ヒノキ・サワラ・アスナロ）と広葉樹6種類（ブナ属・コナラ属アカガシ亜属・バラ科ナシ亜科・トチノキ・モチノキ属・エゴノキ属）に同定された。また種実はボダイジュに同定された。

以下に、検出された木材の解剖学的特徴および種実の形態的特徴を記す。

#### (木材)

##### ・モミ属 (*Abies*) マツ科

試料は年輪界を含まない。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁穴はスギ型で1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

##### ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtuse* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかへやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められるが、顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型~トウヒ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~15細胞高。

##### ・サワラ (*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型~ヒノキ型で、1分野に1~3個。放射組織は単列、1~15細胞高。

##### ・アスナロ (*Thuopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。晩材部には樹脂細胞が認められ、その水平壁に

はじゅず状の肥厚が顕著に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分界壁孔はスギ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

試料は保存状態が悪い。晩材部の幅が狭いこと、樹脂細胞が認められること、仮道管内壁にらせん肥厚は見られないこと等から、上記ヒノキ属やアスナロを含むヒノキ科のいずれかと考えられる。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状から階段状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものから複合放射組織とがある。

・バラ科ナシ亜科 (Rosaceae sifam. Maloideae)

散在孔で、管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独および2～5個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型～同性、1～2細胞幅、1～20細胞高。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列する。

・モチノキ属 (*Ilex*) モチノキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～8個が主に放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は高くない。道管は階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、1～6細胞幅、1～40細胞高。

・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2～4個が複合して散在し、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。

(種実)

・ボダイジュ (*Tilia miqueliana* Maxim.) シナノキ科シナノキ属

種実はいずれも孔があいており加工の跡がある。完形のもの大きさが8mm程度で、ややつぶれた球形である。黒褐色で表面はざらつき、木質で堅い、4～5裂する筋があり、破片のものはいずれも筋から割れている。

ボダイジュは、中国原産である。

## 第4節 考察

### (1)木製品の用材

木製品には、櫛、羽子板、玩具、板、櫛、曲物などがある。櫛は、モチノキ属、エゴノキ属、トチノキ、ブナ属が認められた。いずれも、ろくろの用材として一般的な種類である(農商務省山林局、1912)。民俗事例によれば、トチノキとブナ属は乾燥が難しく狂いが多いが、大量に入手できるため使用量は大きくされる(橋本、1979)。中世から近世にかけての遺跡出土の櫛にも多数認められており(島地・伊東、1988;伊東、1990;山田、1993;能城・高橋、1996)、櫛の用材として最も一般的な種類であったことが推定される。一方、モチノキ属やエゴノキ属は、ろくろでも玩具や小物としてよく利用されるが、櫛としては一般的ではない。今回の櫛を見ると、漆塗りのあるものと無いものがあり、エゴノキ属とモチノキ属は漆塗りの施されていない櫛に集中的に見られる。このことから、漆塗りの施されている櫛は、日常利用されている櫛と同様の用材が行われているが、漆塗りの施されていない櫛では、通常とは異なった用材であることが指摘できる。これが副製品として納められたこととどのように関連するかは、現時点では不明である。

その他の木製品では、371にアカガシ亜属が認められた以外は全て針葉樹であり、ヒノキ属(ヒノキ・サワラ)が多い。ヒノキ属は木理が通直で加工が容易、耐久・耐湿性や防虫性に優れた材質を有する。曲物の用材としては最も多く利用されている種類の一つであり(島地・伊東、1988;成田、1996)、今回の結果も調和的である。一方、櫛には、これまでの調査でツグやイヌノキが多く見られ、今回の結果とは異なる。副製品であることから、実用品ではない可能性もある。また、葬送具にはヒノキ、マツ、モミなどが多く用いられる(農商務省山林局、1912)。副製品などにヒノキやサ

ワラが多い背景には、このような葬送具の用材も影響している可能性がある。

## (2) 数珠の素材

樹種には木製と種子製とがあった。木製の数珠にはモチノキ属とナシ亜科が認められた。農商務省山林局(1912)によれば、数珠には多くの種類が利用されるが、地域によって利用する種類に多少の違いがある。そのうち、京都の数珠製作ではモチノキとナシがそれぞれ利用されていることが知られており、今回の同定結果との関連性が注目される。

一方、種子製は全て中国原産のボダイジュであった。民族事例によれば、数珠の素材として用いられる種実として、ボダイジュ、ハス、ムクロジ、モモ、アンズ、スモモ、ユズ、クルミ、アオギリ、ヤシ、ピンロウ、ジュズダマなどの事例がある(柴田 編、1958)。今回の結果は、これらの事例とも一致している。

いわゆる仏教の菩提樹は、クワ科のインドボダイジュであるが、高緯度地域では生育できないことから、その代用として菩提樹が利用されていたものと考えられる。ボダイジュは、東京都新宿区發昌寺跡等でも数珠として出土した例が報告されている(百原,1991)。おそらく、仏教に関連の深い樹木として寺院等に植えられていた菩提樹の実を数珠にして、副葬品として納めたものと考えられる。

### 引用文献

橋本鉄男(1979) ちくろ、44p.、法政大学出版局。

伊東隆夫(1990) 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ、資料、26、p.91-189、京都大学木材研究所。

百原 新(1991) 發昌寺跡出土の数珠に使用された種子・果実。「發昌寺跡 一社団法人金融財政事情研究会新館建設に伴う第2次緊急発掘調査報告書」、p.6-7 (付編)、社団法人金融財政事情研究会・新宿区南元町遺跡調査会。

成田寿一郎(1996) 曲物・籬物、205p.、理工学社。

能城修一・高橋 教(1996) 中・近世における木材利用、第11回植生史学会シンポジウム「中・近世の植生史」発表要旨、p.7-11。

農商務省山林局編(1912) 木材ノ工藝的利用。1308p.、大日本山林會。

柴田桂太編(1958) 資源植物事典。904p.、北隆館。

高池 謙・伊東隆夫編(1988) 日本の遺跡出土木製品総覧。296p.、雄山閣。

山田昌久(1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史、植生史研究、特別第1号、242p。

遺物番号	遺構面	層位/遺構	器種	樹種	備考	
269	IV	木棺1	竪梁	クスノキ	鉄芯あり	
270	IV	木棺1	多塔	エゴノキ属		
277	IV	木棺6	鳥	ヒノキ		
282	IV	木棺12	不明	ヒノキ	円錐形 くぼみあり	
283	IV	木棺12	竪梁	ヒノキ	円錐形 鉄芯あり	
294	IV	木棺42	不明	マツ属複雑管束亜属	車輪か	
295	IV	木棺14	数珠	モチノキ属?	多角形の薄板	
355	IV	土坑1	透歯下駄	本体	ヒノキ	
				前歯	クリ	
				後歯	クリ	
356	IV	土坑1	透歯下駄	サワラ	両端は円形	
357	IV	土坑1	透歯下駄	アスナロ	角型	
483	V	土坑3	踏	サワラ		

表28 木製品の樹種

遺物番号	遺構面	層位/遺構	器種	個数	材質	種別	
373	IV	土坑2	羽子板	1	木材	モミ属	
273	IV	木棺6	小杯	1	木材	モチノキ属	
274	IV	木棺6	小杯	1	木材	エゴノキ属	
275	IV	木棺6	小杯	1	木材	エゴノキ属	
276	IV	木棺6	鳥	本体	1	木材	ヒノキ科
				ขนาดใหญ่	1	木材	ヒノキ
				車小	1	木材	ヒノキ
316	IV	土坑1	輪	1	木材	トチノキ	
293	IV	不明遺構	輪	1	木材	トチノキ	
372	IV	土坑2	輪	1	木材	ブナ属	
374	IV	土坑2	不明	1	木材	コナラ属アカガシ亜属	
317	IV	土坑1	輪	1	木材	トチノキ	
318	IV	土坑1	輪	1	木材	トチノキ	
358	IV	土坑1	板	1	木材	ヒノキ	
359	IV	土坑1	板	1	木材	アスナロ	
268	IV	木棺1	人形	腕	1	木材	ヒノキ
				軸	1	木材	ヒノキ
353	IV	土坑1	脚	1	木材	サワラ	
354	IV	土坑1	曲物	1	木材	ヒノキ	
484	V	土坑5	輪	1	木材	トチノキ	
466	V	包含層	板	1	木材	ヒノキ	
467	V	包含層	板	1	木材	ヒノキ	
468	V	包含層	板	1	木材	ヒノキ	
597	IV	木棺1	数珠	9	木材	バラ科ナシ亜科	
602	IV	木棺9	数珠	46	木材	モチノキ属	
603	IV	木棺19	数珠	40	種子	ボダイジュ	
						不明種子	
292	IV	木棺25	数珠	10	種子	ボダイジュ	
					木材	不明木材	
604	IV	木棺24	数珠	1	木材	バラ科ナシ亜科?	
601	IV	木棺7	数珠	1	木材	モチノキ属?	
598	IV	木棺2	数珠	6	木材	モチノキ属	
599	IV	木棺3	数珠	8	木材	モチノキ属	
600	IV	木棺4	数珠	10	木材	バラ科ナシ亜科	
605	IV	木棺26(中板の下)	数珠	22	木材	モチノキ属	
606	IV	木棺44	数珠	1	種子	ボダイジュ	

表29 樹種同定および種子同定結果

## 第10章 まとめ

本章では検出された各遺稿面の時期や、特徴的な遺構についてその性格等を考えるとともに、出土遺物等についても若干の検討を行い調査のまとめとしたい。

### 第1節 各遺稿面の時期について

各遺稿面を通じて紀年名を持つ資料はごく少なく、主に生産地にて編年作業の行われている陶磁器類から年代観を類推することとしたい。遺物の詳細については観察表を参照されたい。

Ⅲ面のおおよその年代観をしめす資料には以下のものがある。

①竈8を構成する瓦の中から「寛延」のへら書きを持つもの(553)が出土している。

②礎石建物を構成する土坑、竈等から19世紀前半の瀬戸美濃陶器、肥前磁器等が出土している。

③Ⅲ面を形成する盛土層(Ⅳ面包含層に相当)から19世紀前半の常滑赤土水管(205～208)が出土している。

「寛延」は元号(寛延期間は1748～1750年)と考えられるため、少なくとも竈8は18世紀後半以降に構築されたものであると考えられる。その他の資料はⅢ面が19世紀前半以降に利用されていたことを示すものである。

Ⅳ面のおおよその年代観をしめす資料には以下のものがある。

①土坑1からは19世紀前半代と考えられる陶胎染付の箱形湯呑や、瀬戸美濃陶器、肥前磁器類が出土。

②Ⅳ面を形成する盛土層(Ⅴ面包含層に相当)からは18世紀後半代に比定できる瀬戸美濃陶器摺鉢(448)が出土。これらの資料はⅣ面が少なくとも18世紀後半代以降に形成されたことを示している。

Ⅴ面については遺構出土の遺物が非常に少ないため断定は難しいが17世紀から18世紀にかけて構築され、土地利用が為されていた可能性が高い。

なお、さらに下層については掘削が及んでいないが、トレンチからは中世に属する遺物しか検出されていないため、中世の遺構が存在する可能性が残る。

以上、各遺稿面の年代観を類推したが、これら以外でもごく小規模な開発によって、盛土と削平が繰り返行われていることが調査区断面から確認された。またⅡ面からⅣ面にかけて、石列や瓦列、土管等が断片的にしか検出されないのも小規模開発によって破却された結果と推測される。

### 第2節 Ⅳ面の墓域と出土人骨について

本遺跡では埋葬された人骨が大量に出土した。出土状況の詳細は第5章、分析については第7章で述べたとおりである。ここでは最も大量かつ一括埋葬の可能性が高いⅣ面の墓域出土の人骨を中心に検討する。

Ⅳ面の墓域から出土した木棺は、それに伴う人骨の出土状況や分析により、①埋葬姿勢のわかるもの、②改葬された可能性のあるもの、③一つの木棺内から①、②の両者が検出されたものの3類に分類できる。それぞれについて詳細を述べる。

①円形木棺のうち1、2、4、6、7、8、11、12、19、24、方形木棺のうち3、14、17、21、25、42が該当する。座葬、側臥屈葬等の埋葬姿勢がわかることから、死後さほど間を置かず埋葬され、今日までその位置を保っていたと考えられる。円形木棺はほとんどがこれにあたり、まさに早稲として使用されたことがわかる。また大多数に数珠などの副葬品が確認されている。

②円形木棺のうち20、22、44、方形木棺のうち10、15、16、18、23、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、39、40、41、43、45、46が該当する。埋葬姿勢は確認できず、10、18、23、35、43には複数の遺体がおさめられていた。これらは大部分ないしは一部が解剖学的に正しく関節した状態で出土しており、頭骨もほとんどが下顎骨の残存したものであった。よって埋葬当時すでに白骨になっていた、もしくは洗骨が行われたとは考えられない。軟部がある程度残った状態で、検出位置に改葬されたものと思われる。また、方形木棺には底部全面を覆うような底板のあるもの(木棺31、34、35、37、40、43)は少なく、幅3～4cmの板材が平行かつ等間隔に配置されているものが多かった。このことから改葬は軟部が残った状態で行われたことが窺えよう。

③円形木棺のうち9、13、方形木棺のうち26が該当する。1つの木棺に2遺体がおさめられているもので、1体が①に、他1体が②にあたる。②についても蓋の下から検出されており、流入したとは考え難く、①の埋葬時に木棺内におさまられたものと思われる。すなわち一次埋葬である①と、改葬である②が同時に埋葬されていることになる。

第5章で述べたように、すべての木棺が間に土を挟むことなく上下に積み重なって検出される等、層的にも①～③

が混在した状況となっており、後の掘り込みによる切り合い関係も認められない。このことはいわゆる再葬が行われたものでなく、検出された木棺がすべて同時に埋葬された結果と考えられる。

以上のことからⅣ面で検出された墓域は、何らかの理由で一次埋葬である①の遺体と、改葬である②の遺体が一致して同時に埋葬されたことがわかる。これは乳幼児の大量死亡と墓域の改修が偶然重なった結果なのか、乳幼児の大量死亡があったため墓域の改修や拡大が求められたのかは現段階ではわからない。いずれにせよ乳幼児が狭い範囲に集中して埋葬されているのは特異な例と思われる。今後の検出事例の増加を待って検討していきたい。

さて、墓域出土の人骨は、第7章でもふれているが遺存状態がきわめて良好であったため、②の遺体を改葬する際の個体識別は容易であったと思われる。また、①については死後さほど経過せず埋葬されたことは前述したとおりである。つまり埋葬時の縁故関係がまた希薄になっていない時期に埋葬されたと考えることができる。1つの木棺から2体以上検出された人骨については相互に、血縁関係を含めた何らかの関係性を持つことが考えられるのではないかと、これについても今後の検討課題としたい。

墓域あるいはその周辺では木棺のほかには杭群と、不明遺構として方形の木枠も検出されている。杭群は墓域の北側から検出されているが、墓域との直接の関係は不明である。東西11mにわたり墓域を隔絶するように打ち込まれていることから境界を示している可能性が考えられる。

方形木枠は杭群の北側から検出され、その内側からウメ、モモ等やウリ科と思われる植物の種子が出土している。また、方形木枠のすぐ南の遺構面直上からは瓦燈(300)も出土している。これらを死者への供物や灯明と考えるなら墓域と関連するものとも考えられよう。

Ⅳ面墓域から検出された人骨はすべて土葬にされたもので、火葬骨は確認されなかったが、各面の包含層からは数体の火葬骨と、骨壺と考えられる陶器の壺が出土している。

Ⅳ面包含層から出土した火葬骨はほとんどが成人のもので、瀬戸美濃窯で生産された灰釉有耳壺におさめられていた。これらは遺構に伴って出土したのではなく、骨壺の生産時期が埋葬の時期を直接示すものでもないため、詳細な時期及び、埋葬形態については不明な点が多い。また、Ⅴ面包含層からも火葬骨が出土している。遺存状態はきわめて悪く、湧水もあったため取上を一部断念したが、出土した遺体は筵状のものにくるまれて火葬され、そのまま埋葬されたと思われる。

このように近接した時期においても、様々な埋葬形態が確認された。これらは時期差、被葬者の年齢によるもの等様々な要因が考えられよう。

### 第3節 刻印瓦について

本調査で最も出土量の多かったのは近世の瓦であり、ほぼすべての層位から出土が見られた。コンテナケースに約100箱を数える膨大な量の瓦の中には、刻印やへら書きのあるものも多数認められた。ここでは刻印の種類と出土状況を検討し、桑名城下町における瓦の生産や流通等を考えるうえで基礎データとして提示したい。

刻印瓦の出土位置と層位、観察結果は表9、10に示した通りである。拓影は図版35～38に掲載した。この中から、同範と思われる刻印について、出土位置をまとめたものが表11である。これによれば、刻印瓦の出土が漸次的に推移していく様子が確認できる。他の出土遺物から、各遺構面と主要遺構の年代観はおおよそ類推できるので、これらの刻印は瓦の時期決定の資料となりうる可能性がある。

瓦は、軒部分以外は形態変化に乏しく、耐久性があり使用期間も比較的に長いことからその時期を決定するのが困難であった。今回提示した刻印は工人差、個体差であることも充分に考えられるが、ある程度の前後関係としてとらえることも可能ではないだろうか。いずれにせよデータ量を増やす必要があり、今後は桑名城下町遺跡の他地点で出土している瓦についても同様の分析を行い、比較、検討していくべきと思われる。

### 第4節 中世の遺物について

桑名城下町遺跡の発掘調査において、中世にさかのぼる遺物が出土することは少なくない。これまでの調査では断片的な資料が確認されていたのみであったが、今回ある程度まとまった資料を得ることができた。

遺構に伴っての出土は見られず、同時代と考えられる遺構も検出されなかったため、上流域からの流入も考えられたが、ローリング痕が認められず使用痕も良く残っていることから、調査地もしくはごく近所で使用されていたことは間違いないと思われる。

中世遺物の詳細については遺物観察表を参照されたいが、12世紀中頃から15世紀にかけての遺物が多数確認された。その後、ごく少量ながら16世紀から17世紀前半の遺物が確認でき、17世紀後半からは大量の消費がされるようになる。これらの出土状況は桑名湊の隆盛や、慶長の町割、松平定勝の城下町改修の影響等を反映しているものと思われる。今

後は他地点の出土状況をあわせて検討していくことが必要となろう。

以上のように今回の調査は、近世桑名藩における寺院行政や伊勢国における浄土真宗寺院の中できわめて重要な役割を果たしていた法盛寺を、考古学の立場から調査を行うことができた意義深いものであったと言える。また、桑名城下町の成立や構造等を考える上でも、重要な意味を持つ調査であった。

しかし、調査担当者の力量不足から、発掘調査によって得られた情報をすべて活かすには言い難い。最低限の記録保存を、ようやく報告書というかたちで提示するものである。民俗学的な考察をはじめとする様々な分析については、今後、桑名城下町の他地点の調査を通じて、随時検討していきたいと考えている。

今回の調査では、調査対象地に埋葬された多くの人々に出会うこととなった。最後ではあるが貴重な情報をご提供いただいた埋葬された人々に感謝し、そのご冥福をお祈りしたい。また、調査にご協力いただいた法盛寺住職福井照真氏、副住職福井孝尚氏、責任役員、門徒総代の皆様、及び、関係者の方々により御礼申し上げます。

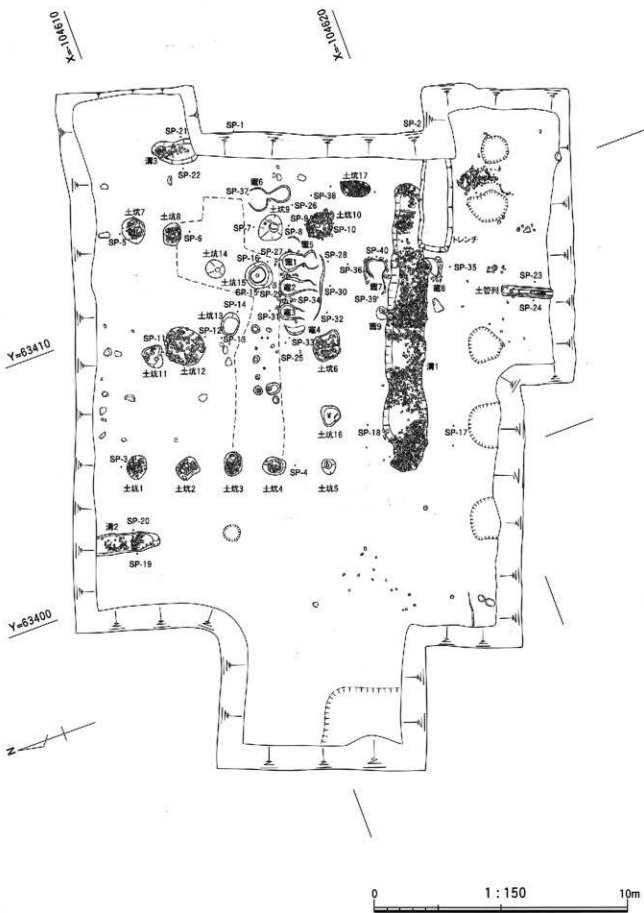
#### 主要参考文献

- 桑名市教育委員会 1959 『桑名市史 本編』  
桑名市教育委員会 1960 『桑名市史 補編』  
藤沢良祐 1982 「瀬戸古窯群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅰ』  
藤沢良祐 1984 「古瀬戸」概説『美濃陶磁歴史館Ⅲ』土岐市美濃陶磁歴史館  
中野晴久 1986 「近世常滑地における甕の編年研究ノート」『常滑市民俗資料館 研究紀要Ⅱ』常滑市教育委員会  
藤沢良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 V』瀬戸市歴史民俗資料館  
桑名市教育委員会 1987 『桑名市史 続編』  
藤沢良祐 1987 「本業焼の研究（1）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 VI』瀬戸市歴史民俗資料館  
藤沢良祐 1988 「本業焼の変遷（2）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 VII』瀬戸市歴史民俗資料館  
藤沢良祐 1988 「本業焼の変遷（3）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 VIII』瀬戸市歴史民俗資料館  
東京都港区教育委員会 1988 芝公園一丁目 増上寺院群 光学院・貞松院群 源興院跡 一港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書一』  
藤沢良祐 1989 「本業焼の変遷（4）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 VIII』瀬戸市歴史民俗資料館  
岐阜市教育委員会 1991 『千載敷 Ⅱ-財団法人加藤栄三・東一記念館建設に係る緊急発掘調査の記録一』  
藤沢良祐 1991 「瀬戸古窯群Ⅱ-古瀬戸後期様式の編年一」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅴ』  
社団法人金融財政事情研究会・新宿区南元町道跡調査会 1991 『發昌寺跡-社団法人金融財政事情研究会新館建設に伴う第2次研究発掘調査報告書一』  
天徳寺寺域第3道跡調査会 1992 『天徳寺寺域第3道跡発掘調査報告書 浄品院跡の考古学的調査』  
大橋康二 1993 『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』  
常滑市教育委員会 1994 『土管の歴史展〜飛鳥から現代まで〜』  
中野晴久 1994 「生産地における編年について」『中世常滑焼をおいて』資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所  
美濃加茂市教育委員会 1995 『仲道間遊発掘調査報告書』  
常滑市教育委員会 1995 『常滑の赤物展〜もう一つの常滑焼〜』  
藤沢良祐 1996 「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界〜その生産と流通〜資料集』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター  
北村和宏 1996 「泥張の羽釜」『鍋と甕 そのデザイン』考古学フォーラム  
鈴木正貴 1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕 そのデザイン』考古学フォーラム  
金子健一 1996 「泥張・三河地方のホウロク」『鍋と甕 そのデザイン』考古学フォーラム  
財団法人大阪市文化財協会 1998 『住友鋼材所跡発掘調査報告書』  
財団法人徳島県埋蔵文化財センター 1998 『新蔵町1丁目道跡 企業局総合管理センター(旧副知事公舎) 地点一総合管理センター(仮称) 建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』  
堺市教育委員会 2000 「環境浄化都市道跡発掘調査概要報告-SKT755 地点-鍋之町東2丁-(下水道土居川雨水線立杭築造工事に伴う近世瓦生産地点の発掘調査)」『堺市文化財調査概要報告 第86冊』  
九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年一九州近世陶磁学会10周年記念一』  
桑名市教育委員会 2001 『桑名城下町道跡発掘調査報告書〜寛町93地点〜』

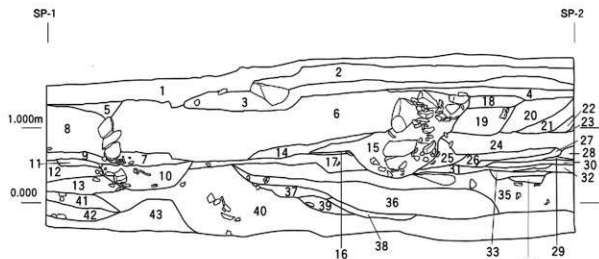




図版 1 調査地点位置図

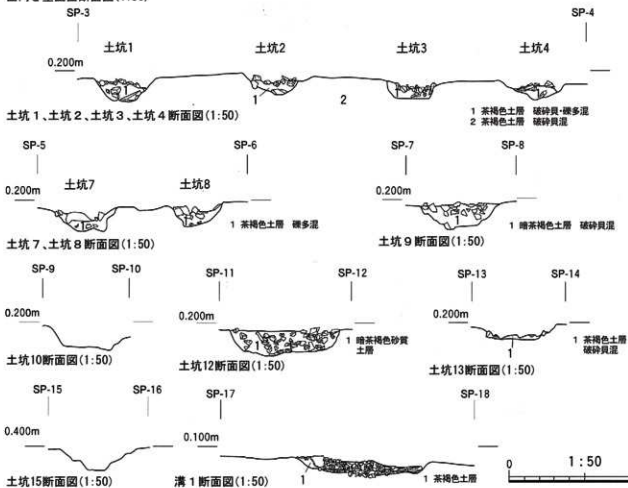


図版2 Ⅲ面平面図(1:150)

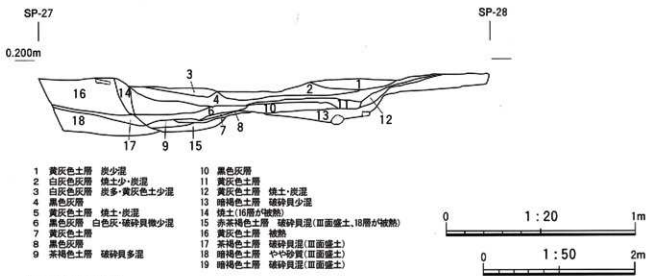
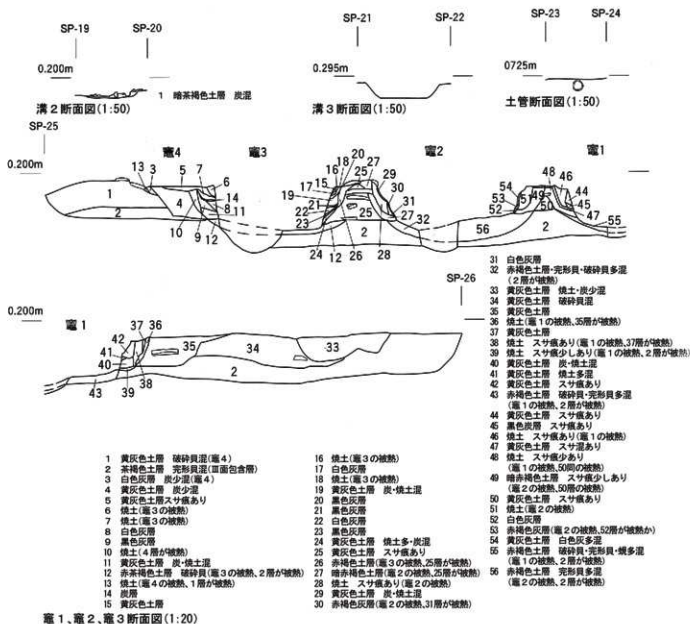


- |                                    |                       |                           |
|------------------------------------|-----------------------|---------------------------|
| 1 暗茶褐色土層 礫混 (表土層・近年の盛土)            | 17 茶褐色土層 炭多・礫砂貝少混     | 31 明茶褐色砂質土層 礫砂貝・炭少混       |
| 2 明黄灰色砂層 (表土層近年の盛土)                | 18 暗黄灰色粘質土層           | 32 明茶褐色粘質土層               |
| 3 暗茶褐色土層 明黄灰色砂少混 (表土層・近年の盛土)       | 19 暗黄灰色粘質土層 礫砂貝・茶褐色砂混 | 33 暗茶褐色粘質土層 礫砂貝・炭多混       |
| 4 暗茶褐色土層 明黄灰色砂少・青灰粘質砂混 (表土層・近年の盛土) | 20 茶褐色砂質土層 暗黄灰粘質砂混    | 34 明茶褐色粘質土層 礫砂貝・炭多混       |
| 5 茶褐色土層 赤褐色土・焼瓦混 (表土層・近年の盛土)       | 21 黄灰色砂質土層 小砂利多混      | 35 暗茶褐色土層 礫砂貝少・炭・燒土混      |
| 6 赤褐色土層 燒土・焼瓦多混 (戦後復興の層)           | 22 明茶砂質土層             | 36 暗黄灰色砂質土層 礫砂貝多混         |
| 7 暗茶褐色土層 砂・粘質土層                    | 23 明茶色砂質土層 青灰色透光粘質砂混  | 37 橙褐色土層 礫砂貝少混            |
| 8 茶褐色土層 瓦混                         | 24 明茶褐色砂質土層           | 38 暗黄灰色砂層 橙褐色土層           |
| 9 黄灰色土層 礫混                         | 25 明茶褐色土層 砂少・炭少混      | 39 暗黄灰色砂層                 |
| 10 暗茶褐色粘質土層 礫砂貝少量                  | 26 明茶褐色土層 炭多          | 40 暗茶褐色土層 暗黄灰粘質砂・礫砂貝少・炭多混 |
| 11 暗茶褐色粘質土層 礫砂貝少・炭少混               | 27 明茶褐色土層 炭多          | 41 暗茶褐色粘質土層 礫砂貝少量・炭多・炭多混  |
| 12 暗茶褐色土層 礫砂貝少・炭少混                 | 28 明茶褐色土層 炭少・燒土少混     | 42 暗黄褐色土層 粘質土・礫砂貝少混       |
| 13 暗茶褐色粘質土層 礫砂貝少・炭少混               | 29 炭層                 | 43 暗褐色土層 砂質土・礫砂貝多混        |
| 14 明茶褐色土層 燒土・炭混                    | 30 橙茶褐色土層             |                           |
| 15 礫層                              |                       |                           |
| 16 赤茶褐色土層                          |                       |                           |

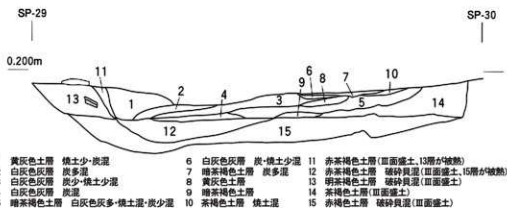
西向き壁面断面図(1:50)



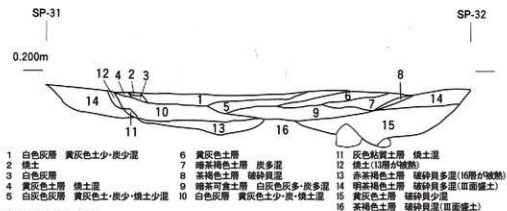
図版3 Ⅲ面断面図



図版 4 III面断面図



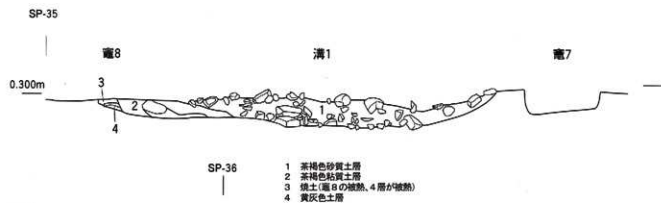
竈 2 断面図 (1:20)



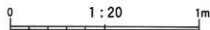
竈 3 断面図 (1:20)



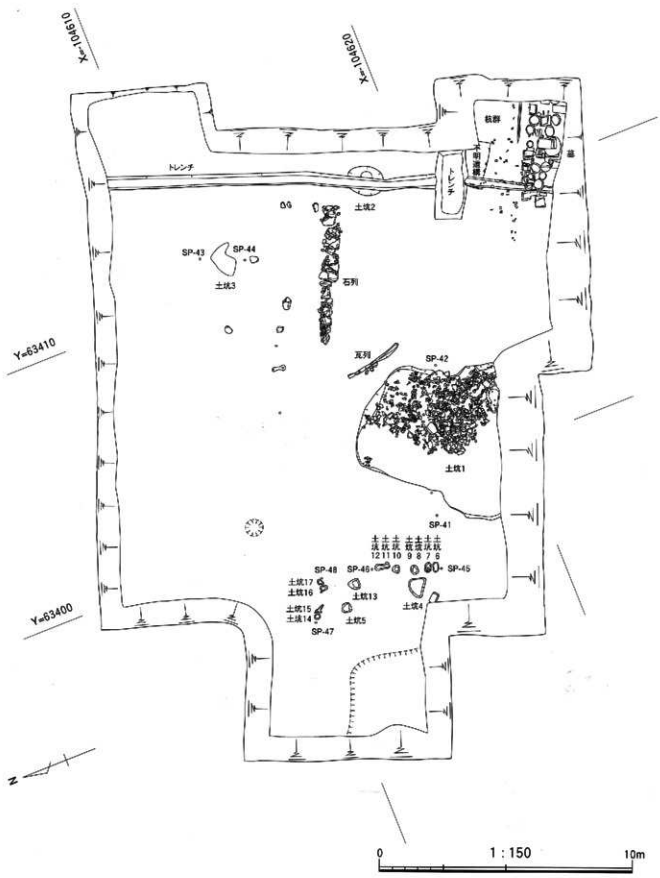
竈 3、竈 4 断面図 (1:20)



溝 1・竈 7・竈 8 断面図 (1:20)







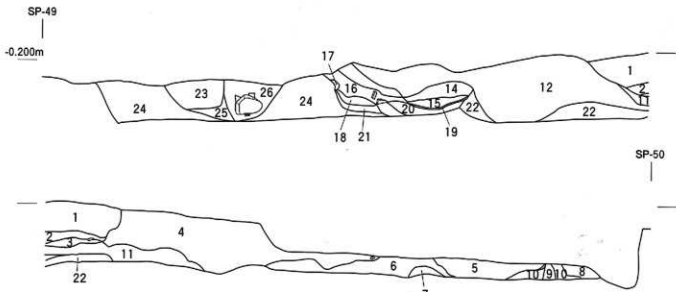
図版7 IV面平面図(1:50)





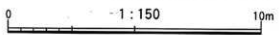
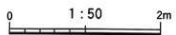


V面 平面図(1:150)



- 1 暗灰褐色土層 小礫碎貝少混
- 2 灰色土層 小礫碎貝少混
- 3 灰褐色土層 木片・細礫碎貝少混有機質
- 4 灰褐色土層 充形・礫碎貝多混
- 5 灰褐色砂質土層 礫碎貝多混
- 6 灰褐色土層 礫碎貝混
- 7 灰褐色粘質土層 微小礫碎貝少混
- 8 灰赤褐色砂質土層 礫碎貝少混
- 9 灰褐色粘質土層 礫碎貝少混
- 10 明灰褐色土層
- 11 微礫碎貝層
- 12 茶褐色土層 充形・礫碎貝多混
- 13 黑褐色土層 礫碎貝多混

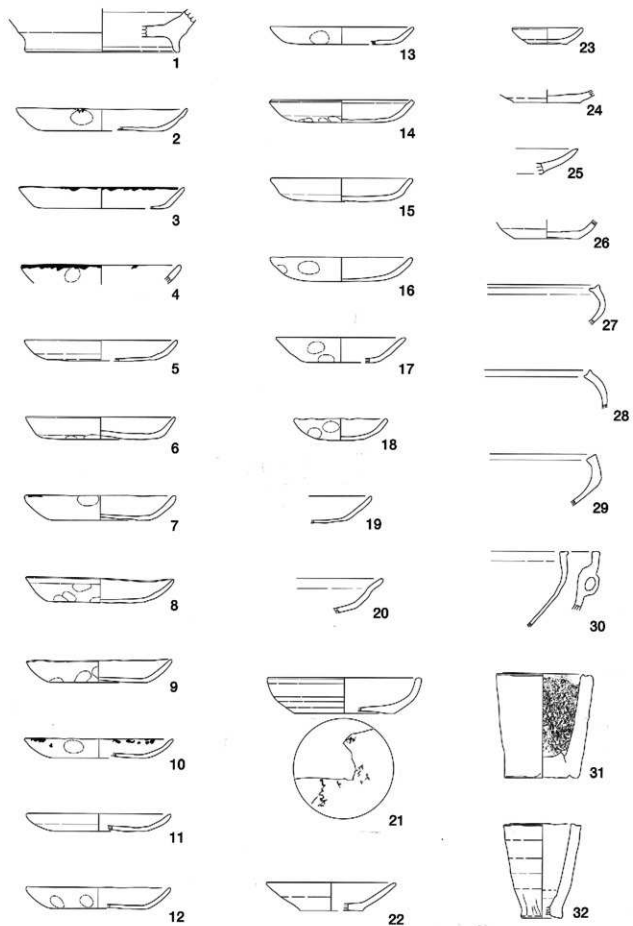
- 14 明青灰色土層
- 15 明灰灰色土層
- 16 暗灰褐色土層 礫碎貝混
- 17 黑色土層 礫碎貝混
- 18 灰色粘土層
- 19 黃白色粘質土層
- 20 暗黑褐色土層 礫碎貝少・灰・植物遺体多・木片多混
- 21 暗黑灰褐色土層 礫碎貝混
- 22 灰褐色粘質土層 充形・礫碎貝多混
- 23 赤褐色土層 礫混
- 24 暗灰褐色土層 礫碎貝・灰・礫少混
- 25 青灰色土層 礫碎貝混
- 26 カクラン



盛土断面図(1:50)

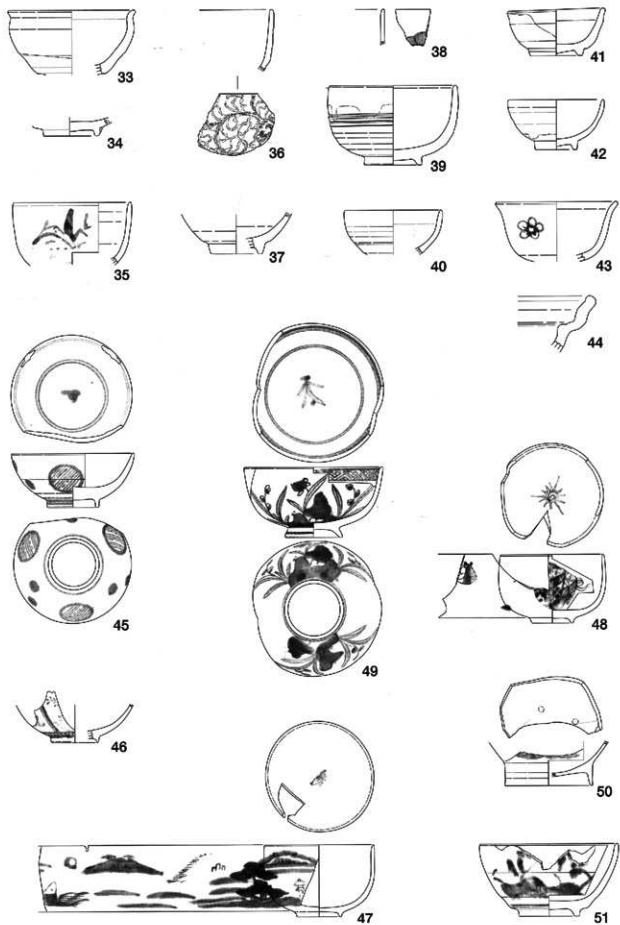
図版9 V面平面・断面図





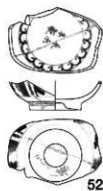
图版11 遺物実測図(1/3)

0 1:3 10cm



图版12 遺物実測図(1/3)

0 1:3 10cm



52



53



60



59



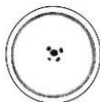
54



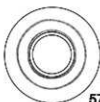
55



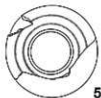
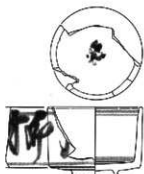
56



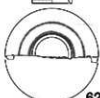
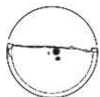
61



57



58

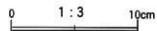


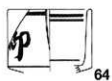
62



63

图版13 遗物实测图(1/3)





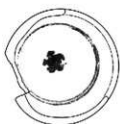
64



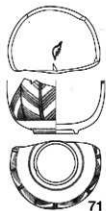
66



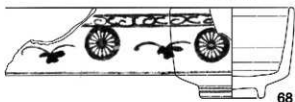
67



65



71



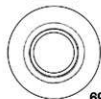
68



72



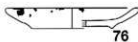
73



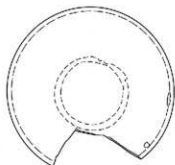
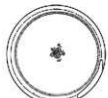
69



74



76



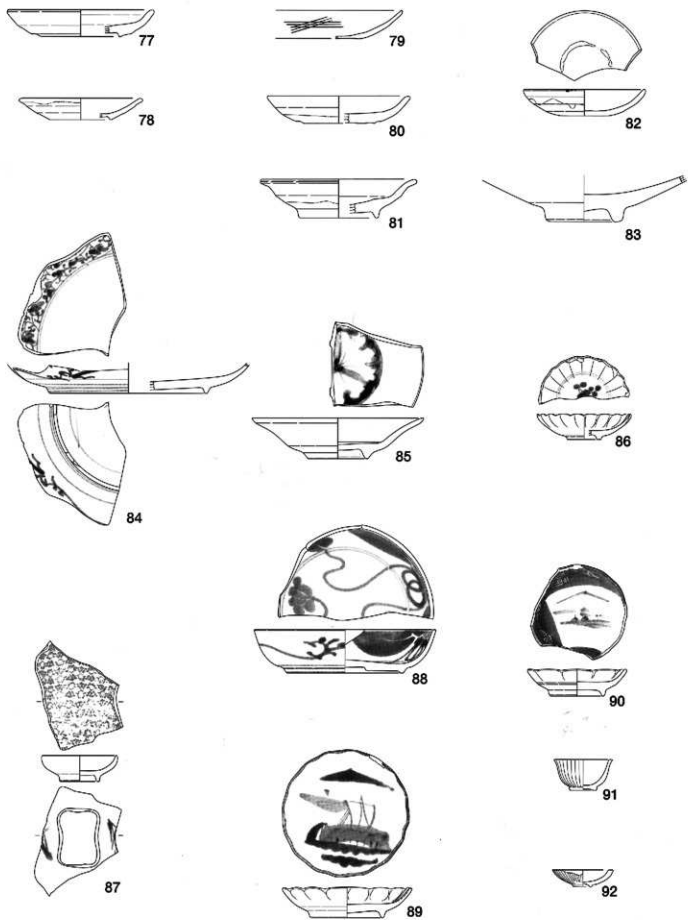
75



70

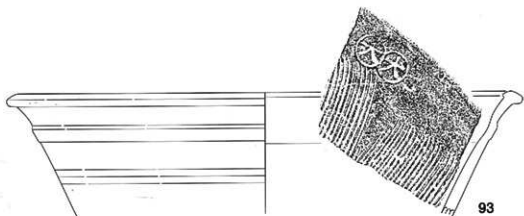
图版14 遺物実測図(1/3)

0 1:3 10cm



图版15 遺物実測図(1/3)

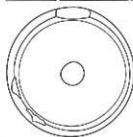
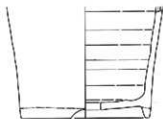
0 1:3 10cm



93



94



96



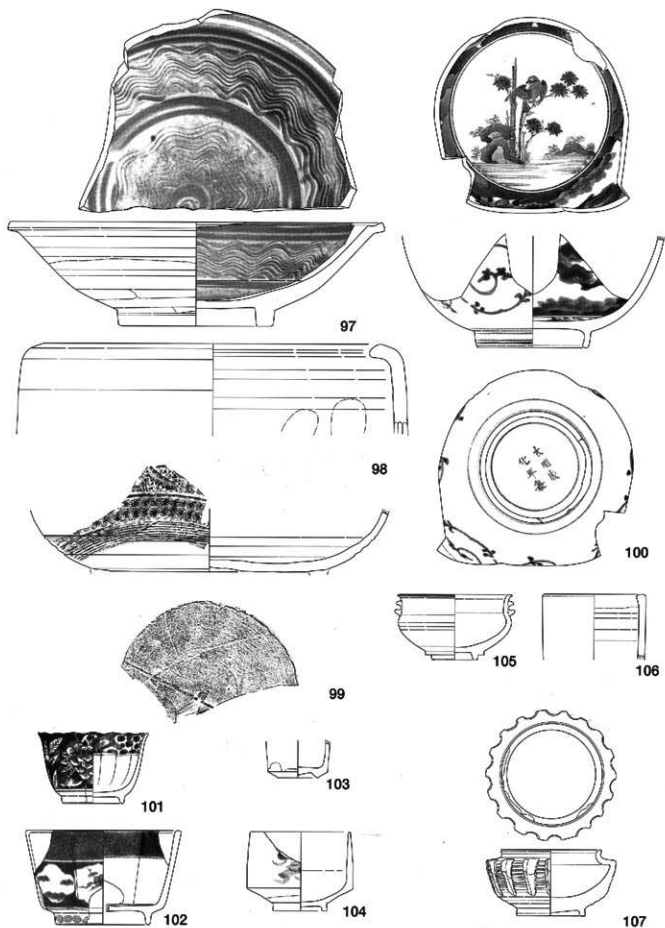
95



図版16 遺物実測図(1/3)

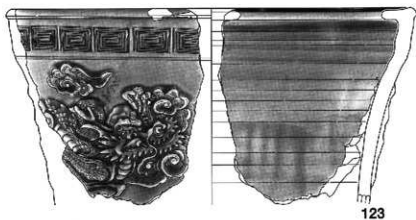
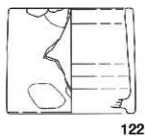
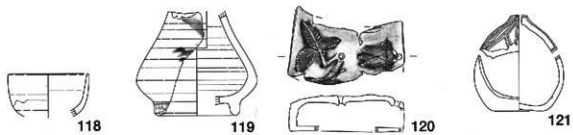
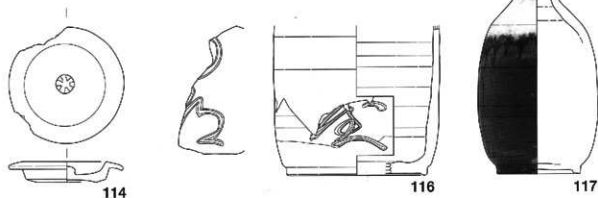
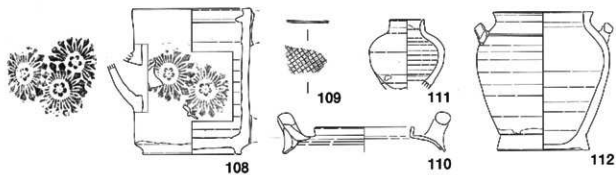
0 1:3 10cm





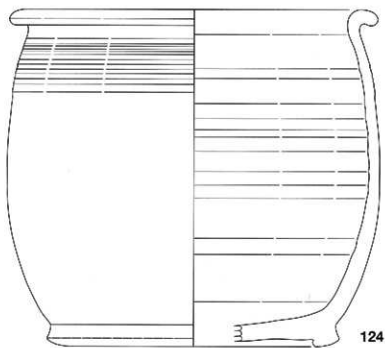
图版17+ 遗物实测图(1/3)

0 1:3 10cm



图版18 遺物実測図(1/3)

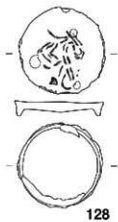
0 1:3 10cm



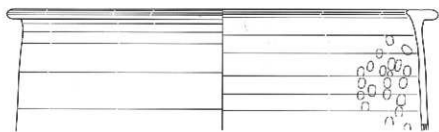
124



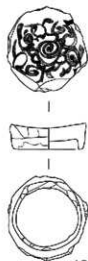
127



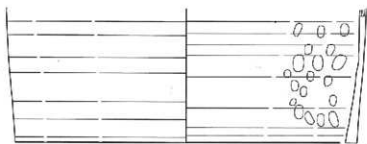
128



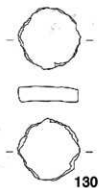
125



129



126

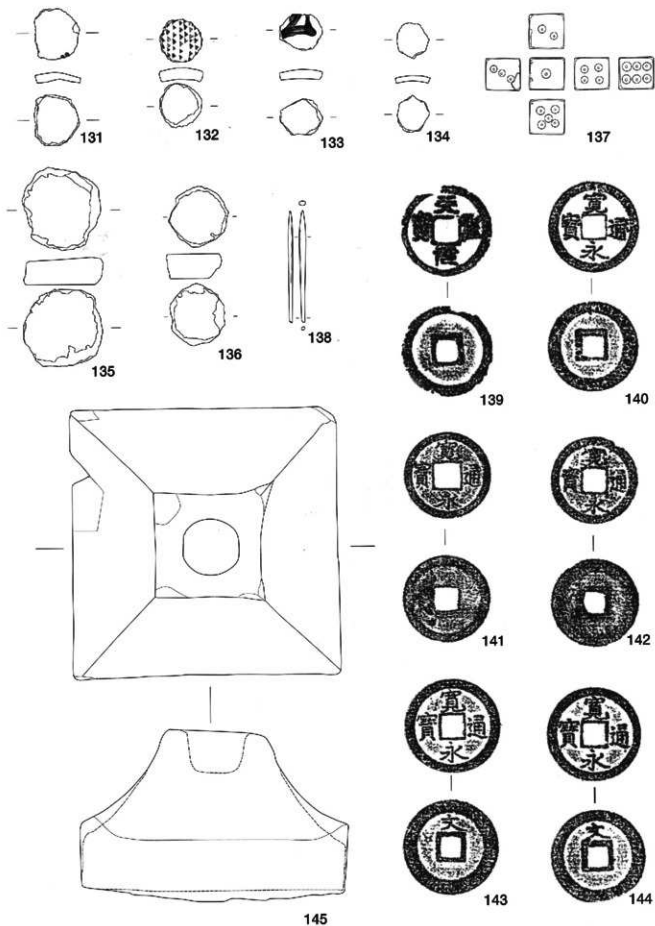


130

0 1:3 10cm

0 1:6 20cm

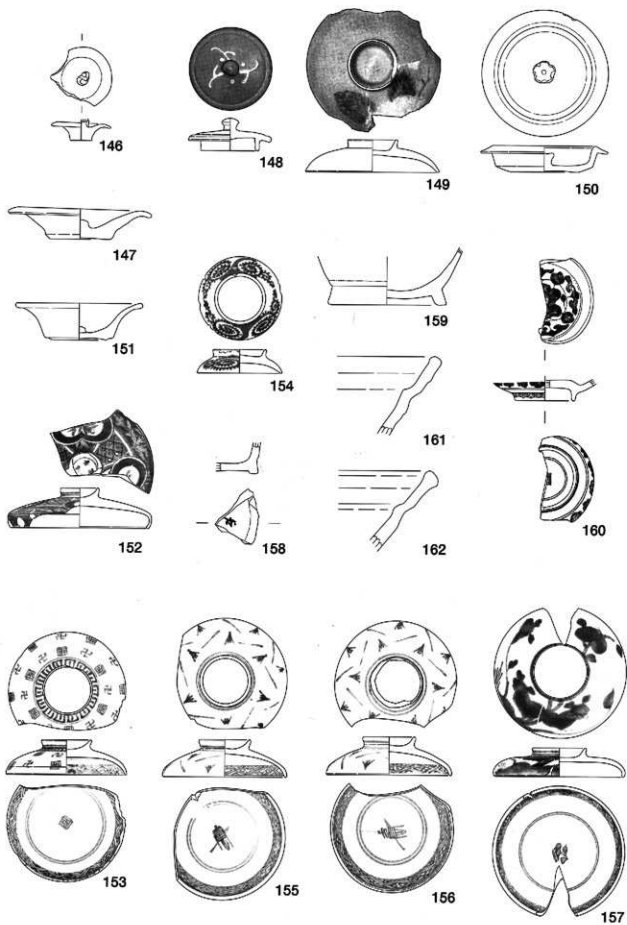
図版19 遺物実測図(125・126は1/6、他は1/3)



図版20 遺物実測図(137・139・140・141・142・144は原寸、他は1/3)

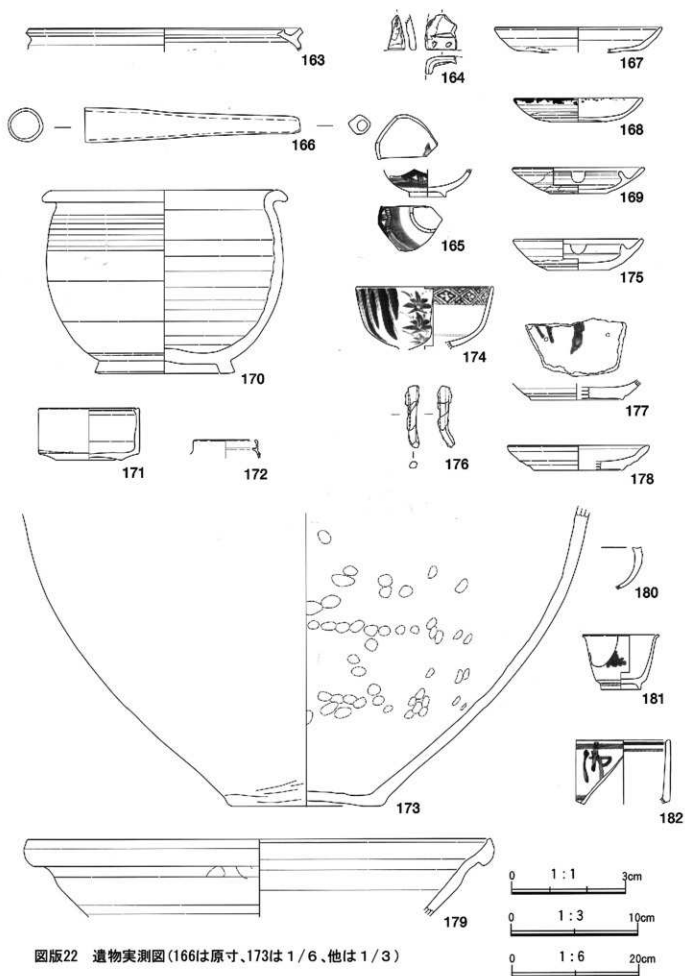
0 1:1 3cm

0 1:3 10cm

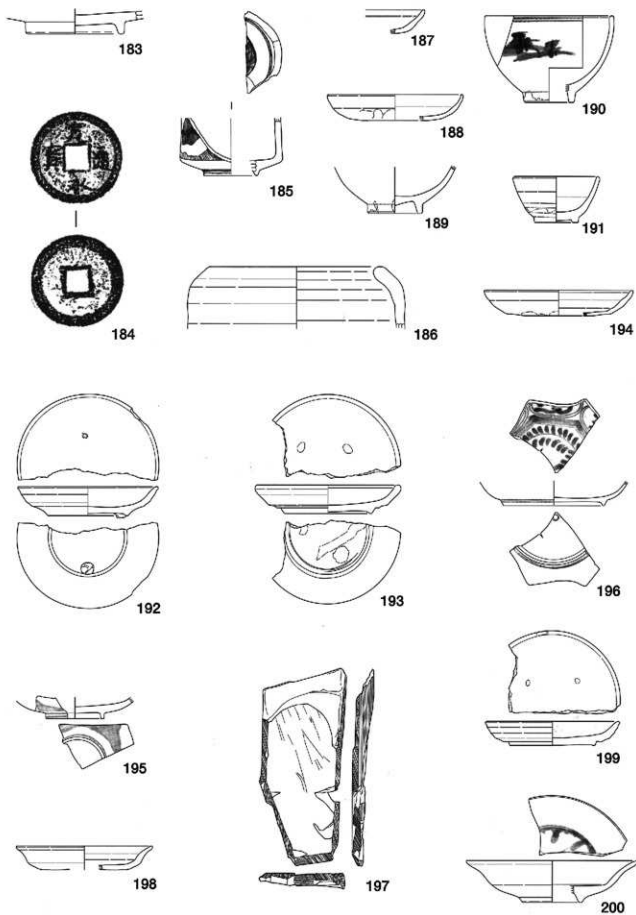


图版21 遺物実測図(1/3)

0 1:3 10cm



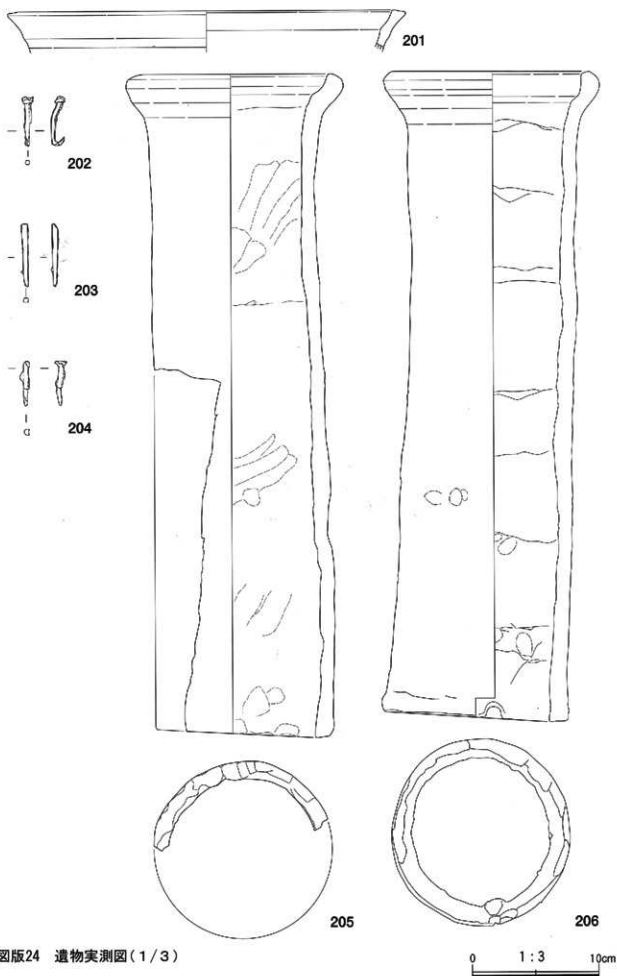
図版22 遺物実測図(166は原寸、173は1/6、他は1/3)



図版23 遺物実測図(184は原寸、他は1/3)

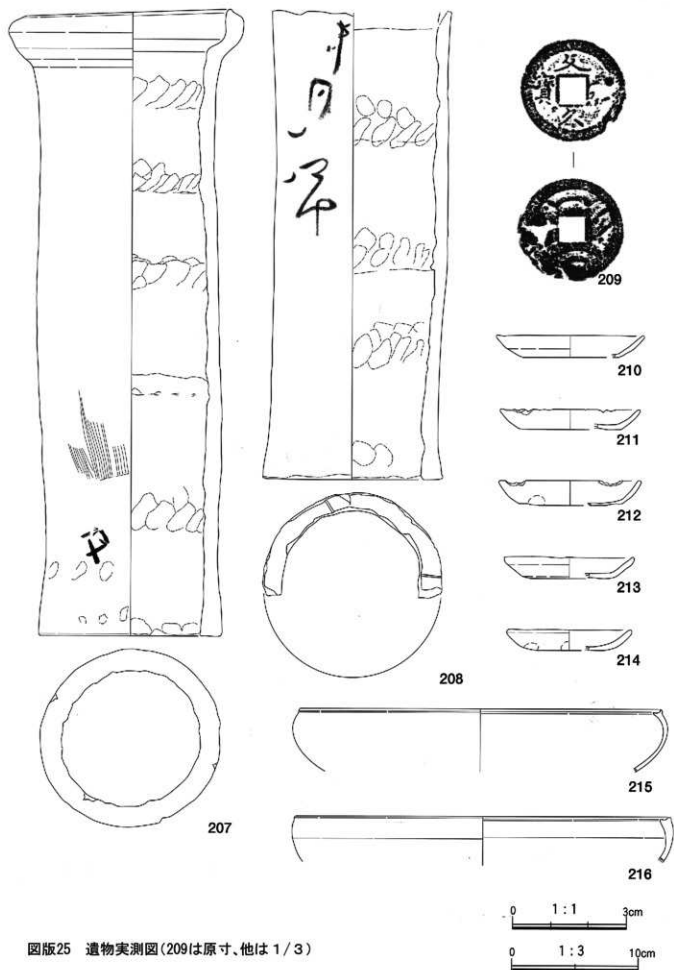
0 1:1 3cm

0 1:3 10cm

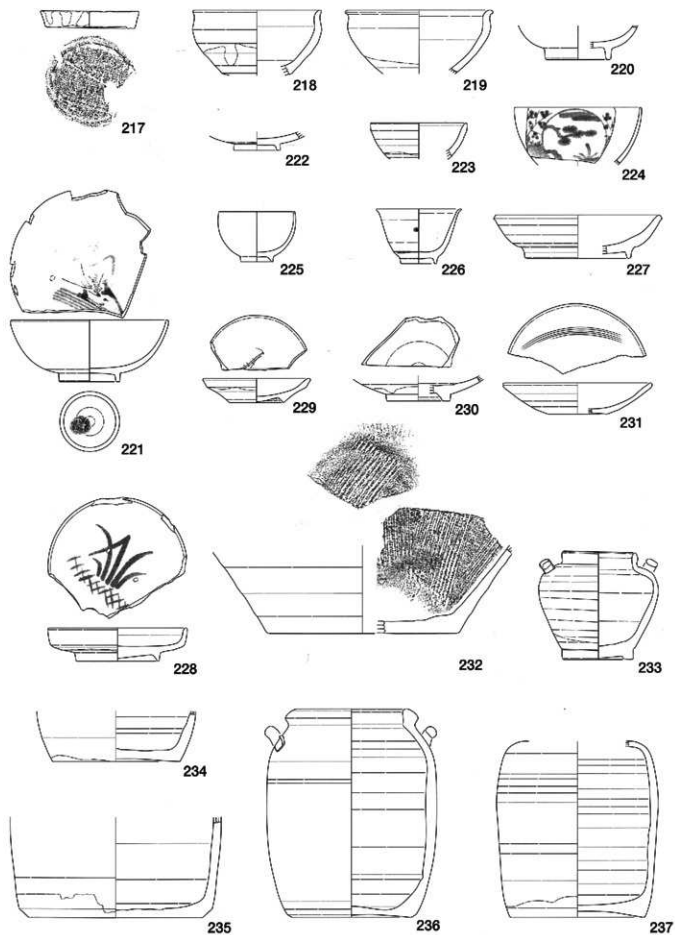


図版24 遺物実測図(1/3)



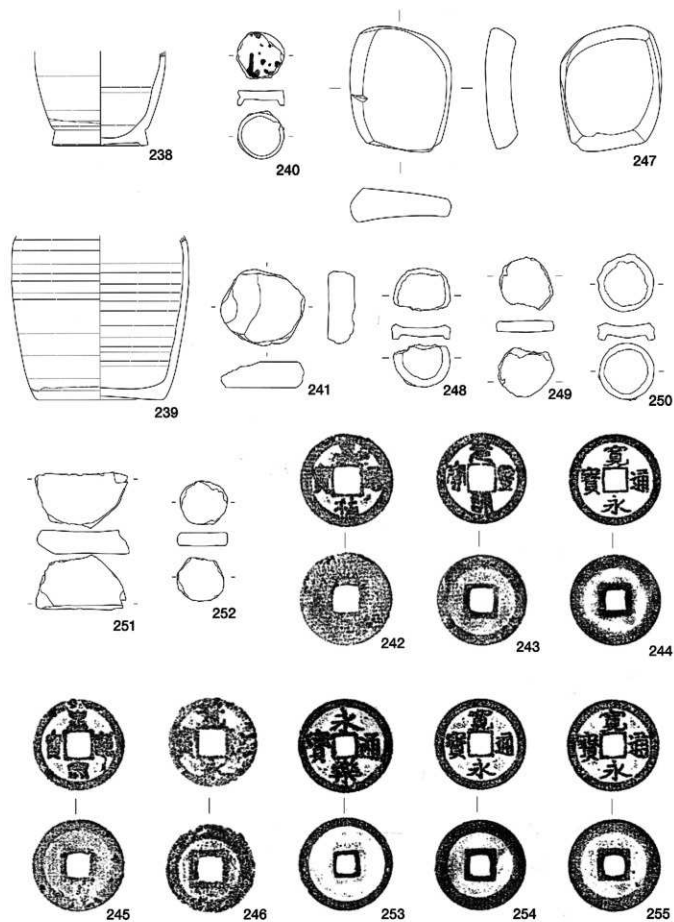


図版25 遺物実測図(209は原寸、他は1/3)

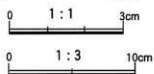


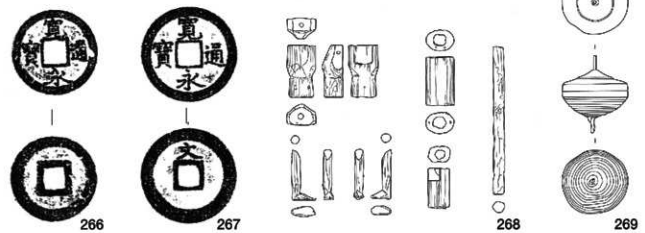
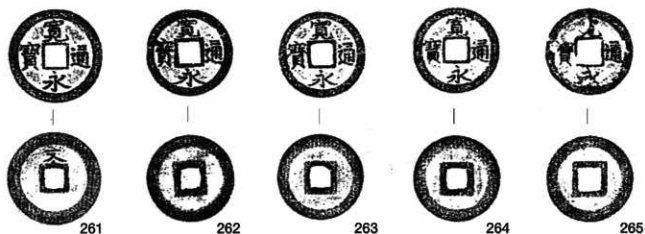
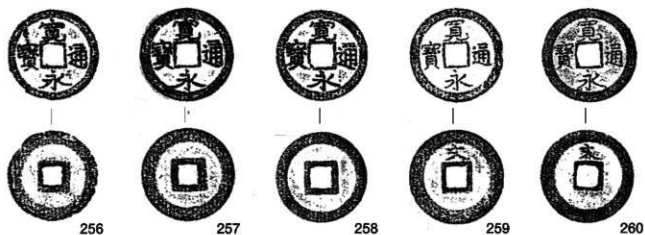
図版26 遺物実測図(1/3)

0 1:3 10cm

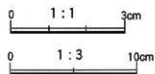


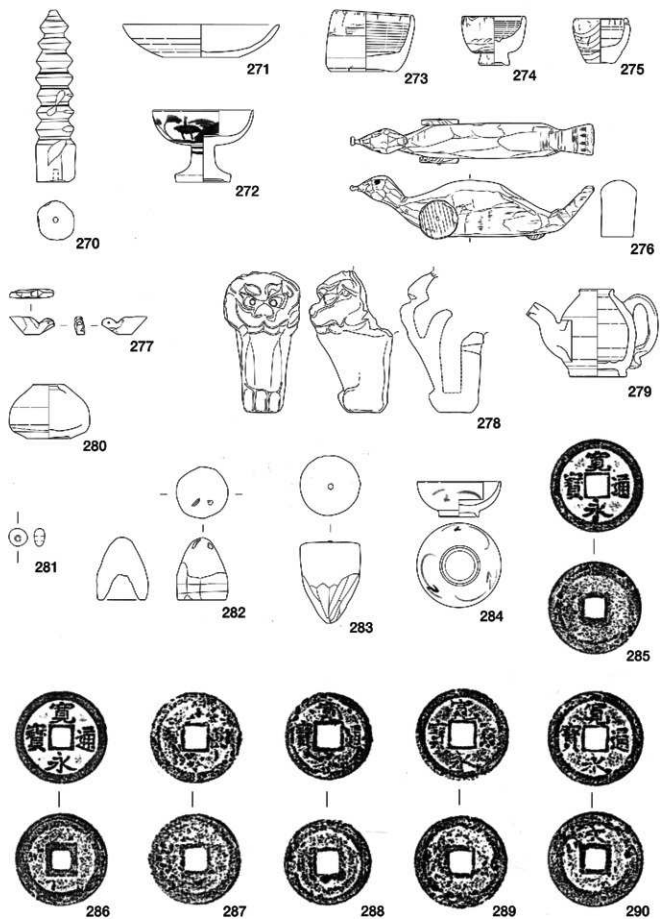
図版27 遺物実測図(242・243・244・245・246・253・254・255は原寸、他は1/3)





図版28 遺物実測図(268・269は1/3、他は原寸)

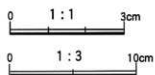
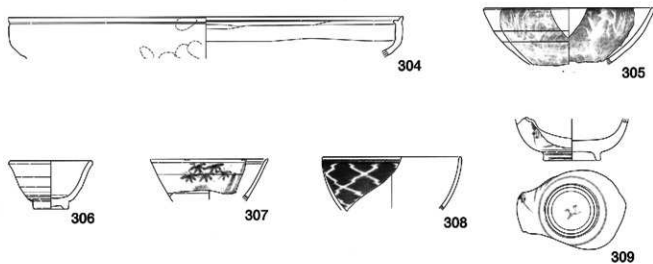
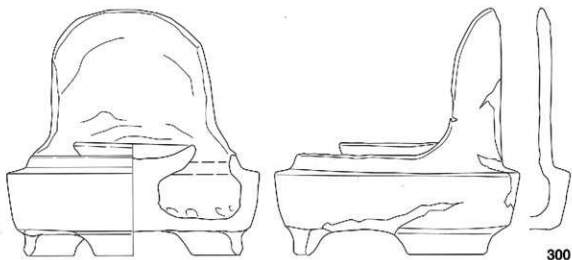
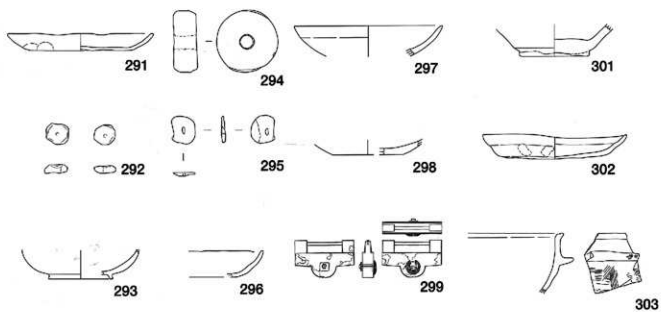




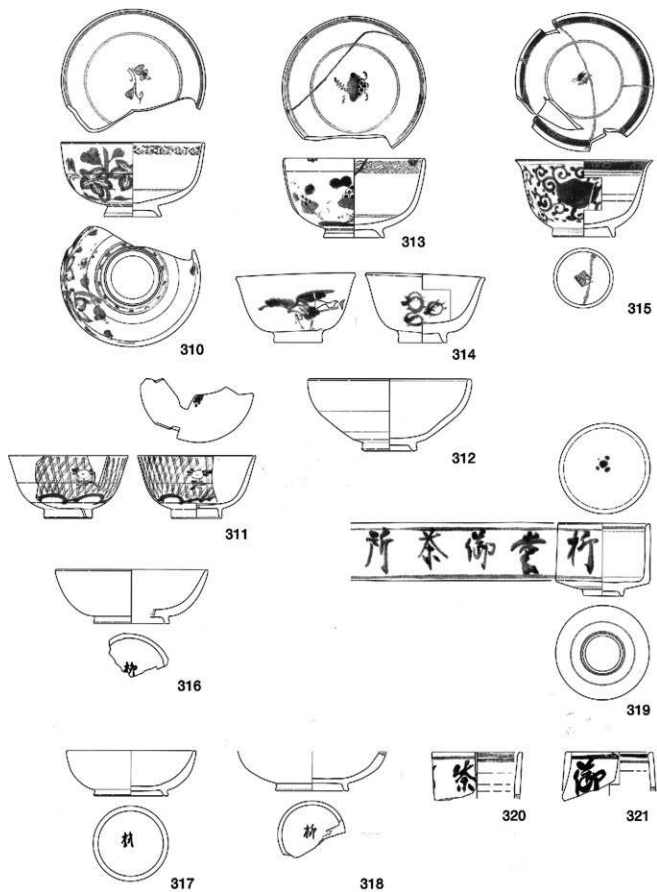
図版29 遺物実測図(281・285・286・287・288・289・290は原寸、他は1/3)

0 1:1 3cm

0 1:3 10cm

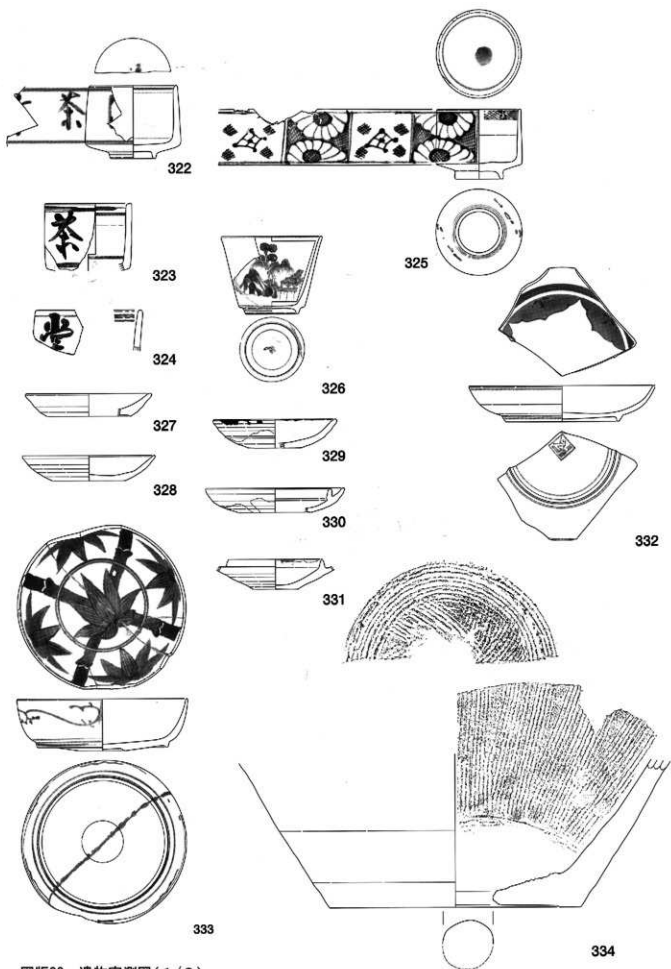


図版30 遺物実測図(292・295は原寸、他は1/3)



图版31 遗物实测图(1/3)

0 1:3 10cm



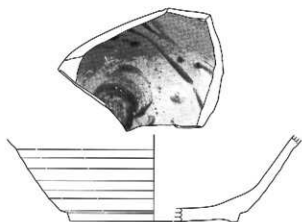
図版32 遺物実測図(1/3)

0 1:3 10cm

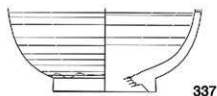




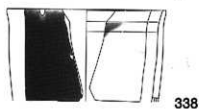
335



336



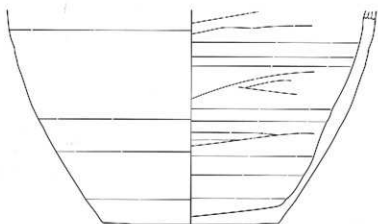
337



338



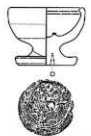
339



340



342

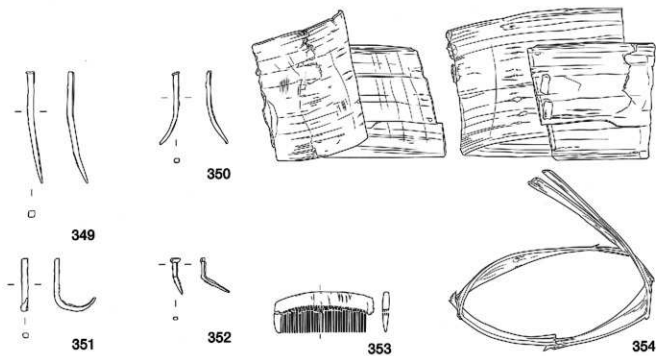
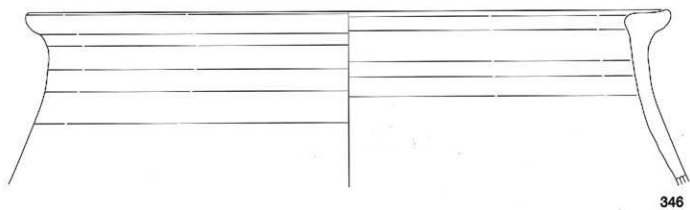
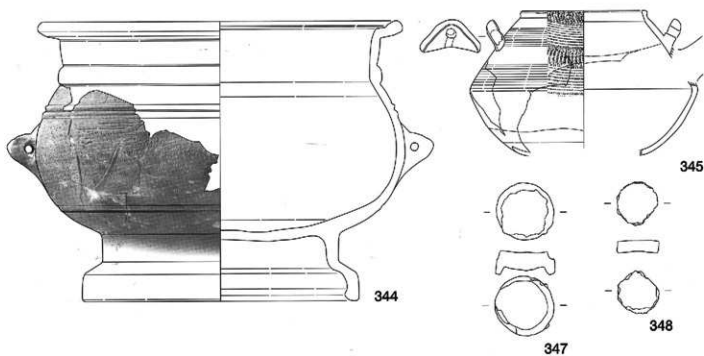


343



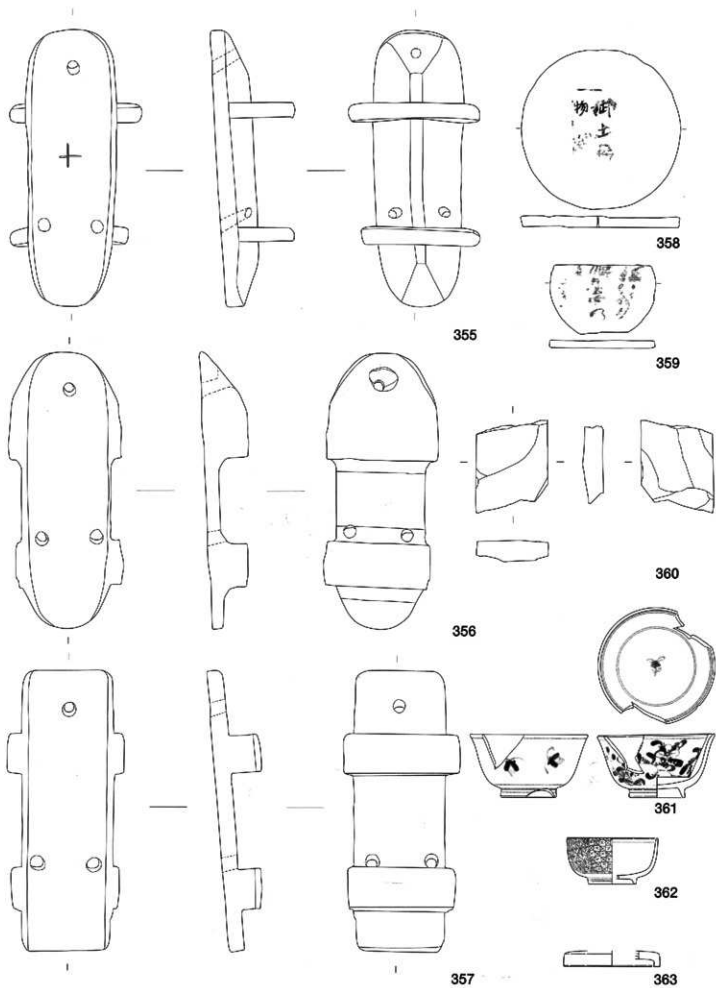
341





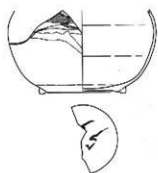
图版34 遺物実測図(1/3)

0 1:3 10cm



图版35 遺物実測図(1/3)

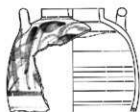
0 1:3 10cm



364



365



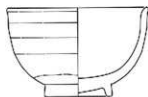
366



367



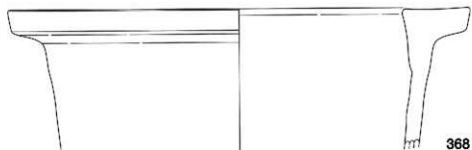
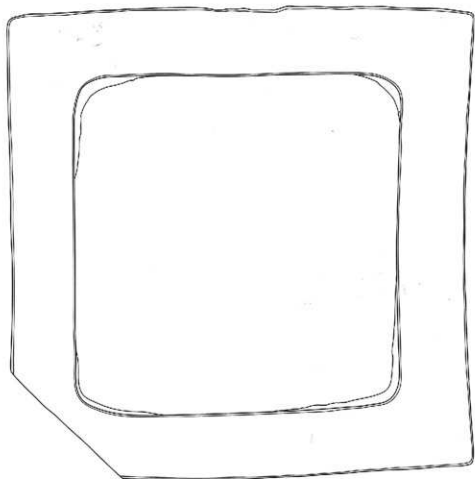
369



370



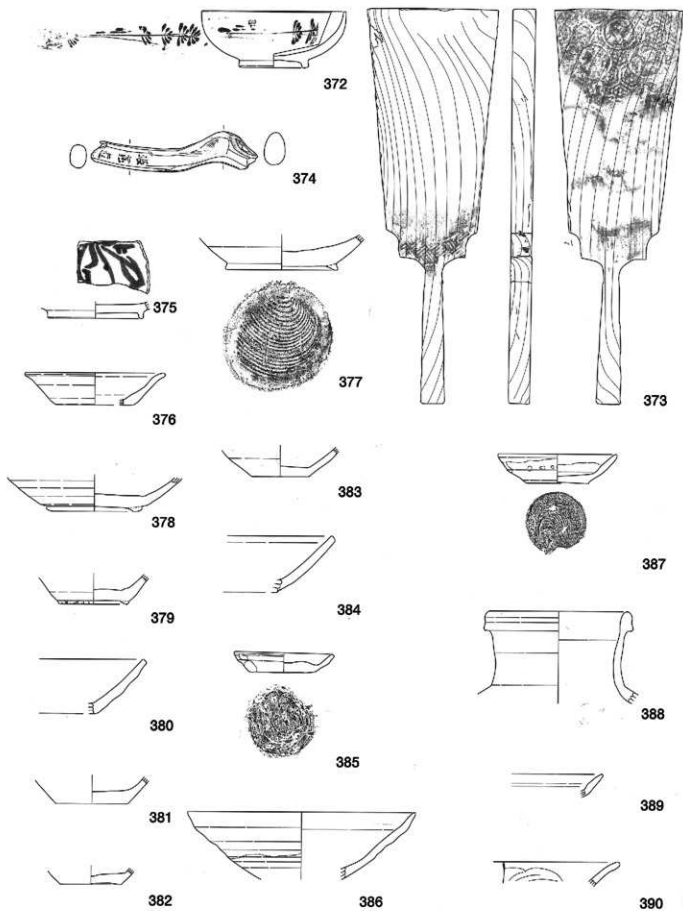
371



368

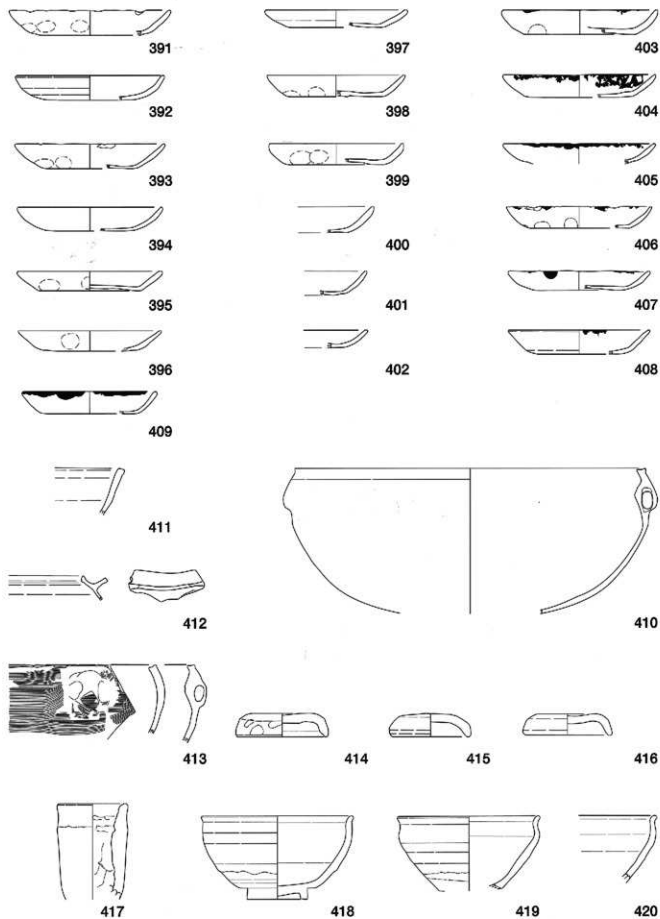
图版36 遺物実測図(1/3)

0 1:3 10cm

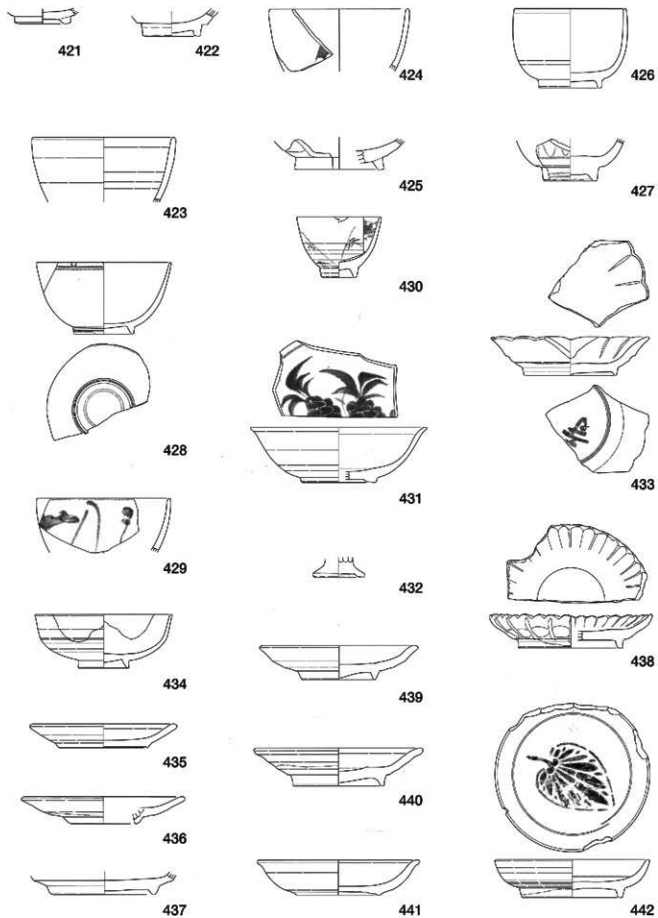


图版37 遗物实测图(1/3)

0 1:3 10cm

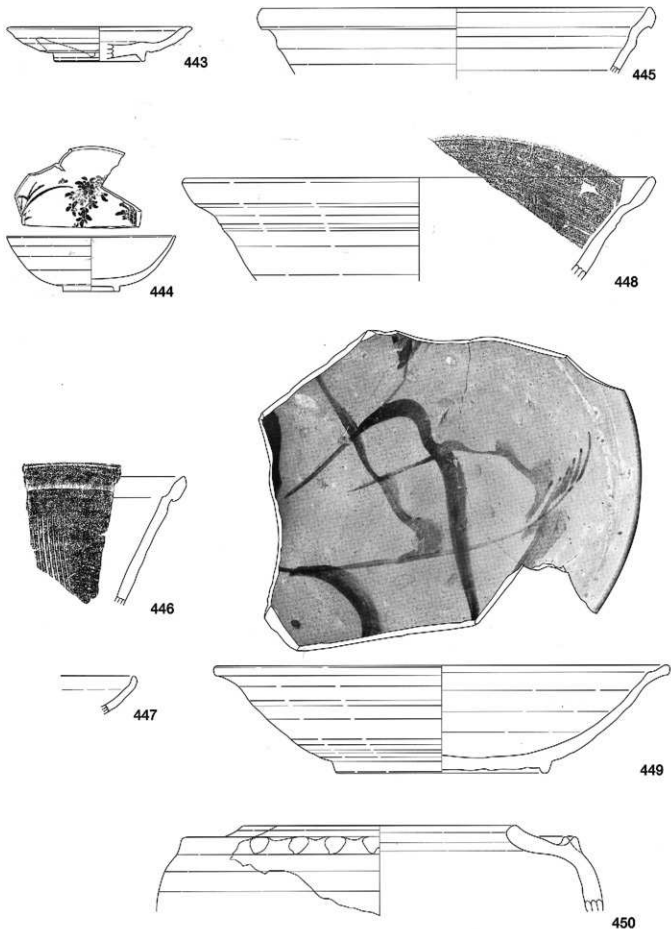


図版38 遺物実測図(1/3)



图版39 遺物実測図(1/3)

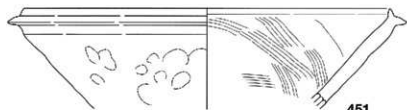
0 1:3 10cm



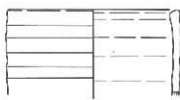
图版40 遺物実測図(1/3)

0 1 : 3 10cm

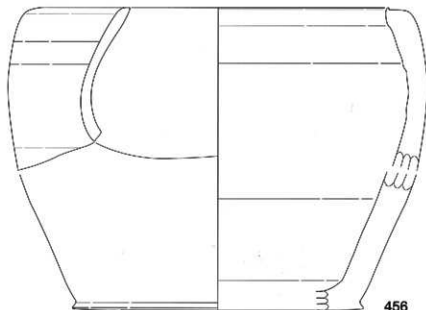




451



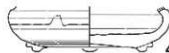
452



456



453



454



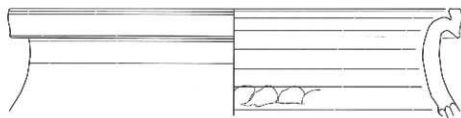
455



458



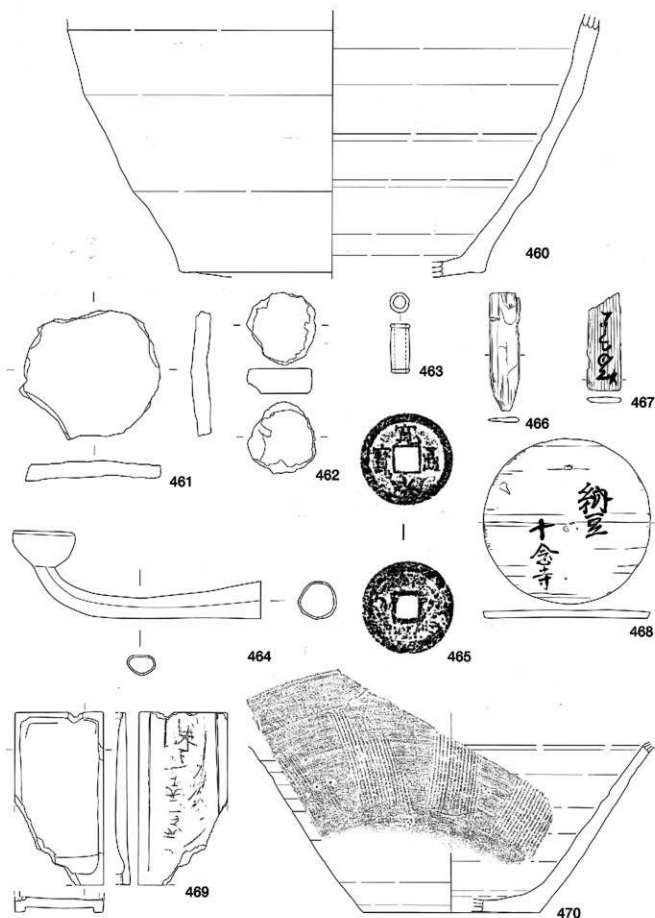
457



459

图版41 遺物実測図(1/3)

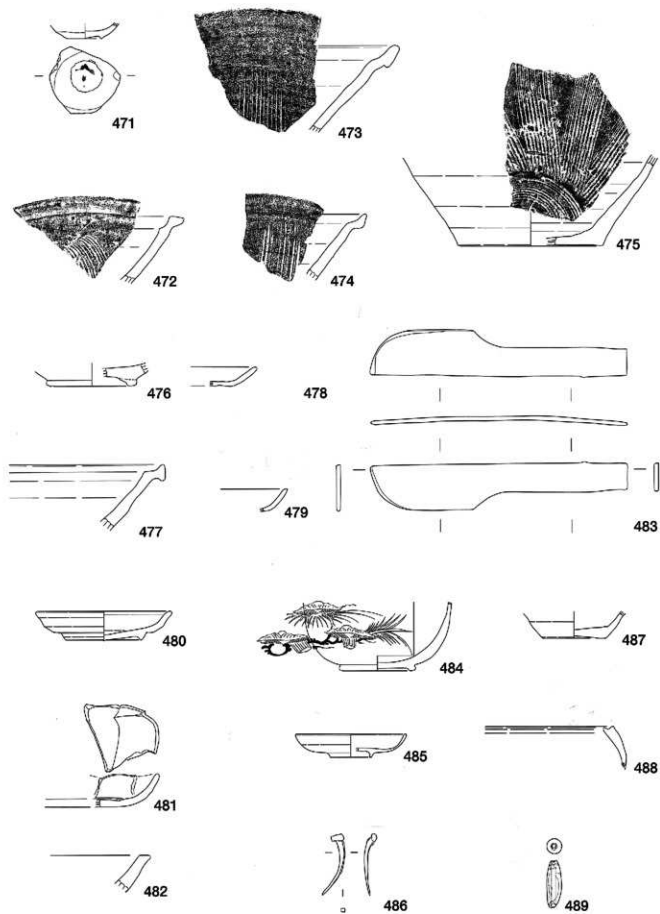




図版42 遺物実測図(464・465は原寸、他は1/3)

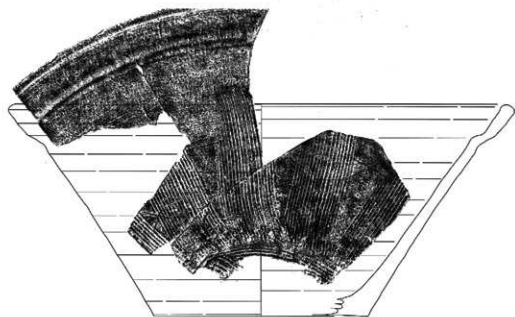
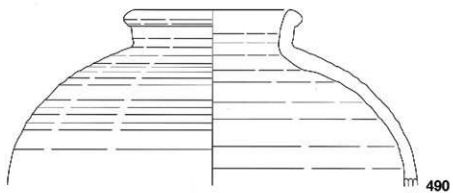
0 1:1 3cm

0 1:3 10cm

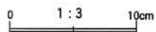


图版43 遺物実測図(1/3)

0 1:3 10cm



图版44 遺物実測図(1/3)

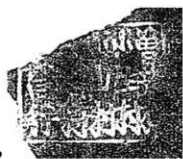




491



492



494



493



495



496



497



498



499



500



501



502



503



504



505



506



507



508



509



510



511



512



513



514



515



516



517



518



519



520



521



522



523



524



525



526



527



528



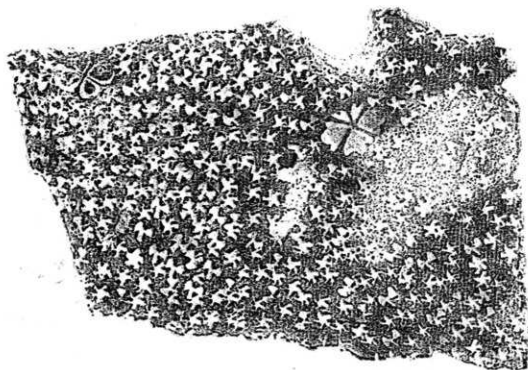
529



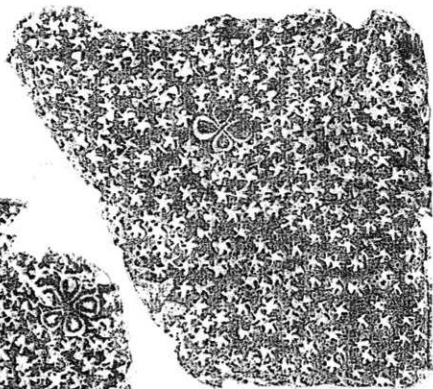
530

图版45 出土石刻印拓本

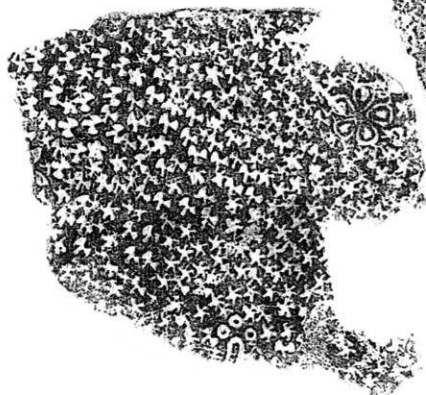
0 1:1 3cm



531



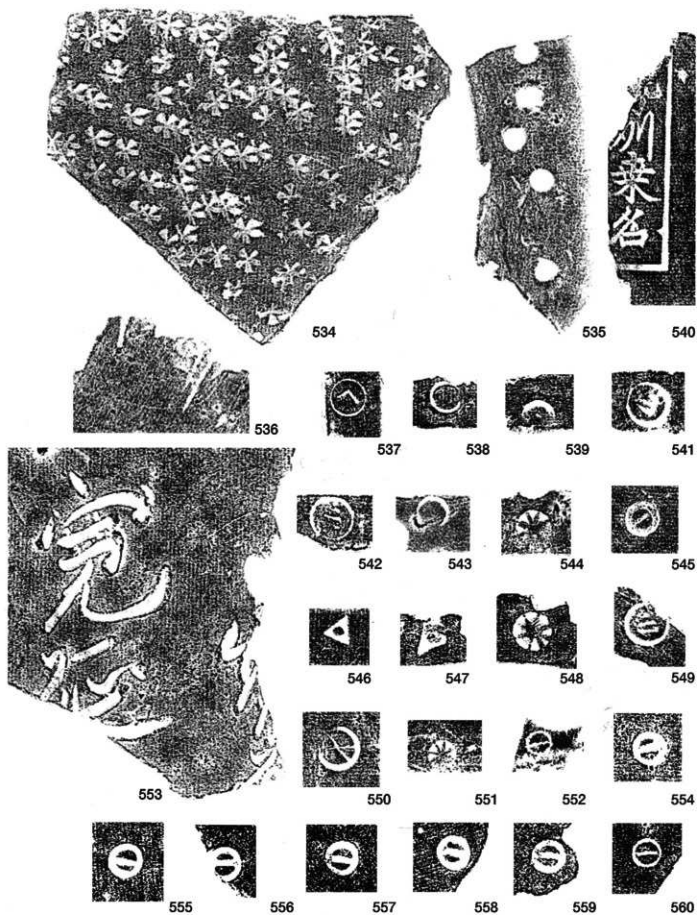
532



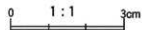
533

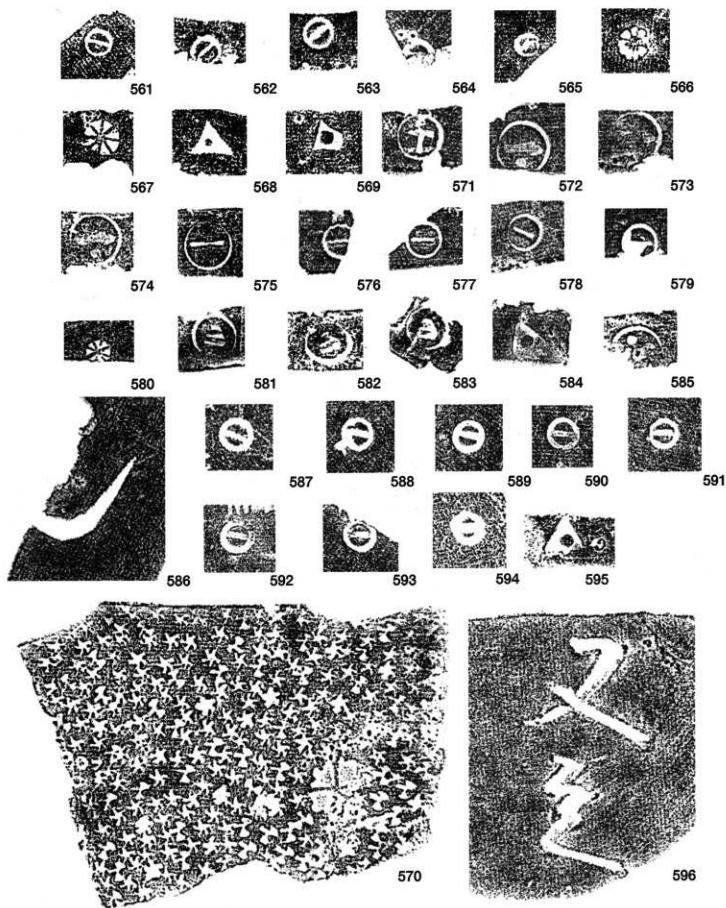
図版46 瓦へら書き拓本





図版47 出土瓦刻印拓本・瓦へら書き拓本





図版48 出土瓦刻印拓本・瓦へら書き拓本





Ⅲ面 土坑3 検出状況(西から)



Ⅲ面 土坑1 半截断面(西から)



Ⅲ面 土坑15 検出状況(東から)



Ⅲ面 竈4・3・2・1 検出状況(南から)



Ⅲ面 竈1 半截断面(西から)



Ⅲ面 竈3 半截断面(西から)



Ⅲ面 竈2 半截断面(西から)



Ⅲ面 作業風景

写真図版2



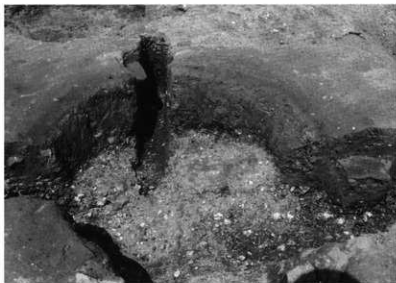
III面 窠4 半截断面(南から)



III面 窠3 断ち割り断面(南から)



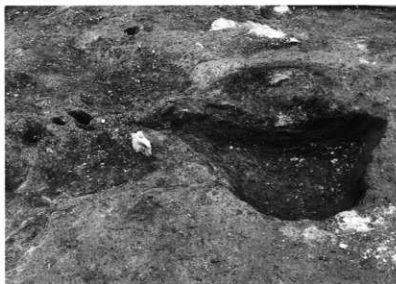
III面 窠2 断ち割り断面(南から)



Ⅲ面 窠 1 断ち割り断面(南から)



Ⅲ面 窠 5 断ち割り断面(南から)



Ⅲ面 窠 6 半截断面(南から)



Ⅲ面 竈7 瓦検出状況(西から)



Ⅲ面 竈7 完掘状況(南西から)



Ⅲ面 竈8・溝1断面(東から)



Ⅲ面 土坑17 検出状況(北から)



Ⅲ面 土坑17 半截状況(西から)



Ⅲ面 土管列 検出状況



IV面 全景(北から)



IV面 墓 近景(南東から)

写真図版 7



IV面 墓 木棺14 検出状況(北から)



IV面 墓 木棺26 中板除去後の検出状況(北から)



IV面 墓 木棺19 検出状況(北から)



IV面 作業風景



IV面 墓 木棺25・23・15・16 検出状況(北から)



IV面 土坑1 半截・検出状況(北から)



IV面 墓 木棺3・26・4 検出状況(南から)



IV面 土坑1 遺物検出状況

写真図版 8





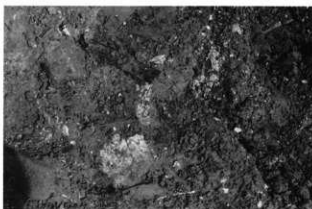
IV面 作業風景



調査区西向き壁



IV面 土坑3 半截断面(西から)



V面 包含層 火葬骨出土状況(南から)



IV面 石列 検出状況(東から)



V面 全景(南西から)



IV面 瓦列 検出状況(北から)



V面 土坑2 検出状況(南西から)

写真図版 9



14



53



101



36



57



101



39



62



107



47



69



112



51



70



117



52



100



120



52



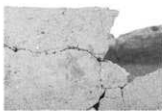
100



121



123



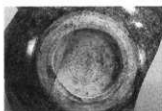
207



274



137



221



275



138



233



276



148



236



278



164



268



278



188



272



279



191



273



280



281



315



341



284



316



344



299

317 (右)  
318 (左)

353



300



319



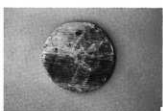
354



302



325



358



312



326



359



313



334



361



366



387



457



370



430



458



371



433



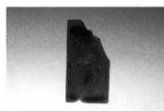
468



373



433



469



373



434



469



374



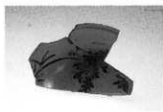
442



485



385



444



490



写真図版14 近世人骨

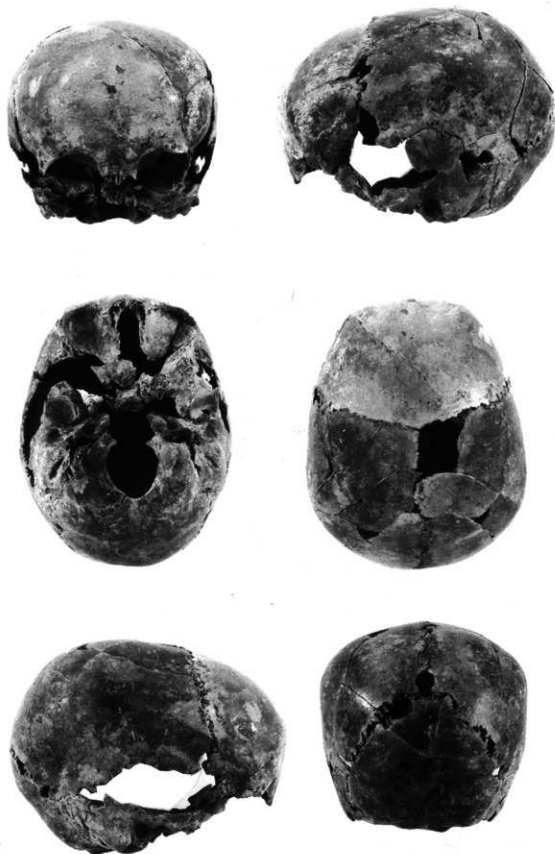


写真図写真図版15 近世人骨



写真図版16 近世人骨



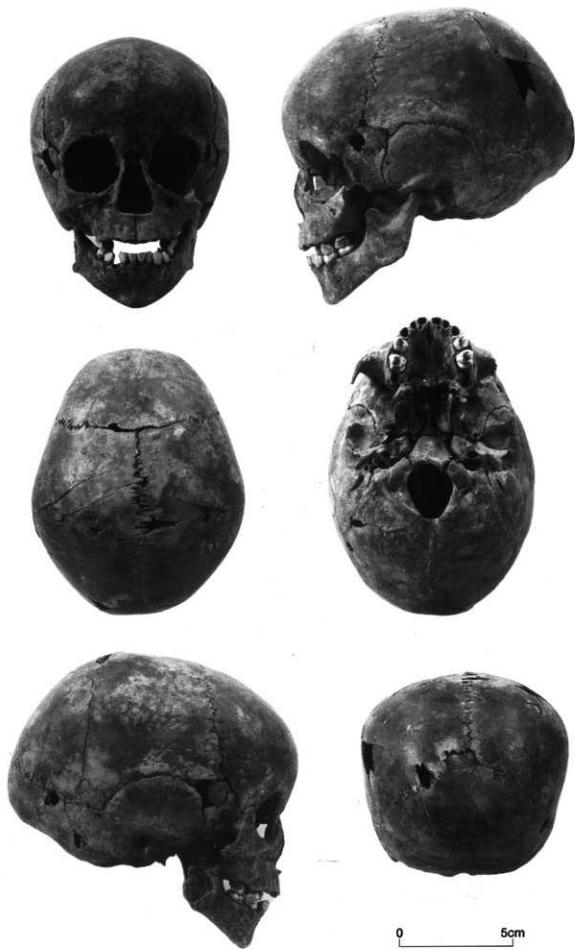


0 5cm

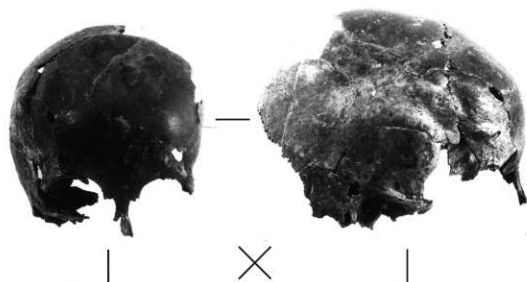
写真図版17 近世人骨



写真図版18 近世人骨



写真図版19 近世人骨

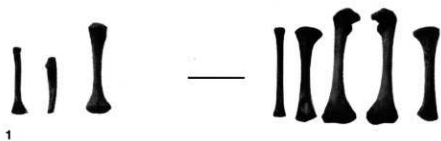


1



2

0 5cm



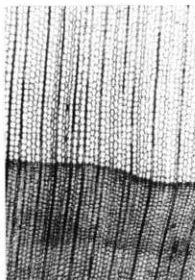
0 5cm



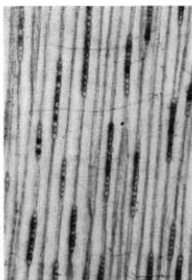
0 5cm

写真図版22 近世人骨

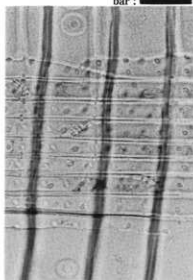
bar: 



1a モミ属(横断面)  
桶43② bar:0.5mm



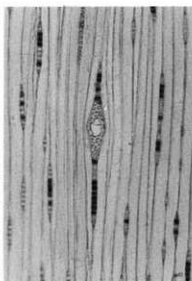
1b モミ属(接線断面)  
桶43② bar:0.2mm



1c モミ属(放射断面)  
桶43② bar:0.05mm



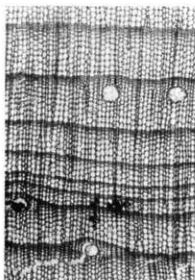
2a トウヒ属(横断面)  
桶30① bar:0.2mm



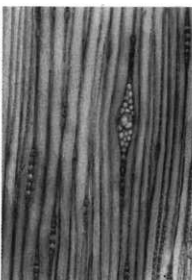
2b トウヒ属(接線断面)  
桶30① bar:0.2mm



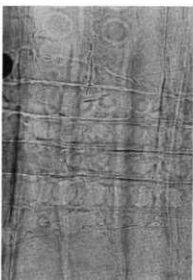
2c トウヒ属(放射断面)  
桶30① bar:0.05mm



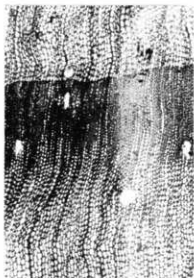
3a マツ属単維管束亜属(横断面)  
桶36② bar:0.5mm



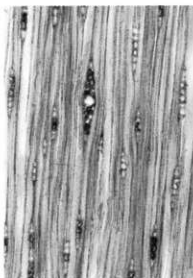
3b マツ属単維管束亜属(折線断面)  
桶36② bar:0.2mm



3c マツ属単維管束亜属(放射断面)  
桶36② bar:0.05mm



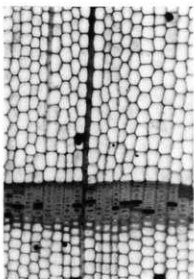
4a アカマツ(横断面)  
桶38② bar:0.5mm



4b アカマツ(接線断面)  
桶38② bar:0.2mm



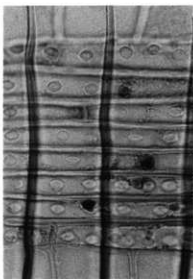
4c アカマツ(放射断面)  
桶38② bar:0.05mm



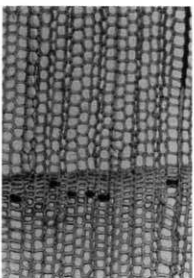
5a スギ(横断面)  
桶40② bar:0.2mm



5b スギ(接線断面)  
桶40② bar:0.2mm



5c スギ(放射断面)  
桶40② bar:0.04mm



6a クロベ(横断面)  
25③ bar:0.5mm

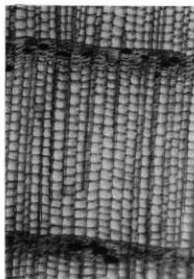


6b クロベ(折線断面)  
桶25③ bar:0.2mm

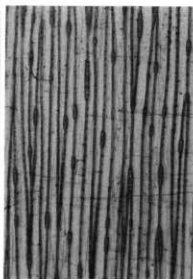


6c クロベ(放射断面)  
桶25③ bar:0.05mm

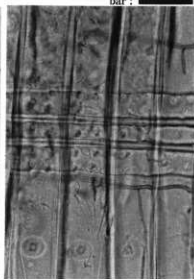




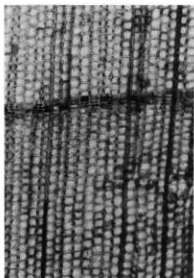
7a アスナロ(横断面)  
桶 1 ① bar:0.2mm



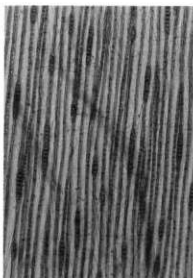
7b アスナロ(接線断面)  
桶 1 ① bar:0.2mm



7c アスナロ(放射断面)  
桶 1 ① bar:0.04mm



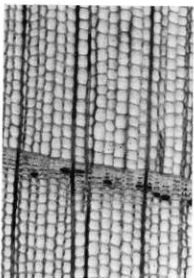
8a ヒノキ(横断面)  
桶 3 ③ bar:0.2mm



8b ヒノキ(接線断面)  
桶 3 ③ bar:0.2mm



8c ヒノキ(放射断面)  
桶 3 ③ bar:0.04mm



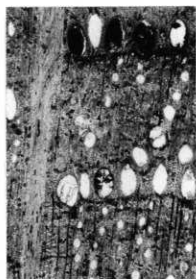
9a サワラ(横断面)  
桶 1 ⑦ bar:0.2mm



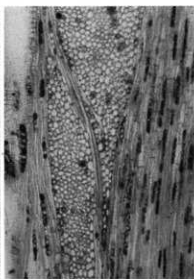
9b サワラ(折線断面)  
桶 1 ⑦ bar:0.2mm



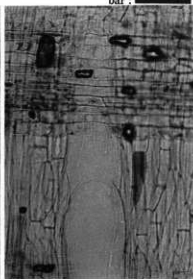
9c サワラ(放射断面)  
桶 1 ⑦ bar:0.05mm



10a クヌギ節(横断面)  
桶12④ bar:0.5mm



10b クヌギ節(接線断面)  
桶12④ bar:0.2mm



10c クヌギ節(放射断面)  
桶12④ bar:0.1mm



11a クリ(横断面)  
5032後歯 bar:0.5mm



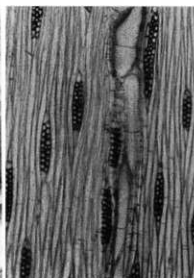
11b クリ(接線断面)  
5032前歯 bar:0.2mm



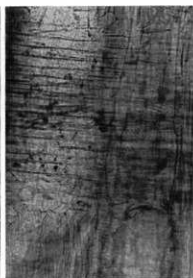
11c クリ(放射断面)  
5032前歯 bar:0.1mm



12a クスノキ(横断面)  
5037 bar:0.5mm



12b クスノキ(折線断面)  
5037 bar:0.2mm

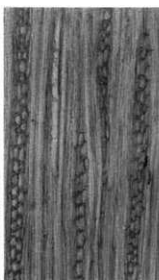


12c クスノキ(放射断面)  
5037 bar:0.1mm

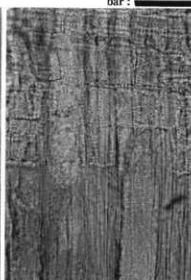
bar: 



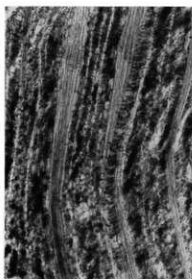
13a ウツギ属(横断面)  
桶16①の木釘 bar:0.5mm



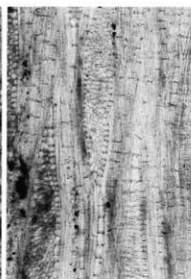
13b ウツギ属(接線断面)  
桶16①の木釘 bar:0.2mm



13c ウツギ属(放射断面)  
桶16①の木釘 bar:0.05mm



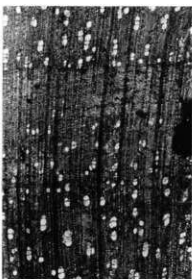
14a モチノキ属?(横断面)  
桶14中身数珠 bar:0.5mm



14b モチノキ属?(接線断面)  
桶14中身数珠 bar:0.2mm



14c モチノキ属?(放射断面)  
桶14中身数珠 bar:0.1mm



15a エゴノキ属(横断面)  
5038 bar:0.5mm



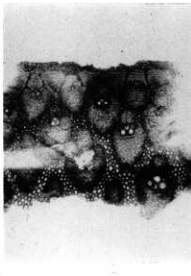
15b エゴノキ属(折線断面)  
5038 bar:0.2mm



15c エゴノキ属(放射断面)  
5038 bar:0.05mm



17 タケ類(横断面)  
桶1 笹 bar:0.5mm



17 タケ類(横断面)  
桶1 底板木釘 bar:0.5mm



18 タケ類(縦断面)  
桶21 底板木釘 bar:0.5mm



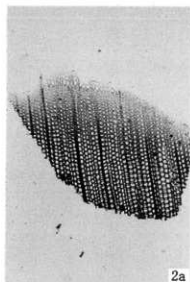
1a



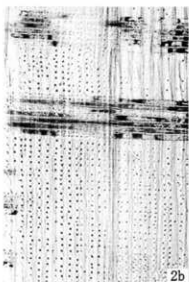
1b



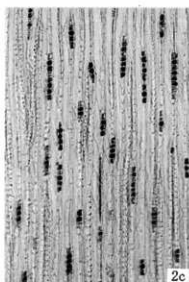
1c



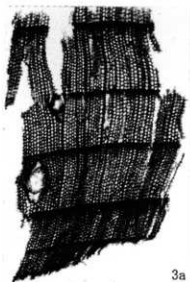
2a



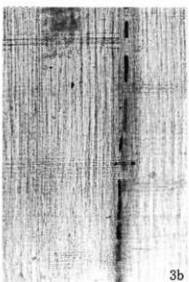
2b



2c



3a



3b

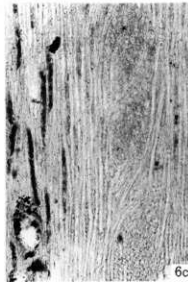
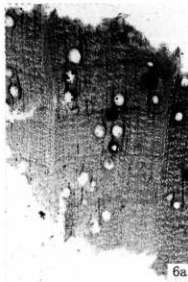
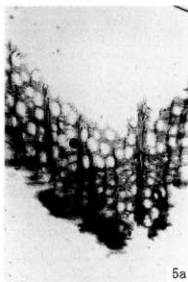
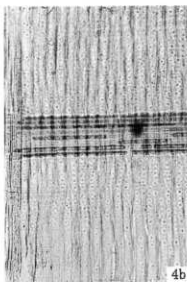


3c

1. モミ属 (373)
2. ヒノキ (268)
3. サワラ (353)

a. 木口、b. 径目、c. 板目

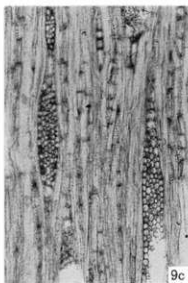
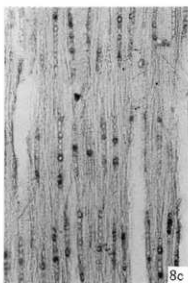
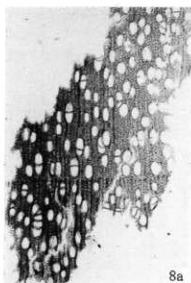
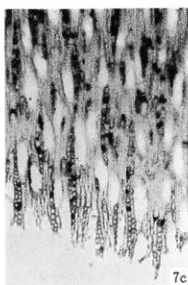
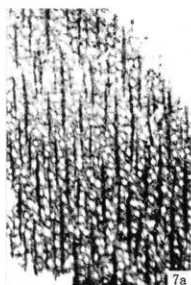
200  $\mu$ m : a  
200  $\mu$ m : b, c



4. アスナロ (359)  
 5. フナ属 (372)  
 6. コナラ属アカガシ亜属 (374)  
 a. 木口、b. 柱目、c. 板目

200 μm : a  
 200 μm : b, c

写真図版30 木製品樹種



7. バラ科ナシ亜科(491)

8. トチノキ(316)

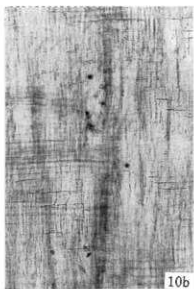
9. モチノキ属(492)

a. 木口、b. 径目、c. 板目

200 μm: a  
200 μm: b, c



10a



10b



10c

200  $\mu$ m : 10a  
200  $\mu$ m : 10b, 10c



11



12



13a



13b

1cm  
(11-13)

10. エゴノキ属(274)  
11. 木製の数珠(292)  
12. バダイジュ(497)  
13. バダイジュ(497)

a. 木口、b. 柀目、c. 板目



# 報告書抄録

ふりがな	くわなじょうかまちいせきはつくつちょうさほうこくしょ かやまきぢゅうじゅうさん(ほうじょうじ)ちてん						
書名	桑名城下町遺跡発掘調査報告書 茅町93(法盛寺)地点						
編著者名	平野亜紀、長沼毅、勝亦貴之、梶ヶ山真里、大谷江里、馬場悠男、植田弥生						
編集機関	桑名市教育委員会						
所在地	511-8601 三重県桑名市中央町二丁目37番地 TEL.0594-24-1361						
発行年月日	西暦2002年3月25日						
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村 遺跡番号					
くわなじょうかまち 桑名城下町 遺跡 ふりがな 茅町93地点	くわなじょうかまち 桑名市萱町 93番地	242055 No.99	35° 3' 25"	136° 41' 50"	19990528～ 20020325	540m <sup>2</sup>	本堂建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
桑名城下町 遺跡	集落跡	中世 近世		建物跡 竈 墓 土坑 溝		近世陶磁器 瓦 山茶碗	

三重県桑名市

桑名城下町遺跡発掘調査報告書

萱町 93 (法盛寺) 地点

2002年3月25日

編集・発行 桑名市教育委員会